

島津家歴代制度卷之六十九

自寛政八年九月

至文化十一年十二月

(卷之二五 一四四〇)

五八七五

(朱書)寛政八年九月
一十一日

右八、(斎草等)芳蓮院様御忌日ニ付、御七回忌迄ハ御正忌日、

正・五・九月御忌日、御下国脇年頭・盆・歳暮・御発

駕前 御参詣、且又 御参詣無之砌モ 御留守年ニ付、

御家老 御代参被仰付候、

五八七六

(朱書)同九月
一毎月十一日

右、芳蓮院様御忌日ニ付、御七回忌迄ハ御肴類進上並

御咎目事不被仰付、其外ノ儀ハ不及遠慮筋被仰付候、

五八七七

(朱書)同十一月
一大井村御抱屋敷

右、此節 (重要文)雅姫様へ被進候旨申来候、

(卷之三七 二七二〇)

五八七八

(朱書)同十一月
一今度御誕生ノ姫君様御事、(総力)綱姫様ト奉称、(家齊等)御台様

御養被仰出候段申来候、依之御名ノ字並(総力)□ト名付居候

者ハ可相改候、

五八七九

(朱書)同十二月

一乗之助様、御六男ノ御届被為濟候、

(卷之二六 一六三〇)

五八八〇

(朱書)寛政九年巳正月
一若君様御名 家慶公ト奉称候付、慶ノ文字、名並名乘

(卷之二九 一八五九)

用候儀、尤、同唱ニテモ遠慮可仕候、

五八八一

(朱書)同正月
一乗之助様 (斎草女)操姫様 御官参被為濟候付、此節ヨリ諸御

祝儀事其外ノ儀、(重要男)時之承様御同様被仰付候、

五八八二

一御府内御行列、当分御減少被仰付置候内、御跡御箱一

对八以来為持被成筈候旨申来候、

五八八三

一六月十一日

芳蓮院様御正忌日二付、御代參御家老、

右八、先達テ御代參等ノ儀申渡置候ヘトモ、此節右

之通被仰付候旨申来候、

五八八四

一六月十一日

芳蓮院様御正忌日二付、御精進日被相立候、左候テ、

御正忌日計御仕置ハ相除、其外ハ無御構、尤、月次御

忌日ハ都テ無御構候、右毎月御忌日、御七回忌迄ハ御

咎目事等不被仰付候旨申渡候ヘトモ、此節右之通被仰

付候段申来候、

(卷之二五 一四四一)

五八八五

一正月晦日 若殿様御発賀、

五八八六

一太守様ヘ丹羽左京太夫様御妹様御縁与御願書、先月廿

三日御用番様ヘ被差出候段御到来候、

五八八七

一丹羽左京太夫様、以来御両敬被仰合候旨申来候、

(卷之四八 三六四八)

五八八八

一今度御出生ノ御女子、於隣殿卜奉称候、

五八八九

一乗之助様、御庖瘡御順痘ノ如御虫積被差発、御太切被

為及候段御到来ノ処、御養生不被為叶、当月七日暁

御天亡被遊候段御到来候、

五八九〇

一乘之助様御法名 天苗院殿玉質潤光大禪童子

右之通、奉称候段申来候、

五八九一

(朱書)同四月

一若君様御事、先月朔日御元服御官位付、当日ヨリ大納

言様卜奉称、向後 大納言様・御台様卜申御順候旨被

仰渡候段申来候、

五八九二

(朱書)同四月

一今度 御台様御事、従三位 勅許被為在候旨先月二日

被仰渡候段御到来候、

五八九三

(朱書)同四月

一若殿様、御出府ノ上ハ 東御殿へ可被遊御座候へトモ、

御幼年ノ御事候間、此涯御中奥へ被為入候旨申来候、

五八九四

(朱書)同四月

一太守様へ丹羽左京大夫様御妹亭姫様御縁与、御願ノ通

被仰渡候付、亭ノ字並同唱ノ名付居候者ハ可相改候、

五八九五

(朱書)同四月

一当分 高輪御殿ノ地面

右、蓬山

一右同、御本丸ヨリ南方稻荷坂下迄

右、鶴ノ渡

一右同、向御屋敷

右、環江

右ノ通、相唱候様被 仰渡候段申来候、

五八九六

(朱書)同五月

一思召有之、(重兼男) 時之丞様御事、御内輪ニテハ奥平御名字

御用被成候旨申来候、

五八九七

(朱書)同五月

一玉仙院殿 心鏡院殿

(卷之二八 一七五二)

右、向後此殿文字相用候様被 仰出候、

五八九八

(朱書「同五月」
「宗宣」
「松壽院」)

一於隣殿御名順、心鏡院殿次二被 仰出候、

五八九九

(朱書「同五月」)

一御縁女様御儀、

(重意)

中将様御方へ御引取、追テ御婚姻被

為整度旨御願之通被仰渡候付、先月廿八日御引越、

中将様御惣方御対顔、御規式等万端無御滞被為濟候段

御到来候、

五九〇〇

(卷之二八 一七八〇)

(朱書「同五月」)

一御縁女様御順、 中将様御次二被仰出、向後此様ノ字

相認候様被 仰付候旨申来候、

五九〇一

(朱書「同六月」)

一於隣殿御儀、種子島佐渡嫡子

(久柄)

(久道)

鶴袈裟へ御入輿被仰出、

来ル六日御引越ノ筈候、

五九〇二(の1)

(朱書「同七月」)

一佐渡嫡子 種子島鶴袈裟

右ハ、妾腹ニテ出生ノ砌ヨリ妻養ニ致置候処、今般御

入輿被為在候付、右届佐渡申出候、

一御出生御男生共ニ此殿ノ字可被相用候、尤、殿ノ字被

相用候儀別段申渡不及、追テ御名被遣候節、何某殿卜

称候段被申渡、夫ニテ御格式相分リ候様可被取計候、

一玉仙院殿・心鏡院殿・澄光院殿・於民殿例ヲ以取調諸

事可被取計、可成長ケ折角御手輕ノ方ニ有之候様、其

上御幼年ノ内ハ猶以其通有之候様ニトノ御事候、尤、

右御方ニ例ニテ難見合儀、依事ハ外ニ例ヲモ可被取用

事候ヘトモ、右御四方ハ近例且現ニ当時御仕来ノ御方

ニモ候故、右通被仰達、

(五九〇二の2)

(行間朱書)

本文被仰渡儀ニ付テハ無之候ヘトモ、久馬殿ヨリ被相

下候付、以後為見合留置之候、

巳六月廿日

五九〇三

(卷之二五 一四四二)

(朱書「同閏七月」)
麗珠院様

(重壽男、為次郎)
三月七日 天苗院様
(重壽男、乘之助)

右御正忌日、御精進日ニ被相立候、

五九〇四

(卷之四六 三四九八)

(朱書「同八月」)
一御役・御役替等被仰付、明細書差出候節、向後部屋栖

ノ者ハ誰嫡子ニ男等ノ訳相記申出候様可申渡候、

五九〇五

(朱書「同八月」)

(重壽女)
一雅姫様、去ル三日御安産、御男子被成御出生候段御到

来候、

五九〇六

(朱書「同十月」)
一習書頭取

右名目、都講ノ次被相立候、

五九〇七

(朱書「寛政十年午正月」)
一学校目付

一御役格助教之次

右之通、御役被相建候、

五九〇八

(卷之五一 三九七一)

(朱書「同正月」)
一物頭一篇ノ勤ハ已来被相除、御兵具方ノ儀御鍵奉行・

御弓奉行・御鉄炮奉行ヨリ夫々請持ニ相勤、当番ハ右

三奉行繰廻ニ相勤候様、左候テ、三奉行ノ惣名ヲ物頭

ト相唱、銘々請持ノ御用向而已何奉行ト相唱、諸書付

ニモ其通相認候様被仰付候、

五九〇九

(卷之三三 一一二四)

(朱書「同二月」)
一御紋服拝領仕居候者ノ子孫、是迄御役柄又ハ勤柄ニ依

リ願ノ上着用御免被仰付来候ヘトモ、左之通被相定候、

一父母・祖父母初、伯叔父母・兄弟姉妹・妻子へ相讓候

儀勝手次第、尤、御役人限右通被仰付、其以下ハ着用

不相成候、

一小番・新番ノ儀ハ、其家格ノ勤仕候節ハ同断着用可仕、

尤、右家格ノ面々ニテモ小役人相勤候ハ、決テ不相成

候、

一前条讓ヲ受候者ヨリ家内罷在候右統等ノ外ヘ追々相讓致着用候儀、勝手次第、

一家内ヘ罷在候節迄右通相讓、別立並他家養子又ハ他へ嫁候後ハ不相成、右已前讓置候分ハ着用不苦候、

一御婦人様方御紋服モ右可準候、

右之通被相定候条、以来ハ願等ノ沙汰ニ不及、着用等御免被仰付候、

五九一〇

(朱書)同三月廿日(齊宣男) 一昨夜於大奥御男子御出生被為在、先御内分ノ御取扱候、

五九一一

(朱書)同三月 一今度於大奥御出生ノ御男子様、剛之進様ト奉称候、

五九一二

(朱書)同三月廿九日 一今度於大奥御出生ノ御男子剛之進殿御事、昨日ヨリ不被成御勝候処、御養生不被為叶、今酉刻被成御天亡候、

五九一三

(朱書)同三月 一剛之進殿御法名 幻住院殿真如淨空大禪童子

右之通、奉称候、

五九一四

(朱書)同四月 一二月廿七日 太守様ヨリ御縁女様へ御結納御祝物被進、

無御滞御式被為濟候段御到来候、

五九一五

(朱書)同四月 一今度御誕生ノ御男子様、松平豊三郎様ト奉称、御

台様御養 被仰出候段申来候、

五九一六

(朱書)同五月 一先月廿五日 太守様御婚姻被為濟候段御到来候、

五九一七

(朱書)同五月 一御縁女様御事、御婚姻御当日ヨリ 御前様ト奉称候様

被仰出候、

五九一八

(朱書「同六月」)
一此節御出生ノ(重養男、忠厚、今和泉)雄五郎様御男子、省之進殿卜御名被遣、

鳥津兵庫殿嫡子又八郎殿養子ニ被 仰出、此涯被引越

筈候、

五九一九

(朱書「同六月」)

一徳川愷千代様御事、被遊(宗徳)御世話尾張大納言様養子ニ

被 仰出候、尤、追テ(家齊女)淑姫君様御入輿可被為在旨被

仰出候段從 公義被仰渡候、

五九二〇

(朱書「同六月」)

一三月廿九日 幻住院殿(齊皇男、剛之進)

右御正忌日、御精進日被相立候、

(卷之二五 一四四三)

五九二一

(朱書「同七月」)

一式日御使ノ儀、一ヶ月二度一度ト一往隔月被仰付置候

ヘトモ、御差支ノ儀有之、已前ノ通一ヶ月兩度ツ、被

差立筈候旨申来候、

五九二二

(朱書「同七月」)
一先月廿一日於高輪大奥御男子様被遊御誕生候、

(重養男)

五九二三

(朱書「同七月」)

一今度高輪ニテ御誕生ノ 御男子様、御名 蓬之進様卜

奉称、御順ノ儀八時之丞様御次候条、蓬ノ字並同唱迄

七名ニ付居候人ハ可致遠慮候、

五九二四

(朱書「同八月」)

一蓬之進様御七男ノ御届被為濟候、

五九二五

(朱書「同」)

一蓬之進様御事、以来年中御内輪御取替、其外進上物等

都テ 時之丞様御同様被仰付候段申来候、

五九二六

(朱書「同」)

一中将様御付御法事、此節別紙之通被相究候、尤、御在

府ノ節ハ於江戸被仰付候段申来候、

一御法事ノ節、 中将様御付御法事、以来左ノ通、

一 円徳院様(重年) 一 正覚院様(重年) 一 慈照院様(重業) 一 玉貌院様(重業)

右、御靈々様御法事ノ節々、御付御法事、

一中将様ノ御子様方、御天亡ノ御子様七回御忌被迄断(マ)

一 信院様(淨信院カ、重業カ、敬絶)

右、御天亡様トハ被為違候故、十三回御忌ノ節伺ノ事、

但、御七回忌以後ノ儀ハ猶又其節吟味ノ事、

一 御部屋様御付御法事ノ儀ハ 御子様ノ分計、

右之通相心得、取調可致事、

但、御在国ノ節ハ可相回事、

五九二七(朱書「同八月」) (卷之三三 一一二二)
(卷之四九 三二七五)

一 御役替又ハ御役等被仰付候面々、其当日ヨリ三日ノ間、

麻上下致着用来候ヘトモ、翌日迄致着用候様可相心得

旨、向々へ可致通達事、

五九二八(朱書「同九月」) (卷之二九 一八六〇)

一 今度御誕生ノ 姫君様御事、 格姫君様ト奉称、 御(家)

台様御養被 仰出候旨、 従 公義被仰渡候段申来候、

依之格ト唱候名付居候者ハ可致遠慮候、

五九二九(朱書「同十月」)

一 太守様例年ノ御暇、御時節ニテハ暑中御掛御持病被為

障、長途ノ 御旅行被遊御難儀候付、御全快迄ノ間年々

三月中御暇並御参府被遊度旨、御願書御用番様へ被差

出候処、先月廿六日御願ノ通被仰出候段御到来候、

五九三〇(朱書「同十一月」)

一 有馬左兵衛佐様(兼務)

右ハ、往古ヨリ御由緒ノ訳ヲ以御内々被仰進儀有之、

御両敬可被遊旨被仰出、御引結等相濟候段申来候、

五九三一(朱書「寛政十一年未正月」) (卷之二五 一四三九)

一 円徳院様御忌日、十六日ノ儀十一日ニ御日取被相定候、

一 淨信院様御忌日、廿四日ノ儀廿日ニ御日取被相定候、

右之通、此節被相定候、

五九三二(朱書「同」)

一 当月十一日 御鏡御祝御定日ニ(候脱カ) 当年頭御祝ノ儀ハ

来ル九日被仰付候、

五九三三

(朱書)同
一江戸下高輪村釈土百姓地面

御抱屋敷一ヶ所

但、惣坪二千二百六十七坪、

右、此節一橋ヨリ囲付御抱屋敷ニ御願被仰立、其通御

願濟表向名主へ御預、此御方御下屋敷御近方故、諸支

配此御方へ御頼、内々ハ御下屋敷御囲込ニ相成候、

一御屋敷ト環江御下屋敷ノ間、小路行留ニ相成候故、御

届ノ上御下屋敷へ御囲込相成候付、御下屋敷ト環江御

屋敷一所ニ相成候、

一環江御物見御門之事、環江御門、

右之通、相唱候様被仰付候、

一諸向一往江戸二年詰被定置候へトモ、来春ヨリ一年詰

被仰付候、秋交代ノ分ハ来秋同断被仰付候、

五九三四

(朱書)未同 大炊
一諸御役人ノ内年々吟味ノ上ニテ間ニハ二年詰被仰付候

向モ可有之候、且書役・小役人ノ内一年詰ニテ差下候

テハ御用等不致連続向モ有之候ハ、其段年々交代調

ノ節奉行・頭人ヨリ申出候ハ、其節ノ吟味次第詰重

可申渡候、且又致二年詰候テモ不差支向ハ是又同断申

出候ハ、吟味次第可申渡候、

五九三五

(卷之四五 三三八七)

(朱書)同 播磨
一嫡子相果又ハ養子遣候節、二男ヲ嫡子ニ相願候得ハ依

家柄三男以下男上リ願出来候へトモ、其通ニテハ二男

已下幾人モ有之筋ニ相成候付、以来ハ生レノ儘ニテ二

男ヨリ末子ニ至迄男上リハ不被仰付候、依之タトハハ

二男 御目見不仕以前相果候へハ三男ハ三男ノ形リニ

テ 御目見被仰付、進上物モ三男ノ通可被仰付候、尤、

何男ニテモ嫡子相願候儀ハ有来通候、

右ノ通、御格式被相替候旨申来候、

五九三六

(朱書)同五月 久馬

(重家男)
一蓬之進様、三月廿七日高輪北町稻荷へ初テ被遊御参詣

候旨御到来候、

五九三七

(朱書)同 一今度江戸於大奥 (齊重男、忠公) 御男子様 御誕生被遊、御名 寛二

郎様卜被進候、御順ノ儀ハ追テ可申渡候、此段承仕任、

寛之字並同唱ノ文字遠慮可仕候、

五九三八

(朱書)同 一細川越中守様

(卷之四八 三六四七)

右ハ、此御方様ノ儀、従以前格別御懇意御通融被為

在、殊更當時 一橋様御統柄ニモ被成御座候付、旁以

以來御両敬ノ御取替り被成度趣御内談有之、被応其意

御祝物御取替御引受相濟候旨申来候、

但、御通融ノ御方々様、別紙ノ通二候、

細川越中守様 (齊慈)

細川六之助様 (齊德)

右之御縁女紀姫様

越中守様御養母瑤台院様

御妹於就様

御息女於峯様

但、松平鶴太郎様御縁女、

御二男長岡職五郎様

但、未 公辺へ御届ハ無之候、

(齊直) 太守様 (重憲) 中將様 (齊直重) 御前様 (齊興) 若殿様

(重泰男、忠厚) 雄五郎様 (重泰男、久光) 時之丞様 (重泰男) 蓬之進様 (齊直女) 操姫様

右、此節御両家御引結付、已来右ノ御方々様御通融有

之筈候事、

五九三九

(朱書)五月 久馬 一寛二郎様御名御順、操姫様御次二被 仰出候、

五九四〇

(朱書)六月 播磨 一敦之助様御病氣ノ処、御養生不被為叶、先月七日被遊

御逝去候段御到来候、

五九四一

(朱書)同 拍替 一寛二郎様御事、三月廿九日御誕生被為在候へトモ、御

誕生日ノ儀ハ廿八日二被 仰出候、

五九四二

(五九四一) 奉行間朱書

一三月廿九日御誕生 寛二郎様

右、三月廿八日御誕生ノ筋モ先達テ被仰出置候ヘトモ、

御誕生日ハ廿九日ニテ、御祝迄ヲ廿八日被遊筈候、

九月

久馬

五九四三

(朱書)同 播磨

一御隠居様御付ノ面々、是迄御役人外御付ノ名目無之候

ヘトモ、御隠居御方一篇ニ差分リ相勤候御徒目付其

外御納戸支配小役人等末々迄、当時 御隠居御方杯ト

片書等相記候分ハ向後都テ御付ト相唱、諸書付等ニモ

其通可相認候、尤、御広敷向並表方御鳥預等其外表ヨ

リ時々交代ニテ相詰候分ハ是迄ノ通高輪詰ノ名目ニテ

差置候旨申来候、

五九四四

(朱書)七月 柏書

一格姫君様御病氣ノ処、御養生不被為叶、先月廿四日被

遊御逝去候段御到来候、

五九四五

(朱書)八月 大炊

一蓬之進様御事、御病氣被遊御座候処、漸々御差重御太

切被為及候段、先月廿日御夭亡被遊候段御到来候、

五九四六

(朱書)同

一蓬之進様御法名 蓬窓院殿惠旭秀光大禪童子

右之通、奉称候段申来候、

五九四七

(朱書)九月 播磨

一七月廿日御正忌日 蓬窓院様

右御正忌日迄、御精進日被相立候、

五九四八

(朱書)同

一雄五郎様御事、今日鳥津(鳥津、今和泉)因幡殿家跡御相続被 仰出候、

五九四九

(朱書)同 久馬

一高輪御屋敷向百姓地、為火除此節御抱地相成、河村宗

澹質銀付抱屋敷ノ名目被仰付候旨申来候、

五九五〇

(朱書)同(播磨)
一雄五郎様御事、此節島津因幡殿家跡御相統ニ付テハ表

向相掛候儀ハヲソカラ家格通ノ事候、然共是迄 御

本丸ノ内ニテ御生長、江戸表ヘモ久々被成御座、御親

類様方ヲ初御大名様方段々御応対モ為被成御事、彼是

御含ノ儀モ被為在候故、御内輪ニテハ御一世是迄ノ御

振合ニ被成置候、此儀家格ハ勿論御同列方ノ例ニハ不

相成候、此旨諸向為心得可申聞置候、

五九五一

(朱書)同(播磨)
一雄五郎様御事、此節御相統ニ付テハ表向ニ相掛候儀ハ

ヲソカラ家格通ノ事候付、此已来ハ御同列方御同様

諸書付其外何篇殿文字ノ筈候、此旨諸向為心得可申聞

置候、

五九五二

(朱書)同(同)
一雄五郎殿、此節相統ノ御礼其外右ニ相付候儀ハ家格通

被仰付候、年頭・五節句・月次其外年中諸御礼窺御機

嫌等ノ儀、都テ表向御礼席ハ被成御用捨、右ノ節々ハ

御内玄喚又ハ桜ノ間御中門ヨリ御休息所へ直御通御座

候様、尤、大奥ヘモ御玄喚並御庭口ヨリ被為入候儀、

是迄ノ通、

右ノ通被 仰出候条、此旨内用被頼置候御用人ヘモ申

渡、向々ヘモ可申渡候、

五九五三

(朱書)同(久馬)
一來申年宗門手札改被仰付候付、御格式ノ儀ハ札改奉行

へ委細申渡置候間、札改方ニ付テ諸人ヨリ申出候儀ハ

都テ札改奉行へ可申出候、

五九五四

(朱書)同(同)
一代々嫡子、御内証元服 山田伯耆(右儀)

右ノ通、思召ヲ以被仰付候、

五九五五

(朱書)同(織殿)
一雄五郎殿御事、御名代其外家格ニ相掛候御勤向ハ御

並通、

一御城諸御門御下乗ハ家格通、乍然御台所口御門・南御

門ノ儀ハ御乘輿ニテ被為通候儀、御勝手次第、其節御本丸ハ大奥通番所辺、二丸ノ御内玄喚ノ向辺ニテ御下

乗、

右ノ通被仰付候、

有之、不用立、百姓共甚及迷惑候旨、郡奉行ヨリ申出

候条、以来何勤ノ訳且御用物才領ノ節ハ其訳書記候様、

向々へ可申渡置旨縫殿殿ヨリ致承知候、

川上九戸

五九五六

(朱書)同 久馬
一三月廿九日御誕生 (齊直男、忠公) 寛二郎様

右、三月廿八日御誕生ノ筋、先達テ被仰出置候へトモ、

御誕生日ハ廿九日ニテ、御祝迄ヲ廿八日被遊筈候、

五九六〇

(朱書)同 大炊
一今度於江戸御誕生ノ 御女子様、御名 英姫様ト奉称、

御順ノ儀ハ 寛二郎様御次候条、此旨奉承知、英ノ字

並同唱迄モ名ニ付居候人ハ可致遠慮候、

五九五七

(朱書)同 同
一寛二郎様御三男ノ御届被為済候、

五九六一

(朱書)十一月 駿河
一持高売買並銀錢貸借ニ付致肝煎候者、口錢銀一貫目ニ

付十五匁、

一米穀類、同断一石ニ付五分、

一道之島登リ品物、同断二部、

一他国ヨリ入来候諸色・御当地産ノ諸品物、同断一部、

右ノ通、口錢相定候条、銀錢米穀等ノ多少応シ、右ノ

五九五九

(朱書)同 同
一御上下ノ節、御供ノ面々且諸御奉公人他国往來其外御

(卷之三 五 一三三八)

国旅行ノ人、送人馬受取ニ何勤ノ訳不相記候受取多々

割ヲ以可相渡候、

五九六一

(朱書)十一月 織殿

一 山奉行

(見習脱力)

一 四人賄科

右ノ通、御役新規被相建、御役順ノ儀、郡奉行見習上

二 被仰付候、

五九六二

(朱書)同 久馬

一 中山道筋通行ノ儀付テハ去ル西年従 公義被仰渡置候

処、此節猶又心得違ノ儀共無之様、分テ仰渡ノ趣有之

二 付、交代ノ面々中山道並甲州路通行願出候テモ容易

取揚間敷候、格別訳合モ有之、不罷通候テ難叶儀モ候

ハ、其節ハ吟味次第可被仰付候、

一 爰元ヨリ出府ノ内、木曾路相願候人、於江戸 公義へ

願書差出、願通相濟候上通行ノ事候処万一願不相濟節

心得違通行等有之候テハ別テ不宜事候付、御用向外ハ

木曾路通行ノ儀容易御免被仰付間敷候、

五九六四

(朱書)十二月 織殿

一 江戸交代ノ面々、一兩人ツ、被差立儀ノミ有之、小倉

御借船及數艘甚御不益ノ事候処、乗与船賦ノ儀モ別紙

ノ通候条、同立六七人以上無之候へハ被差立間敷候、

乍然不時被差立候力又ハ急御用有之被遣候節ハ格別二

候へトモ、夫迎モ可成長同立見合操合候様可取計旨、

御側・表御用人へ申渡、向々へモ可致通達候、

一 六反帆 六七人乗与

一 七反帆 八九人乗与

一 八反帆 十一人計

一 九反帆 十三四人計

一 十反帆 十六七人計

一 十一反帆 二十人計

一 十二反帆 二十四五人計

一 十三反帆 二十八九人計

一 十四反帆 三十人計

五九六五(の1)

一 今般今和泉家相統被仰付、御礼迄モ被仰付候、依之年

中進上物ハ同列同様被仰付被下度相願候、進上品ノ儀

ハ別紙申上候、此旨御申頼存候、以上、

九月十九日

島津因幡

(五九六五の2)

(行間朱書)

本文進上品等御儉約年限中ハ都テ別紙同之通被仰付候

条、年限明候節ハ御並家同様品物等相弁候様取調、猶

又可被伺出候、

十二月

(高橋種央)
縫殿

五九六六(の1)

口上覚

一同氏又四郎、今度元服被仰付候付、年中御祝儀事・伺

御機嫌・進上物同氏玄蕃同様被仰付被下度奉願候、此

段御申頼存候、以上、

十一月六日

島津美作

(五九六六の2)

(行間朱書)

都テ願之通被仰付候、

十二月

縫殿

五九六七(の1)

一島津左衛門並島津図書ヨリ継目被仰付候二付、御三殿

様其外様へ年中進上物ノ儀何様可仕哉ノ旨伺被申出趣

有之、縫殿ヨリ被仰渡候御付紙ノ写、

〔右二付、十二月又々縫殿ヨリ被仰渡趣有之、略ス、〕

(五九六七の2)

(行間朱書)

十二月

縫殿

五九六八

(朱書)〔十二月 播磨〕

一今里村ノ内、御抱屋敷一ヶ所

但、惣地面二千五百四十二坪、

右、京極壱岐守様御抱地ニテ候処、此節御買入ニ相成、

市田勘解由殿名前ニテ被差置候段申来候、

五九六九

(朱書)〔寛政十二年申正月〕

一今度御誕生ノ

從 公義被仰渡候旨申来候、依之五百ト統候同唱ノ名

付居候者ハ可致遠慮候、

五九七〇

(朱書)二月 播磨

一若殿様御事、別テ輕御疱瘡被遊候段御到来候、

五九七二

(朱書)三月 播磨

一富姫様御卒去付、若殿様御事、未御結納不被候付御(清脫之)

遠慮ニ不被為及候、

五九七一

(朱書)同 大炊

一勤方ニ付関外へ被差越候人ハ切手相渡来候へトモ、向

後支配ノ御役席へ印紙渡置、被差越候節ハ於其御役席

右印紙ニ別紙ノ向ニ書認相渡、極月取揃可致返上候、

尤、江戸其外他領へ被差越候人ハ是迄ノ通切手可相渡

候、此旨可承御役々へ申渡、諸所御番所へモ可申越候、

但、印紙ノ儀ハ向々ヨリ可申出候、

五九七三

(朱書)同

一富姫様御疱瘡被成御煩候処、御養生不被為叶、去ル七

日被成御卒去候旨御到来候、

五九七四

(朱書)四月 大炊

一若殿様御輕被遊御水痘、先月十七日御酒湯被為召、猶

御機嫌能被遊御座候段御到来候、

印 何ノ何某

右、為何々何方表へ差越候、可通也、

申何月何日

何方番所

印 何ノ何某

右、為何々何方表へ差越候、御用付テハ時々可致往来

候条可通也、

申何月何日

何方番所

五九七五

(朱書)閏四月 久馬

一独礼ノ妻其外不依高下末々マテモ、妻ヨリフミ・目錄

等ハ以来誰内ト可相認候、此旨可致通達候、

(卷之四三 三三四二)

五九七六

(朱書)同

一五百姫君様御事、御台様御養被 仰出、(家齊室、茂姫)

右ノ通、從 公義被仰渡候、(家齊女)

五九七七

一(朱書)五月五百姫君様御病氣ノ処、御養生不被為叶、先月三日被

遊御逝去候段御到来候、

五九七八

一(朱書)同今度姫君様御誕生、御名峯姫君様ト奉称候旨、從公義

被仰渡候段申来候、依之右唱ノ名付居候者ハ可致遠慮候、

五九七九

一(朱書)六月峯姫君様御事、御台様御養被 仰出候、

右ノ通、從 公義被仰渡候、

五九八〇

一(朱書)同中山道通行ノ儀ニ付テハ兼テ被仰渡趣有之候付、出府

付木曾路不罷通候テ難叶訳モ有之節ハ、於爰元願申出候ハ、吟味可有之候条、江戸同役ナト二頼越候儀致間敷ト向々へ可申渡候、

(卷之三 五 二四〇〇)

五九八一

一(朱書)同交代御寄合ノ儀、様ノ字相用候様安永三年申渡有之候、

右ハ表御礼衆ノ分計ニテ、其外ハ交代御寄合進モ御旗

本方同様、御内輪ニテハ殿文字相用候様申来候、

五九八二

一(朱書)七月今度於大輿 御男子様御出生被為在、御内分ノ御取扱

候、此旨可承御役々へ内々可申聞置候、

五九八三

一(朱書)同今度於大輿御出生ノ御男子様、職之助様ト奉称候、此

旨可承御役々へ内々可申聞置候、

五九八四

一(朱書)八月凡下者ノ娘、諸書付何某女子ト認候モ有之候へトモ、

以来ハ娘ト相認候方ニ可相心得候、此旨無(空白)ト向々へ可申渡候、

(卷之二 八 一七五〇)

五九八五

(朱書)十月 播磨

一若殿様へ松平相模守様御妹様御縁与御内談被為在、御

互ニ御引結被為濟候段申来候、

五九八六

(朱書)九月 西館之筋ヨリ

一出水米ノ津町部当並浦役ヨリ米ノ津ノ儀、近年凶作等

打統、脱体旁町罷成候付、旅込屋へ被召建度願申出趣

有之、願ノ通一往申付候条、旅込代相当ニ可受取候旨、

(川上久致)
久馬殿ヨリ御付紙ヲ以被仰渡候、

五九八七

(朱書)十月 播磨

一芙蓉院様御忌日廿九日、御内輪ニテハ廿六日ニ被相立、

御代參等モ都テ其通被仰付置候、依之廿九日ノ御日取

ヲ以来御内外トモ廿六日被相改候旨被 仰出候段申来

候、

五九八八

(朱書)十一月 同

一職之助様御順ノ儀、
(齊草女)
英姫様御次ニ被仰出候、

五九八九

(朱書)同 川上九右ヨリ

一御上下ハ勿論其外御国旅行ノ人、馬受取ニ勤方ノ次第

相記候様ニトノ儀、去未九月郡奉行申出趣有之、申出

ノ通被仰付、其段ハ申渡為有之事候へトモ、間ニハ何

勤ノ訳不相記、受取差出致通行候モ有之由、又々郡奉

行申出趣有之不可然事候間、向後役付又ハ一身以下諸

職人迄モ何々ニ付テ通行ノ以第且御用物等ノ訳委相記、

受取差出候様支配中へ不洩様可被申渡旨、(高橋種次)
縫殿殿御差

図ニテ候、

五九九〇

(朱書)十二月 久馬

一寛二郎様御事、先月六日 (齊草繼室、丹羽加賀守長貴女)
御前様御養被 仰出候段申

来候、

五九九一

(朱書)同 同

一中将様御儀、御惣髮、
(重憲)
采翁様ト 御改名被遊度御

願書被差出候処、先月十四日御願通被為濟候、以来

御隠居様ト可奉称旨被 仰出候段申来候、此旨奉承知、

(卷之二六 一六三三)

栄ノ字並同唱ノ文字可致遠慮候、

五九九二

(朱書)同一英姫様御事、アス 籌姫様、

右ノ通、御名被進候段申来候条、籌ノ字並同唱ノ文字可致遠慮候、

五九九三

(朱書)享和元年西正月播磨

一若殿様へ松平相模守様御妹 弥姫様御縁与、御願ノ通被仰渡候付、御縁女様ト可奉称候、御願ノ儀ハ 若殿様御次被仰出、且御結納被進候迄ハ此様ノ字被相用候旨、是又被仰出候、

右ニ付、御名ノ字並同唱ノ名付居候者ハ可相改候、

(卷之二八 一七五二) 一七七二

五九九四

(朱書)二月 西拾之介ヨリ一御留守居以下ノ御役場ヨリ新番ノ者へ勤方申付候節、

人柄差支有無ノ訳、向後大番頭へ直ニ差出候様可致候、左候テ、御側役以上ハ可為有来通候、此旨可承向へ寄々可致通達事、

右ノ通、大煩殿ヨリ口達ノ覚書ヲ以被仰渡候、

五九九五

(朱書)三月 御家老座印一今度年号享和ト被相改候旨、先月十三日於江戸被仰渡

候段申来候間、奉得其意、先月十三日ヨリ諸書付等モ享和ト可相改候、

五九九六

(朱書)同 伊織一幼稚カ

一小坊主ノ儀幻雅ノ姿故、年輩ノ不依多少諸御礼事其外表向へ相掛候節ハ都テ名代ニテ相濟候様被仰付候旨申来候、

但、初テノ御目見其外諸御礼事、御弓進上以上ノ家格ニテモ名代ヲ以納ニ被仰付候、

五九九七

(朱書)三月 久馬一諸向跡式不相建内家跡並名跡ト有之候へトモ、以来ハ

家跡ノ儀モ名跡ト可相唱候、

五九九八

(朱書)四月十二日 久馬

一職之助様御事、御病氣被成御座候処、御養生無御叶、

今申下刻被遊御天亡候、

五九九九

(朱書)四月 同

一職之助様御法名 宝地院殿蓮岸清心大禪童子

六〇〇〇

(朱書)五月 伯耆

一今度御出生ノ 姫君様御事、 亨姫君様卜奉称、 御

齊室、茂姫

台様御養被 仰出候段申来候、依之御名ノ字並右唱ノ

名付居候者ハ可致遠慮候、

六〇〇一

(朱書)六月 久馬

一四月十二日 宝池院様

右御正忌日、御精進日被相立候、

六〇〇二

(朱書)六月 御側役ヨリ

一御記録奉行 御記録方添役 御記録方見習 外役名略、

右ノ御役々ニ御役替等被仰付候ハ、御小納戸ニ書付ヲ

以届可被申出候、御用御見合相成候付此段申達置候、

六〇〇三

(朱書)六月 大炊

一疱瘡・麻疹・水痘看病人並同家内罷居候人、御目見

等遠慮被定置候ヘトモ、向後不及其儀候、尤、当人遠

慮ノ儀ハ是迄ノ通可相心得候、

六〇〇四

(朱書)六月 伯耆

一御留守詰 御家老一人

右、御省略年限中、右之通被仰付候旨申来候、

六〇〇五

(朱書)八月 久馬・伯耆

一江戸表 上々様へ、奥向並御近習通ノ面々、年頭・暑

寒其外御祝儀・伺御機嫌等、定式以書状申上来候儀、

此節御使被相止、飛脚相成候付テハ一往不及其儀候、

尤、御役替其外其身ノ御礼事ハ是迄ノ通可相心得候、

江戸詰右面々ヨリ御当地ヘモ同断、

一江戸詰御家老其外御役々支配頭等へ諸御役人等ノ内ヨ

リ年頭・暑寒其外定式書状差越來候ヘトモ、一往不及

其儀候、尤、御役替其外其身ノ御礼等有来通可相心得候、

一御当地御家老其外御役々支配頭へ江戸詰御役々等ヨリ
モ同断可相心得候、

六〇〇六

(朱書)八月(伯耆)
一先月廿三日江戸於大奥 御女子様御誕生被遊候、

六〇〇七

(朱書)同(久馬)
一今度於江戸御出生ノ御女子様御事、七月廿三日御誕生
被為在候へトモ、御祝日ノ儀ハ以来廿五日ニ被 仰出
候、

六〇〇八

(朱書)同(伯耆)
一重陽

右(青丸)物ニ不及、持合候人ハ勝手次第被仰付置候へトモ、
御省略年限中ハ直触已上ノ御役人並寄合並以上ハ右通
ニテ、其外ハ年限中被相究候可為衣服通候、

六〇〇九

(朱書)九月(下総)
一今度於江戸御誕生ノ御女子様、御名 祀ヒメ姫様卜奉称、

御順ノ儀ハ (青直女) 籌姫様御次ニ候、祀ノ字並同唱迄モ名付
居候人ハ可致遠慮候、

六〇一〇

(六〇〇九号行間朱書)
一祀姫様御事、随姫様、

右之通被遊 御改名候段申来候条、随ノ字並同唱ノ文
字可致遠慮候、

享和三年亥十二月

(赤松則次)
市正

六〇一一

(朱書)九月(同)
一籌姫様御事、御病氣被成御座候処、御養生無御叶、先

月十七日已上刻被遊御夭亡候旨申来候、

六〇一二

(朱書)同(同)
一籌姫様御法名 光容院殿妙台慧鏡大禅童子 (女丸)

六〇一三

(卷之五一 四〇七八)

一山下御鷹方、御引取ニテ掛役々等尾畔へ相勤候(符力)候様被

仰付、山下・尾畔ノ名目被相除、掛リ御役々等惣名ニ

テ御鷹匠頭・御鷹匠卜相唱、書付等モ其通認候様被仰

付候、

六〇一四

(朱書)十月(伯耆)

一今度 御男子様御誕生、御台様御養被 仰出、松平

菊千代様卜奉称候旨、從 公儀被 仰渡候段申来候、

依之菊ノ字並同唱可致遠慮候、

六〇一五

(朱書)同(下総)

一八月十七日 光容院様

右御正忌日迄、御精進日被相立候、

六〇一六

(朱書)同(伯耆)

一代々嫡子、御内証元服 高橋縫殿殿(種次)

右之通、 思召ヲ以被仰付候、

六〇一七

(朱書)七月(下総)

一御部屋様御法名 慈光院殿仏心慧証大師

六〇一八

(朱書)同(伯耆)

一奥向並諸御役人、初テノ 御目見並家督・継目・養子

成等ノ御礼中紙進上ノ分ハ進上物相納、御礼相濟候筋

被仰付来候処、格別ノ儀故都テ現ニ罷出御礼申上候様

被仰付候間、可承向々へ可申渡候、

但、小坊主ノ儀ハ先達テ申渡置候通被仰付候、

六〇一九

(朱書)同(下総)

一隠居被仰付人、依願是迄ハ有髪・剃髪勝手次第被仰付

来候へトモ、以来ハ相好候方ニ片付可願出候、尤、以

後差支候節ハ又々願可申出候、

六〇二〇

(朱書)享和二年戊五月(市正)

一今日於大奥御男子様御出生被成候、以下略、

五月十五日

六〇二一

(朱書)五月 市正

一今日於大奥御女子様被成御誕生候、以下略、

五月廿日

六〇二二

(朱書)同

一今度御出生ノ 御男子、武五郎殿下奉称候、此旨表方

へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

六〇二三

(朱書)同

一今度御出生ノ 御女子様、於美寿殿下奉称、此旨表方

へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

六〇二四

(朱書)六月 下總

一今度御誕生ノ 姫君様御事、舒姫様下奉称、且御台様

御養被 仰出候段、從 公義被 仰渡候旨申来候、依

之舒卜唱候名付居候者ハ可致遠慮候、

六〇二五

(朱書)同 小ノ月

一十月晦日 廿九日

慈光院様御正忌日付、 思召ヲ以御精進日被相立候段

申来候間、此旨可承向々へ可申渡候、

六〇二六

(朱書)七月 市正

一亨姫君様御病氣ノ処、御養生不被為叶、先月四日被遊

御逝去候段御到来候、

六〇二七

(朱書)同十八日 同

一今朝於大奥御女子様御出生被成候、

六〇二八

(朱書)七月 下總

一今度御出生ノ御女子、於長殿下奉称候、此旨表方へ致

通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

六〇二九

(朱書)七月 市正

一諸家ノ内へ御入興等二被為入候 御女子様、御名順被

究置候儀無之候付、表向ハ家格ノ無差別、御出生ノ御

順通被仰付候旨被 仰出候条、此旨向々へ可申渡候、

(卷之二八 一七七〇)

六〇三〇

(朱書)九月 下総
一先月十六日御老中様御連名ノ以御奉書、増上寺火ノ御
番有馬中務(頼貞)太輔様御代被為蒙仰候段御到来候、

六〇三一

(朱書)同 鎌殿
一御普請奉行ノ儀、当分一篇ノ勤無之候付、御役名被相
除候旨被仰出候、

(卷之五一 四〇二三)

六〇三二

(朱書)同 下総
一小十人頭

(卷之五一 四〇〇〇)

右ハ、此節小十人組御引取被仰付候付、御役名被相除
候条、此旨向々へ可申渡候、

但、御役座モ引取相成候付、諸帳面ノ儀ハ六与触役
所格護申付候、是又可申渡候、

六〇三三

(朱書)同 将監
一奥向並諸御役人、初テノ 御目見並家督・継目・養子
成等ノ御礼申上候節、中紙進上ノ向モ現ニ罷出候様被
仰付候付、御留守年右ノ御礼被仰付候節ハ現御礼ノ形

(卷之二九 一八一五)

ヲ以謁奏者番被仰付候、尤、初テノ 御目見ハ格別ノ
事候間、謁二ハ不仰付候、此旨可承向々へ可申渡候、

六〇三四

(朱書)同十七日 市正
一今度於大奥御出生ノ御女子於美寿殿御事、御病氣被成
御座候処、御養生無御叶、今晚被遊御夭亡候、

六〇三五

(朱書)九月 市正
一於美寿殿御法名 瑞光院殿月心秋桂大禪(女カ)童子

六〇三六

(朱書)十月廿一日 下総
一武五郎殿

右、今日島津若狭殿養子被仰付候、

(忠實、重直)
於長殿(齊直女)

右、今日空嫡子島津太郎次郎へ縁与被仰付候、

六〇三七

(朱書)十月 同
一中山王尚温、先達テ卒去、中誠王子尚成へ継目被仰付
候、右二付、江戸へ御礼ノ使者、来寅年 御参府ノ節

被召連度旨、九月廿八日御用番松平伊豆守様(信明)へ御窺書
被差出候処、先月六日御願ノ通、来寅年 御参勤ノ節
被召連候様被仰渡候段申来候、

六〇三八

(卷之二九 一七九九)

(朱書)十二月 市正

一若殿様御事、先月九日 太守様御加冠、御家御伝来ノ
(斎意)御元服ノ御式有之、御名 又三郎様卜御改、御実
名 忠温様卜奉称、御作法万端御先格ノ通首尾能被為
濟候段御到来候、

六〇三九

(朱書)同

一又三郎様、御実名 忠温様卜奉称候付、右御実名ノ字
且又唱同様ノ名乗等ハ早速可相改候、

六〇四〇

(卷之二九 一八五八)

(朱書)同

一久亮(了才)重兼男、久昵)

右、時之丞様御実名ニテ候間、亮ノ字可致遠慮候、同
唱ノ文字ハ不苦候へトモ、人々心入ヲ以致遠慮候儀ハ
其通可有之候、

六〇四一

(朱書)享和三年寅正月 下総

一今度於高輪大奥 豹治郎様御誕生、
(重兼男)

六〇四二

(朱書)正月 同

一若殿様、御家御伝来ノ御元服ノ御式且御鎧御召初被為
濟候付被相混、旧臘六日御祝儀無御滞被為兼候旨御到
来候、

六〇四三

(朱書)同

一去年十二月廿八日於高輪大奥 御男子様被遊御出生、
(時之丞力)御名豹治郎様卜奉称、御順ノ儀ハ時之助様御次候条、
此旨奉承知、豹之字并同唱迄モ名ニ付居候人ハ可致遠
慮候、

六〇四四

(朱書)同

一太守様御持病氣被為人候付、当年御暇被仰出候テモ、
御当分ノ通ニテハ御道中御差障被遊候付、御発賀暫御
(解力)見合可被為在候間、御用御手当先可差留置旨申来候、

六〇四五

(朱書「同」市正)
瑞光院殿

右御正忌日、御精進日被相定候条、此旨可承向々へ可申渡候、

六〇四六

(朱書「正月廿七日 御家老座印」)

一五街道人馬先触ノ儀、一二ヶ月程ツ、溜置、道中奉行へ被差出候様宝曆年中相達置候処、近来不被差出向モ多候、向後參勤御暇ノ節ハ勿論家中往来共不洩様可被差出候、尤、家中往来ニテモ多人馬被繼立候節ハ前広問合候様可被致候、

一諸家中往来ノ節、先触差出候面々泊付無之趣相見得候、右二付、旅行ノ日割難相知候間、先触差出候日限ハ日当致シ、宿々人馬寄置候様右日限ノ通旅行無之、自分人馬差支候儀モ有之哉二候、以来先触へ泊付書入可被差出候、其上川支等有之、日割相違ノ節ハ猶追先触可被差出候、都テ役人共又ハ馬士人馬等不速ノ儀モ有之節ハ道中奉行へ可被申聞候事、別紙ノ通、道中御奉行ヨリ被仰渡候間、出立ノ面々人

馬不依多少先触差出、出府ノ上右写御用人へ可被差出候、左候ハ、右書付御留守居ヲ以道中御奉行へ可被差

出候、委細ノ儀ハ宝曆八寅十二月申渡有之候間、御用人受持ニテ無間違可致取扱候、尤、以来ハ右先触へ泊付等書入差出、其上川支等有之、日割相違ノ節ハ追先触差出候儀共、仰渡通可相心得候、此旨与中・支配中へ不洩様可被申渡者也、

六〇四七

(朱書「三月 信濃」)

一英 敬 恒 敦 乘 綾 総 蓬 富 格 亨 幸
職 為 明 籌 雅 邦 五百

(卷之二九 一八六一)

右ハ、公義並御子様方等ノ御名文字ニテ、実名等二相用候儀遠慮申渡置候へトモ、最早不及其儀候、此旨向々へ可致通達候、

但、英ト唱候儀ハ是迄ノ通可致遠慮候、

六〇四八

(朱書「五月 同」)

一舒姫君様御病氣ノ処、御養生不被為叶、三月四日被遊御逝去候段御到来候、

六〇四九

(朱書)六月 市正

一 太守様御事、御持病ノ御疝積被為差発、此涯御旅行難

被遊候付暫御保養、御快被為成候ハ、早速御発賀可被(駕力)

遊旨、四月十日御用番様へ御届被 仰出候段御到来候、

六〇五〇

(朱書)七月 信濃

一 祀姫様御儀、先月三日ヨリ御熱氣被為在候処、御癩疹

ニテ別テ御輕御酒湯迄被為濟、御機嫌能被遊御座候段

御到来候、

六〇五一

(朱書)九月 下総

一 此節 大玄院様百年御回忌御法事被為済候付、月次御

礼罷出候面々、明後廿二日四ツ時登 城、於席々相謁

御三殿様へ可奉伺御機嫌候、

六〇五二

(朱書)十月 信濃・下総

一 太守様御痛所ニ付、当秋迄 御滞府被遊御保養候へト

モ、今以確ト不被遊御座、当冬中迄 御滞府被遊 御

養生度、其内御快候ハ、可被遊御発賀旨、御願書御用(駕力)

番牧野備前守様へ被差出候処、御願ノ通被仰渡候段御

到来候、

六〇五三

(朱書)十一月 同

一 太守様御痛所ニ付、当冬中迄 御滞府被遊御療養候へ

トモ、未寸切ト不被遊御座、其上御遠国ノ儀、最早来

年御参府御時節迄難被遊御往来、直 御滞府被遊御保

養度旨、御願書御用番松平伊豆守様へ被差出候処、先

月十九日御願ノ通被仰渡候段御到来候、

六〇五四

(朱書)享和四年子即文化元年

一 江戸へ被差登候諸御用物ノ儀、 御前御用タリトモ可

成丈船便ヨリ差越候様可取計候、其内陸地不被遣候テ

難成品有之節ハ於江戸時々申出、差図ノ上問合越等候

間、右差図ヲ得候様可申越分ハ陸地不被差越候条、其

通相心得無間違様面々へ可申渡候、

六〇五五

(卷之四四 三三二七)

一依科以来没収被仰付候高、千石内外ニ相成候節、相当

(朱書)正月 伊織

ノ直付ニテ本人親類外諸士へ申請可被仰付候、尤、御取揚高ノ内、本人ヨリ借銀質物ニ遣置、本銀目成候迄年々所務代銀被成下候高ノ儀ハ右所務差引相濟候後申請可被仰付候、且何ソニ付引当ニ差出置候高、本銀上納不相濟、御取揚相成候ハ、其引当ノ直付ニテ申受可被仰付候、若拝領高被仰付儀モ候ハ、其石数ハ御取揚高ヲ以致差引、御高ノ儀ハ減少無之様被仰付候条、可承向へ可申渡候、

但、藏方不足ノ方ニ御取揚相成候高ノ儀ハ申請不被仰付候、

六〇五六

(卷之三三 二七〇八)

一田ノ浦本肝付典膳下屋敷、浜崎御屋敷、

(朱書)二月 下總

右ハ、御内証様御貰受相成候付、右ノ通相唱、諸書付等ニモ可致旨、可承向々へ可申渡候、

六〇五七

(朱書)三月 市正

一松平甲斐守様

右ハ、此御方様ニ八年来格段御懇意、殊更奥平大膳

(昌高)

太夫様御続合モ御座候間、以来御両敬ノ儀被仰合度旨、彼御方ヨリ被仰進被応其意、御引結相濟候旨申来候、

六〇五八

(朱書)三月十五日 御家老座印

一今度年号文化ト被相改候旨、先月十九日於江戸被仰渡候段申来候間、奉得其意、先月十九日ヨリ諸書付等モ文化ト可相改候、此旨支配中へ可申渡者也、

六〇五九

(朱書)三月廿一日

一豹治郎様御病氣被成御座候処、御養生不被為叶、去ル三日御天亡被遊候段御到来候、

六〇六〇

(朱書)三月 市正

一豹治郎様御病氣被遊御座候処、漸々御差重御太切被為及候段申来、然処御養生不被為叶、去ル三日御天亡被

遊候段追々御到来候、

六〇六一

一 豹治郎様御法名 宝台院殿瑶琴幻調大禪童子

右ノ通、奉称候段申来候、

六〇六二

一 太守様御不快二付、御滞府被遊 御保養候処、御快

御参府ノ御時節相成候付、御用番戸田采女正様・西丸

御老中安藤对馬守様へ御对客ノ儀被仰込、先月十一日

御見舞 公方様・御台様・大納言様御機嫌被相伺

同十五日御登 城御参勤ノ御礼被仰上候処、御懇ノ被

為蒙 上意御直御請被仰上、諸事御先格ノ通被為濟候

段御到来候、

六〇六三

一 三月三日御正忌日 宝台院様

右御正忌日迄、御精進日被相立候、

六〇六四

一 御隠居様御儀、御上氣被為在候付被遊御剃髮度、去

ル二日御願書被差出候処、即日御願通被為濟候旨申来

候、

六〇六五

一 諸之丞様御事、有馬左兵衛佐様ヨリ御智養子御貫被成

度被仰進趣有之、御約諾迄モ被為濟候付、先月七日御

智養子御願書御用番牧野備前守様へ被差出、此御方御

届モ御一所二被差出候処、同十日御智養子御願之通被

仰出、同廿七日御養家へ被遊御引越、万端無御滞被為

濟候段御到来候、

六〇六六

一 巴徳院様五十年御回忌御法事被為濟候付、月次御礼罷

出候面々、明後十三日四ツ時登城、於席々相謁 御三

殿様へ可奉伺御機嫌候、

六〇六七

(朱書)七月信濃
一諸之丞様御事、有馬藏人様、

右ノ通、御改名ノ段申来候、

六〇六八

(朱書)同

一若殿様 御目見被仰付候間、先月朔日可被遊御登城、

太守様ニモ御礼可被仰上旨御奉書御到来、御登城、

太守様大廊下御休息所、若殿様ニハ大広間へ被遊御

通、於 御白書院 若殿様御事、公方様へ初テ 御

目見被為蒙 上意御退座、御引続 太守様御礼被仰上

御退去、再 御出礼上意有之、御着座、御懇ノ被為蒙

上意、御直ニ御請被仰上御退去、 御両殿様共無御滞

御礼被為濟候、其後 御居殘御白書院於黒鷲ノ御杉戸

涯 御両殿様御一所御用番青山下野守様へ被謁、御礼

被仰上、 西丸へモ御上り、御老中様へ被謁御礼被仰

上候旨御到来候、

六〇六九

(朱書)同

一公義御内証御勤ノ事、大奥御勤、

右ノ通、以来被相改、尤、掛ノ儀モ其通可相心得旨被
仰付候段申来候、

六〇七〇

(朱書)同薩殿

一諸御役人ノ内、差迫候依向ハ御役科米繰替ノ儀被仰付

来候へトモ、以来ハ差迫候者逆モ容易ニハ被仰付間敷
候、

六〇七一

(朱書)八月伊織・薩殿

一不時御用有之、定式書役・小役人ニテハ難相弁重等申

出、其通申付置候モ多々有之候、右ハ其御用向相片付

候力、又ハ手細相成候節ハ差免候筋可申出ノ所、夫

形リニテ召置候モ有之、不行届始(未カ)抹二候、最初限月等

相究申出置候テモ、其内相片付候ハ、引取ノ儀可申出

候、御役々定数ヲモ被置候ニ付、右ニ準シ仮令臨時ノ

御用有之節逆モ、成長ケ定式ノ書役等ニテ相弁、深切

ニ致精勤候様奉行・頭人専氣ヲ付可致沙汰候、

六〇七二 (卷之二六 一六二九)

一中山王尚成、先達テ天亡ニ付、具志頭王子尚瀬ヘ王跡

相續被仰付候、右ニ付、江戸ヘ御礼ノ使者、来々寅年

御參勤ノ節被召速度旨、先月十九日御用番戸田采女正

様ヘ御伺書被差出候処、同廿一日御願ノ通来々寅年

御參勤ノ節被召連候様被仰渡候段申来候、

但、尚成繼目御礼ノ使者、寅年被召連候様被仰渡置

候ヘトモ、天亡ニ付、右使者不被差上候段被為及御

届候、

六〇七三

一領國中風俗正敷喧嘩口論等致間敷トノ儀、前々ヨリ申

渡モ有之、去々年国元発足前書付ヲ以申聞、去年覚兵

衛事出立節モ申付遣候ヘトモ、兎角辺鄙ノ風土故風俗

不正、若キ者共行跡不宜、無礼法外ノ働ヨリ喧嘩ニ及

無益ニ死傷致シ候者数多有之候付、御隠居様甚不使

二被 思召、右体無益ニ一命ヲ捨候者無之様ニトノ御

堅慮ヲ以、致喧嘩張本為相^(決力)者、其身ハ凡下ニ申付死

体可為取捨候、親兄弟ノ儀モ吟味ノ上右形ノ依輕重答

目可被仰付旨、先年稠敷被仰出趣モ有之、其以後及喧

嘩候儀ハ勿論夜行辻立等ノ儀モ相止、段々風俗立直リ

候方ニ相見得候処、近来又々本ノ風俗ニ立戻リ候様相

聞ヘ、剩致喧嘩候者モ有之、不可然事ニ候、右通 御

隠居様御仁心ノ一筋ヲ以、一旦風俗相改喧嘩等モ相止

候上ハ人々難有奉存、忘布不致兼々心頭掛相慎候ハ、

頃日尚又風俗モ一等宜可相成ノ所、却テ旧俗ニ立帰り

候儀誠残念ノ至、當時ノ^(家督力)中ニテ 御隠居様ヘ奉対

候テモ恐入可申上様モ無之候、畢竟自分不徳故ニテ候

ヘトモ、國中ノ者共、申渡ノ趣ヲ疎略ニ相考、国法ヲ

守候儀薄所ヨリ程過候ヘハ右体緩セ相成、且家老ヲ始

役々兼々如何ノ心得候哉、不行届事ニ候、依之以来屹

ト 御隠居様被仰出置候通、風俗立直リ喧嘩口論等相

止候筋、諸士末々迄モ一統ニ其趣意致感服、心掛候様

得ト申聞、其上ニテ万一不相用者モ有之候ハ、無用捨

咎目ヲ申付、屹ト風俗立直リ候廉相見得候様、精々迷

吟味取扱可致事、

七月

家老中へ

六〇七四

此節於江戸 御前へ勸解由被^(市田教國) 召出、御領國中風俗等

ノ儀ニ付段々 御意有之、別紙写ノ通 御筆ヲ以被

仰出候御趣意、御役々ヲ始奉承知通ニ候、依之左ニ申

渡候、

一 御領国風俗ノ儀ニ付テハ前々ヨリ毎度被仰渡、御当代

猶又追々 御沙汰被為及候得共、兎角風俗不正、且若

キ者共無礼法外ノ働ヨリ喧嘩ニ及、無益ニ致死傷候者

有之候付、 御隠居様甚^(不便力)不使ニ被 思召上、御賢慮ヲ

以先年被 仰出候趣有之、其後風俗立直リ候方ニ相見

得候処、頃日又々本ノ風俗ニ立戻リ、剩致喧嘩候者モ

有之、右通 御仁心ノ一筋ヲ以風俗相改候上ハ人々難

有奉存、兼々心頭ニ掛相慎候ハ、猶又風俗一統宜可相

成ノ処、却テ旧俗ニ立帰り候儀誠 御残念被 思召上、

御隠居様へ被為对仰分モ不被為在、畢竟仰渡ノ旨ヲ疎

略ニ相考、御国法ヲ守候儀薄所ヨリ程過候へハ緩セ相

成、御家老ヲ始御役々不行屈事ニ 思召候、依之以来

御隠居様被 仰出置候通、風俗屹ト相改候様、此節被

仰出候趣一々御尤至極ノ御事、甚以奉恐入候仕合候、

此上ハ屹ト風俗立直リ候廉相見得、 御心慮ヲ奉安候

様無之候テ不叶儀候間、 仰出ノ御趣意人々得卜奉汲

受、無益ノ参会等ハ勿論年若ノ者共夜行辻立又ハ異体

ノ風儀等一切無之様可相嗜候、来年 御下国ノ上ハ御

覽モ有之事候条、若其節 御目ニ留リ候程ノ異様成風

儀ノ者モ有之候ハ、無用捨 御沙汰可被遊トノ御事候

間、万一右体ノ者モ候テハ厚 思召ノ御趣意通兼候筋

相成、拙者共初支配頭ニ至リ申分モ無之、尤、右通ノ

者ハ一旦取違ノ筋ニテハ無之、御国法等閑ニ相心得居

候者故、以来御政道ノ障ニ相成、且ハ往々御奉公等相

勤候生質ニテモ無之積ニ候故、御不便ヲ被加ニ不及相

当ノ御取扱被仰付、親兄弟等迄モ可及迷惑候条、兼々

其旨ヲ致得心候趣親兄弟又ハ親類共ヨリ無油断可令教

示候、

一家柄ノ面々ハ勿論諸士一統文武ヲ初其外稽古事等折角

致出精、平日無益ノ寄集無之様可心掛候、畢竟右体ノ

所ヨリ不謂所行等モ有之、終ニハ喧嘩口論等ニモヲヨ

ト甚以 御氣之毒被 思召上候御事候間、万端相慎文

武其外諸稽古事等精々可相励候、

一 諸御役場ノ儀モ御用向致熟談、無滯様可令精勤候、惣

テ御役所ノ作法嚴重有之候様可心掛候、就中見聞役ノ

儀ハ其身ノ慎第一ノ事候条御規定通賢可相守候、且書(堅力)

役等ノ内年若ノ者共ハ奉行・頭人兼々氣ヲ付行儀作法

不正、又ハ異体ノ者モ候ハ、屹卜可相改旨無用捨申聞、

若不相用者ハ其段支配ノ向へ申出、吟味ノ上相当ノ可

及御取扱候、

一 御役柄並奥向出入一件ノ儀モ被定置候通可相守候、緩

セ成立候テハ不可然候条、人々無取違様可相心得候、

右、分テ被 仰出候御深慮ノ趣一統難有奉感服、朝暮

心頭掛聊無緩疎賢可相守候、乍此上万一不守ノ者モ候

ハ、無御用捨相当ノ御咎目可被仰付候、是迄每度 御

沙汰被為及候御趣意行届兼尊慮ノ程到テ奉恐入儀候条、

於諸向モ其旨奉恐察、末々迄モ屹卜行届候様、支配下

下役等へモ時々可申合候、

九月

(願住入喬)

信濃

(兼刈美祐)

下総

(川田佐實)

伊織

(高橋運次)

縫殿

六〇七五

(朱書)九月 下総

一 御上下御供並間上下ノ面々、道中為持候具足箱其外諸

荷物雨覆紋所、是迄朱紋相用候向モ有之候へトモ、以

来朱紋被差留、外色勝手次第相用候様被仰付候条、此

旨向々へ可申渡候、

但、江戸地廻並御領内旅行等ノ節ハ是迄ノ通、

六〇七六

(朱書)十月 信濃

一 太守様御儀、薩摩守様卜御改名被遊度旨、御伺書被

差出候処、先月十三日御窺通被仰渡候段申来候、此旨

可奉承知候、

六〇七七

(朱書)同 同

一 太守様御儀、御改名御窺ノ通被為済候二付、御一門

方其外月次御礼罷出候面々、来ル九日四ツ時登城、於

席々相謁 御三殿様へ御祝儀可被申上候、

但、大奥へ兼テ御祝儀等被申上候面々、当日又ハ御

精進日間御祝儀被申上之、御女中方ヨリモ同断、尤、

江戸へモ当月飛脚便ヨリ有来通可被申上候、

六〇七八

(朱書)同

一松之助様御事、(二)儀齊也民部卿様御嫡子被仰出候段從 公義

被仰渡候条、此旨可承向へ可申渡候、

六〇七九

(朱書)同 信濃・市正

(卷之二六 一五八一)

一若殿様御元服被仰付候間、今月四日御登 城可被遊、

太守様ニモ御礼可被仰上旨、御奉書御到来、御登 城、

太守様ニハ大廊下御休息所へ御通、 若殿様ニハ大広

間四ノ間へ被御控、無程 (家書)公方様御黒書院へ出御、於

御前御一字御拝領、從四位下侍從被 仰出、御盃・御

肴御頂戴、御道具御拝領、御懇ノ被為蒙 上意、御名

豊後守様、御実名斉興公卜御改被成、 太守様ニモ御

礼被 仰上、諸事御先格ノ通被為濟、 西丸へモ御上

り、 御両殿様共御礼無御滞被為濟候段御到来候、

六〇八〇

(朱書)同 市正

一若殿様御実名斉興公卜奉称候間、興ノ字ハ勿論唱同様

ノ実名相用候者ハ可致遠慮候、

六〇八一

(朱書)十一月 市正

一此節 若殿様御元服被為濟候付、御女中方並島津左衛

門其外同格同妻、大目付以上、大番頭以下、奥向御役

人、無役大身分、寄合並以上嫡子、無役ニテ月次御礼

罷出候面々ヨリ惣代一人、諸士ヨリ惣代一人被差越先

例候へトモ、当時ノ儀故不及其儀、於江戸御取替調ヲ

以進上物相濟候段申来候、此旨向々へ可申渡候、

六〇八二

(朱書)同

一若殿様御事、五節句・月次御登 城御伺ノ通被仰渡、

先月十五日月次初テ御登 城、万端無御滞被為濟候段

御到来候、

六〇八三

(朱書)同

(卷之三 二四〇四)

一江戸詰被仰付候面々、同立ニテ被差立候者共、応人数

小倉船何艘ト賦ヲ以金相渡事候処、間ニハ一例ヲ相離

自儘ニ船借入差越候間得有之、如何ノ至候条、右体ノ

儀一切無之様向々へ可申渡候、

六〇八四

(卷之三 五 一四〇三)

(朱書)同
一木曾路通行ノ儀、上下人数並人馬書出ヲ以道中御奉行

衆へ御願被下、御免ノ上被差越事候処、去年中ヨリ宿

場書出ニテ御取調有之候へハ過上ノ分段々有之趣、其

上御免無之名前モ相見得、右ノ内ニハ御家中ノ名前ヲ

以偽罷通候不屈者モ可有之哉ノ趣、旁以此節道中御奉

行衆ヨリ御糺有之候、依之已来右体ノ儀及度々候テハ

何様ノ御沙汰ニ力可及モ難計候条、此後前件体ノ者モ

候ハ、其面々御咎目向、依時宜ハ不被得御差戻候テハ

難相成儀共可有之、左候へハ御取締不行届筋相当、甚

以不可然事候間、右様ノ儀共能々致勘弁、木曾路通行

御免無之者心得違ニテ自儘罷通候儀共一切無之様向々

へ可申渡候、

但、甲州道中ハ願出候テモ御免無之御法候、

六〇八五

(朱書)文化二年乙丑正月 市正

一藏人様御事、有馬肥前守様、

右ハ、旧臘十六日諸太夫被仰付、右之通御改名ノ段申

来候、

六〇八六

(朱書)正月廿七日 同

一若殿様御元服御官位付、口 宣宣(旨カ)首御頂戴ノ御使京都

へ被差越、御献上物御先格之通被為濟口 宣宣首相

渡、旧臘九日被遊御頂戴候段申来候、

六〇八七

一家督ノ者相果直子等無之、依願及三度跡職差延置、内々

養子等申談置候へトモ、難決儀共有之、相究願難申出

御法ノ月数筭合候付、及四度延ノ願申出候者近年多定

式ト相見得、甚以心得違候、跡職ノ儀ハ格別成儀ニテ

御法モ有之事候処、畢竟親類共大形ニ相考候処ヨリ右

次第二モ成立、甚不可然事候条、以来ハ右体願申出候

共御取揚有之間敷候、乍然至テ無趣ニ候ハ、其節

ハ御吟味ノ上可被仰付候条、此旨不洩様可致通達候、

四月

帯刀

(行開朱書)
「本文当座へ相洩候付、此節月番御家老下総殿御聞届ノ

上、当座へモ被仰渡置候旨、名越(右カ)左膳御取次ヲ以被仰

渡候事、」

六〇八八

(朱書)五月 市正
一 江戸へ相詰候諸座書役等ノ内定役差支候節、助勤ノ者

差越無抛訊合申立、跡御扶持米被下度旨申出、其通申

付置候モ有之候へトモ、以来ハ右様ノ役場可成長定勤

ノ者相勤候様申付候条、可承向々へ可申渡候、

六〇八九

(朱書)同
一 武五郎殿、越前家へ御引越ノ儀御延引被仰出置候へト

モ、来月末頃被為入、則日御本丸へ御上リ、一往御逗

留ノ筈候、

六〇九〇

(朱書)六月 同
一 他国者一季抱ノ家来下人御里通供召連罷通候向モ有之

候へトモ、向後 御城内召列候儀ハ無用申付候、併定

府ノ面々等当地逗留中他国者不召列候テ難成向ハ願可

申出候、此旨向々へ可申渡候、

但、御領内へ致居住候他国者、本文同様申付候、

六〇九一

(朱書)同
一 御内証様御事、田ノ浦御屋敷被進以後ハ御逗留ノ御振

合ニテ被為入候へトモ、向後ハ右御屋敷へ御柄居ノ筈

候、

一 何ソニ付御祝詞・伺御機嫌等申上候面々ハ是迄ノ通

御本丸ニテ可申上、

但、本文通御屋敷御柄居ノ儀故、依事ハ參上伺御機

嫌等申上候儀モ可有之候、

六〇九二

(朱書)七月 下総
一 近来御勝手向御不如意ノ上、御物入等ノ儀打続、到テ

御難渋ノ御時節、又ハ来年琉球人參府ニ付テハ御手当

難被行届、御願御申置ノ趣有之、先月四日 太守様為

御名代御一類様被為召、若殿様被遊御登 城候処、

御金一万両・御米一万石御拝借被仰付候旨、御用番青

山下野守様ヨリ被仰渡候段申来候、

六〇九三

(朱書)七月 市正
一 佐竹右京太夫様御息女於瀟喜様御事、先月十二日被成

御天亡、若殿様御從弟ノ御統ニテ一日被遊御遠慮候

旨申來候、

六〇九四

(朱書)同

一 隨姫様御事、去ル六日

(青真繼室)

御前様御養被 仰出候段申來

候、

六〇九五

(朱書)同

(御供目付)

一月次御礼罷出候面々、御目通ノ節迎モ夏ノ内半地半

着用不苦候間、右ノ面々へ寄々無屹旨致通達候様致承

知候、

六〇九六

一 家老中へ

當時至テ難渋ノ時節候へハ先達モ申聞候通、不依何事

省略相用ヒ候様、國中諸士ノ風俗ノ儀モ猶不乱様、時々

氣ヲ付可申聞候間ニハ役人ノ内最貞ノ取計・不正ノ進

物等致受用候者モ有之哉ニ候、此後屹ト不正ノ進物・

最貞ノ取計無之様ニ、重役柄ハ勿論小役人等ニ至迄、

左様ノ儀一切無之様ニ相心得可致精勤候、若右ノ旨不

相用者モ有之候ハ、屹ト咎目可申付候、勝手方ノ儀ハ

人々取入候役場故猶更入念、此後右様ノ儀無之様ニト

存候、尤、勝手方ハ相掛リ候役々小役人等迄猶又及吟

味、左様ノ者有之候ハ、夫々咎目申付、跡役ノ者モ能々

人柄及吟味可申付候、此旨屹ト申聞候、

閏八月

六〇九七

今度御家老中 御前様(ママ)へ被 召出、当御時節故不依何事

省略相用、且諸士風俗ヲ不乱、勤役ノ者ハ不正ノ進物受

用・最貞ノ無取計令精勤候様、不相用者ハ屹ト咎目申付、

就中御勝手方向相掛候御役場ハ人々取入儀故下役等猶又

及吟味、左様ノ者有之候ハ、夫々咎目可申付旨、御筆

ヲ以被 仰出候条、此旨謹テ奉承知稠數省略相用、一統

風俗ヲ不乱、奉行・頭人ハ勿論下役等迄モ謙直ニ可致精

勤候、此已後不正ノ人柄等有之候ハ、屹ト御取扱可被仰

付事候間、聊モ不束ノ儀共無之様、支配下々役等へモ時々

可被申聞候、

閏八月

(顯徒久衛
信濃)

(藤刈実祐)

下総

(川田佐實)

伊織

(赤松則決)
市正

六〇九八

(朱書)九月 市正

一 御内証様御甥菩提院様御事、御病氣御養生不被為叶、

先月十五日御卒去、日数相過候付、今一日被成御遠慮

候、

六〇九九

(朱書)十月 信濃

一 操姫様御事、先月六日 御前様御養被仰出候段申来候、

六一〇〇

(卷之三 五 二四〇五)

(朱書)同 下総・伊織
一 諸向江戸其外交代ノ面々、是迄出立日限等勝手次第申

出来候へトモ、以来八年々々出立日定置間、出立日限申

出候儀ハ差留候、左候テ、当年中ハ別紙日割ノ通申付

候、

但、本文通ニ候へトモ、御用等ニ付別段不被差立候

テ難成節ハ可致差戻候、

一同日出ノ内、小倉着遅速有之趣等ヲ以外船借受、其賃
錢大坂ニ於テ申請候向モ為有之哉二候へトモ、以来ハ
別段相渡間敷候、

右之通、向々ハ可申渡候、

六一〇一(の1)

一 御金五千兩

右ハ、先年以来窮士民等夫々相応ノ御救方ヲモ可被仰
付 御含ノ処、一統奉承知候通御借銀差 御所帯向極々
御難渋成立、御家老中無拗奉願趣有之、乍 御氣苦勞
思召ノ外出銀等被仰付置、追年猶以可及難渋旁以不被
為安 尊慮候、依之奥向万端ノ儀御事ヲ被差欠格別減
少被仰付、御納戸金ノ内本行ノ通表方へ被相下候間、
右ノ足物ヲ以困窮ノ者共飢寒ノ苦無之様、年々当難ノ
者ヨリ無親疎可取扱旨被仰出候、

十一月

(六一〇一の2)

別紙之通、御納戸金ノ内ヨリ御救金被相下候付、到後

年無違失様可取計旨ヲモ被 仰出候条雖有奉承知、御
当地諸郷共飢寒ノ苦ニ堪兼候者於有之ハ当難ノ者ヨリ
応其向御救可被成下候儀候間、窮士窮民ハ勿論其外末々
ノ者タリ共、向々支配頭・主人等ヨリ委敷取調無親疎
可被申出旨、可承向々へ可申渡候、

十一月

(願姓久齋)

信濃

(菱刈某祐)

下総

(川田佐實)

伊織

(赤松則次)

市正

六一〇二

一先月廿八日以 上使戸川隱岐守殿、(音興)若殿様初テ御鷹
ノ雁被遊御拜領候旨御到来候、

六一〇三

(卷之一六 九二四)

(朱書「十一月 下総・伊織・市正」)
一去ル酉年ヨリ格別ノ御省略被 仰出置、何篇御取縮有
之候ヘトモ、御産物高二不応御借金故、年々御借重相
成、御儉約年限モ当年迄ニテ答合候ヘトモ、今以御立
直ノ期不相見得候付、来寅年ヨリ又々五ヶ年、是迄ノ

通欄敷御儉約被仰付候条、少事タリトモ御費無之様、
御役々精々尽吟味、屹其詮相立候様可心掛旨被 仰出
候、

六一〇四

(朱書「十二月 伊織」)

一御城下給地高二相掛出米ノ内、真赤米八千五百石出米
不足ノ方ニ証文入付ノ儀、町家ノ者兩人へ令免件置候
処、差支ノ儀有之、此節取揚申付候付、当秋ヨリ以来
定式出米迄モ高主勝手次第一石ニ付三升ツ、高奉行所
へ願出、三月限御当地出物蔵へ代銀致上納、蔵受取ヲ
以御法ノ月限総相遂候様申付候、且右家ノ面々依願大
坂切午上納請取ヲ以総相遂来候分ハ可為是迄ノ通候、

六一〇五

(朱書「文化三年庚」)

家老中へ

近年所帯向極々不統ニ付、去ル酉年ヨリ家老中議定ニ
任七、五ヶ年ノ間領國中へ重出米出銀申渡、既ニ去丑
年迄年限モ答合候、然共国用不足元来大分ノ儀故、償
方未相叶、当寅年ヨリ先五ヶ年是迄ノ通出米出銀ノ重

ミ於無之ハ繰合難叶由、家老中又々吟味ノ趣申出、暫
 其儀ニ從フ所ナリ、家督以來諸事無益之費無之様申渡、
 殊ニ去ル酉年ヨリ分テ儉約相用ヒ、去夏帰国以來ハ身
 辺ノ儀猶以セリ詰省略セシムトトモ、^{ヘトモカ}差テ其詮モ相見
 ヘス又々重出米出銀申渡、領国中大神・小身・凡下迄
 モ難儀ニ及フコト、他所ニ対シテモ国ノ面目ヲ失フ所、
 畢竟我身不肖ニテ不行届所アル故ナルヘシト、己ヲ罪
 スルヨリ外ハナシ、但シ国家ノ政道ハ君一人ノ事ニア
 ラス、臣下ト是ヲ共ニス、就中家老中へハ所帯向ノ事
 大小トナク預ケ置処ニ、当分通不償ニナリ立、出米出
 銀ノ外重良策ナキハ家老中モ其責ヲ遁レ難シ、サレト
 モ既往々咎メテ益ナシ、将来ノ心得第一ナリ、自今以
 後ハ家老中屹ト申談、国家ノ事ニ昼夜混ト工夫ヲ加へ、
 面々己カ所帯ヲ取立ル様ニ心力ヲ尽シ、存寄候儀ハ少
 モ遠慮ナク時々申出候儀、家老中ハ勿論諸役人中モ此
 旨ヲ相心得候様ニ屹ト可申渡者也、

正月

六一〇六

一今度我々共 御前へ被 召出、御所帯向御難渋付、御
 家督以來諸事無益ノ費無之様被仰付、殊去酉年ヨリ分
 テ稠敷御儉約被 仰出、御身辺ノ儀迄モセリ詰、追々
 御省略被為在候ヘトモ、其詮モ不相見得候付、又々当
 年ヨリ引続重出米出銀等被仰付、御領国中一統末々迄
 モ及難儀候事、他所ノ面目モ可有之、自今已後ハ昼夜
 混ト工夫ヲ加へ、面々己カ所帯ヲ取立候様ニ心力ヲツ
 クシ存寄候儀、御家老中ハ勿論諸御役人中モ此旨ヲ可
 相守旨、御別紙ノ通御筆ヲ以承知仕、誠御仁篤ノ 御
 趣意恐入難有次第奉存候、畢竟先年以来無御抛御入備
 被差屯、御産物高二不応、御大借故是迄ノ御儉約詮立
 兼、大神・小身・末々迄モ一統困窮ノ上、又候出米出
 銀等被仰付候儀、至テ被遊 御痛心候御事、何共奉恐
 入仕合二候、右付テハ、此節ハ何レニモ御省略ノ詮相
 立、近年中是非御立直ノ方相成、年限中ニテモ出米銀
 等御用捨奉安 尊慮候様無之候テハ難相成事候条、難
 有 御趣意ノ程奉汲得、御勝手向相掛候御役場ハ勿論
 其外迄モ尚又昼夜心力ヲ尽、万端極々セリ詰遂吟味可

致精勤候、尤、得差図候儀ハ無遠慮可被申出候、

正月

二月五日

市正

登城、御三殿様へ御祝儀於席々相調可被申上候、

(顯姓久裔)

信濃

(養列実祐)

下総

(川田佐賢)

伊織

(赤松則決)

市正

六一〇

(朱書)二月八日 市正

(齊宣男、忠嗣)

一 今午刻於大奥、御男子様御出生被成候、依之御一門方、

諸大身分其外月次御礼罷出候面々、明九日四ツ時登城、

御三殿様へ御祝儀於席々相調可被申出候、

六一〇七

(朱書)二月 市正

御側・表・御勝手方御用人へ

諸向出立定日被究置間、出立不相成事候付、出立差掛

無抛趣ヲ以、同立相離跡ヨリ追付候筋ヲ以、間日出立

申出候トモ不取揚、已後トモ定日差立候様可取計候、

六一一一

(朱書)二月 市正

一 此度御出生ノ御男子様、島津(久賢、花間)美濃躰養子被 仰出候条、

此旨向々へ可致通達候、

二月

市正

六一〇八

(朱書)同 同

一 此節御出生ノ御男子、島津(久賢、宮之越)図書養子被仰出候条、此旨

向々へ可致通達候、

六一一二

(朱書)二月 市正

一 今度御出生ノ御男子、島津図書養子泰之進殿、島津美

濃躰養子啓之助殿ト御名被遣候、此旨表方へ致通達、

奥掛・御勝手方へモ可相達候、

六一〇九

(六一〇八号行間朱書)

一 昨夜亥刻於大奥 御男子様御出生被成候、依之御一門

方・諸大身分其外月次御礼罷出候面々、明六日四ツ時

六一二二

一 御所帯向御難洪二付、困窮ノ末ナカラ引続出銀米等被仰付候趣ハ追々申渡通候、右通ノ御時節候ヘハ大身・

小身共専節儉ヲ心掛、内外万端ノ儀、夫々ノ貧富ニ応シ勤弁ヲ可加ノ処、間ニハ分限不相応ニ取捨候ヲ名譽ノ様心得違、適々先祖共勤功ヲ以取仕立置候所帯方モ、内証ノ驕式家政不頓着ニテ衰微候様成立候テハ不可然事候、併御奉公方ニ付所帯差迫、且古来ヨリノ御家臣忠勤ノ末々及難儀候節ハ御救モ可被仰付事候ヘトモ、一統奉承知通、當時至テ御手迫故、其儀モ容易ニ難相調事候間、諸向ニテモ猶又細密ニ致勤弁、不依貴賤分限相応ノ品モ可成丈差欠毎物質素ヲ專一二心掛、御奉公方等被仰付候節無難洪様可心掛候、就中末々ノ者共ハ身分ノ弁薄衣食居住ヲ不相応ニ飾立候ヲ余勢ニ致、終ニハ渡世モ及難儀候モ有之候間、前文ノ趣ヲ以支配頭ヨリ時々加教誡、家業ノ儀共無怠様ニ可申渡候、

二月

(願姓入禰)

信濃

(兼刈束祐)

下総

(川田佐實)
伊織

(赤松則忠)
市正

六一二四

一 御所帯向極々御難洪二付、去酉年ヨリ格外ノ御省略被

仰出、出米銀等モ被仰付、精々御取縮ノ上御借銀本濟ノ御内定モ為有之儀候処、右年限モ去年迄ニテ答合候ヘトモ、御大借ノ故、其詮相立兼、今成被召置候テハ追年御勤事等モ不被相整、弥御難題ノ儀差見得候付、当年ヨリ又々御省略被仰出候付、此度ハ何レモ御取縮ノ詮相立、是非近年中御立直ノ方相成、年限中ニテモ出米銀等御用捨ニテ奉安尊慮候様相成候ヘハ末々ニ到テハ猶以難有可奉存儀ニ候、右ニ付テハ先日以御筆被仰出置候通、御身辺ノ儀モ万端御作略被為在候ヘトモ、御儉約ノ詮相立兼、御領国中大身・小身・凡下迄モ一統困窮ノ砌、又々出米銀等被仰付及難儀候事、御外聞ハ勿論御不徳故ノ儀ト御身ヲ被罪、外ハ無之トノ御沙汰ヲモ奉承知、我々共ハ被預置候御所帯向、畢竟才力薄取計不行届被為煩、尊慮候儀、其罪難遁候処、却テ是迄不行届所ハ蒙御用捨、将来ノ儀分テ御

仁篤ノ 御書意ヲモ奉承知、旁以奉恐入次第候、右二

付テハ追々取調申渡節モ可致候間、於諸御役場モ 御

書意ノ程得卜奉汲受、猶又一同尽心力、御益筋ノ儀共

取調得御差図候様可相心得候、

二月

(顯娃久齋)

信濃

(菱刈美祐)

下総

(川田佐實)

伊織

(赤松則決)

市正

六一一五

(朱書)二月 信濃

一 太守様、以宿次御奉書御鷹ノ鶴御拝領、明廿八日四ツ

時御到来被遊御頂戴答候、依之当日御一門方・諸大身

分其外月次御礼罷出候面々登 城、 御三殿様へ御祝

儀於席々相調可被申上候、

(行間朱書) 一 本文二付、即日御礼使御側御用人石黒戸後左衛門出立、

御頂戴ニ付御席詰例之通、支度ノシメ・麻上下、

右、已後為見合書記置候事、

六一一六

(朱書)二月廿九日 市正

(入備宮之城) (齊宣男)

一 島津圖書養子泰之進殿病氣ノ処、養生不相叶、昨日被

致天亡候、依之御一門方並島津左衛門・同格御役人限

詰衆明晦日登城、席々謁ニテ 御三殿様可被奉伺御機

嫌候、

(顯註)

一 春曉院殿幻質靈夢大禪童子」

六一一七

(朱書)三月 信濃

一 先月廿八日於大奥

(齊宣男)

御男子様御出生付、御一門方並諸

大身分・月次御礼罷出候面々、明三日登城、 御三殿

様へ御祝儀於席々相調可被申上候、

(顯註)

一 瑤樹院殿嫩窓幼桂大禪童子」

六一一八

(六二一七号行間朱書) (齊宣男)

(貴品 垂水)

(貴柄)

一 此節御出生ノ御男子、長門殿嫡子島津玄蕃殿養子被

仰出候、

三月

(顯娃久齋)

信濃

六一九

(朱書)三月信濃
一今度御出生ノ御男子、長門殿嫡子島津玄蕃殿養子謙次

郎殿卜御名被遣候、

六一〇

(朱書)三月下総・伊織
一去ル四日江戸上御屋敷 御殿廻不殘西南向御屋敷ノ儀

毛御焼失ノ段申来候、

六一一

(朱書)四月市正

一御隠居様御寿像、思召ヲ以此節無(吃力)□千眼寺へ被納置候、

御(納方)□ニ付テハ御余例モ被為在、屹立候御取計モ可有之

事候ヘトモ、此節ハ思召ニテ其儀無之様被仰付候、

一御像前へ拜仕候儀、貴賤無差別様被仰付候間、制札等

ノ不及沙汰候、

六一二

(朱書)四月下総

一先月廿六日 太守様為御名代御一類中様御一人被為召

候付、若殿様御登城被遊候処、琉球人被召連 御参

府二差掛、江府御屋敷三ヶ所御類焼可為御難儀卜被

思召上候、依之別段ノ訳ヲ以御金一万兩御拝借被 仰
出候旨、御用番牧野備前守様ヨリ被仰渡候段御到来候、

六一三

(朱書)五月市正

一此度ノ火災為武家・町方共夥敷及類焼、竹木及諸色并扠底

ニテ世上可致難儀間、万石以上以下ノ面々表向其外難

差延所ハ各別、其余ハ緩々普請可被申付候、

一家作ノ儀、前々モ如被仰、出手輕ニ可被申付候、国持衆

タリトモ大造ノ作事無用ニ候、惣テ分限ヨリ輕ク見得

候程ニ可被心得候、

一万石以下ノ面々ハ猶更手輕ニ致シ、成丈ケヒキク建可

申候、且又彫物与物ハ勿論惣テ手ノ懸リ候造作一切無

用タルヘク候、

右ノ通可被相触候、

三月

別紙ノ通、從 公義被仰渡候、

六一四

(朱書)七月伊織・市正

一当秋琉球中山王使者被召列被遊 御参府等候処、右ノ

節ハ 御中途御日数相重、御持病御差障ニ付、去ル辰

年ノ通 御発賀御当日迄被召連琉球人ハ如先規御家老

並警固ノ者被相添、御領内ヨリ乗船被仰付、 太守様

ニハ直陸地御通行前以被遊 御参府度旨、御願被仰上

趣有之候処、御願ノ通被仰渡候段御到来候、

六一二五

(朱書)七月 信濃

一 島津美濃ヨリ啓之助殿躰養子成ノ御礼被仰付候、 上々

様へ進上物仕、御礼申上度願被申出趣有之、信濃殿ヨ

リ被相渡候御付紙ノ写、

一 御太刀一腰ツ、 一 御馬代銀一枚宛

一 三種二荷宛

御隠居様・ 若殿様、右ノ通御礼当日進上物納ニ被仰

付候、其外様進上物ノ儀ハ別段申渡候、

六一二六

(朱書)同 同

一 御肴代百疋

一 御樽代二百疋

御前様へ

右ハ、啓之助殿躰養子成ノ御礼名代ヲ以被仰付候付、

進上物ノ儀御見合ヲ以被仰付被下度旨願被申出候、依

之右ノ通於江戸御取替調ヲ以進上被仰付候、

六一二七

(朱書)九月廿六日 将監

一 若殿様、先月廿八日御袖留被為濟候段御到来候、依之

御一門方並諸大身分・月次御礼罷出候面々御祝儀、

六一二八

(朱書)十一月 同

一 太守様御機嫌能、先月十九日被遊 御参府候旨御到来

候、

六一二九

(朱書)十一月十八日 同

一 上御屋敷御殿廻御出来、先月九日御移徒ニ付、 若殿

様田町御茶屋御出、 太守様為 御名代表御門御式台

ヨリ 御入、御規式等無御滞被為濟候段御到来候、

六一三〇

(朱書)十一月 同

一 御式台御使者ノ間上下

右、此已前ノ御使者ノ間上下

(卷之三十七 二六三〇)

一 御内玄喚御使者ノ間

右、此已前ノ御内玄喚御使者ノ間ノ通、

一 表御書院

右、此已前ノ表御書院ノ通、

一 御小書院

右、此已前ノ御小書院ノ通、

一 中ノ間

右、此已前ノ表御書院三ノ間ノ通、

一 御勝手ノ間

右、此已前ノ御勝手ノ間ノ通、

一 御取付ノ間上

右、此已前ノ溜ノ間三ノ間ノ通、

一 同三ノ間

右、此已前ノ伺公ノ間ノ通、

一 台子ノ間末

右、此已前ノ台子ノ間ノ通、

一 奥御客間

右、此已前ノ奥御客間ノ通、

一 上御屋敷

御殿廻御出来二付、御座向別紙ノ通、御移徙当日ヨリ諸事御先規通可相心得旨、申渡有之候段申来候、

六一三一

一 太守様（朱書）十一月 将監 御参府二付、先月廿九日以 上使牧野備前守（忠精）

様御懇ノ被為蒙 上意、去ル朔日御登 城、御参府

ノ御礼被仰上候処、御懇ノ被為蒙 上意、御直御請

被仰上、諸事御先格之通被為濟候段御到来候、

六一三二

一 仙台通宝（朱書）十二月 将監・信濃ノ鑄銭（鏡力）通融□取交、致取替候儀一切不相成趣

共、從 公義当四月被仰渡、其段ハ向々へ申渡置候処、

間々他国ヨリ入来候様ニモ相聞得、勿論旅人へ致取遣

候儀、甚以不可然事候条、右仰渡通堅可相守候、尤、

御藏々上納銭ノ儀モ右鑄銭相受取間敷、左候テ、当分

納居候分御払等ノ節見当候ハ、撰出差分可置候、此旨

向々へ申渡、諸郷私領へモ可申渡候、

六一三三

(朱書)十二月 信濃

一先月十六日 上使伊藤河内守殿、今度琉球人被召連

御參府候付、御米二千俵被遊御拝領候旨御到来候、

六一三四

(朱書)同 同

一先月廿三日 太守様・(音奥)若殿様御同琉球人被召連御登

城、御懇ノ被為蒙 上意、御直御請被仰上、若殿様

二モ被為蒙 上意、畢テ 谷山王子 御目見先格ノ通

相濟、左候テ、西丸へモ被召連御登城、大広間へ 大(家

納言様出御、御両殿様 御目見被為 上意候儀、

御本丸御同前被為濟、 谷山御目見ノ儀モ 御本丸同

前ニテ諸事御先格ノ通相濟候段御到来候、

六一三五

(朱書)文化四年卯正月 將監

一旧冬十一月廿七日琉球人被召連御登城、(家齊)公方様・

大納言様大広間へ 出御、音楽被聞召上、畢テ 御両

殿様 御目見被為濟、中山王其外へ拝領物被仰付御暇

被成下、西丸へモ被召連御登城、同断拝領物被仰付、

諸事御先格ノ通被為濟候段御到来候、

六一三六

(朱書)正月廿三日 將監

一橋大納言様御八男松平久之助様被成御卒去候、右二

付、太守様御從弟ノ御続故、御定式ノ御忌服被為受

候旨申来候、

六一三七

(朱書)三月五日 同

一今月午刻於大奥 御女子様御出生被成候、

六一三八

(朱書)三月八日 同

一島津美作殿於垂水去ル五日ノ夜死去ニ付、

御忌五日・御服十五日御掛被遊候、右ニ付、

御忌(兼)五日・御服十五日御掛被遊候、右ニ付、

御忌(兼)五日・御服十五日御掛被遊候、右ニ付、

六一三九

(朱書)三月 同

一今度御出生ノ御女子、於郁殿(イッ)卜御名被遣候、

六一四〇

(朱書)三月十五日 同

一於郁殿

右、今日兵庫殿養子島津省之進殿へ縁与被 仰出候、

六一四一

一先月十三日(朱書)四月 信濃 上使土井大煩頭様、(大炊頭方、利厚) 太守様御国元へノ

御暇御給、御先格之通被遊御拝領物、從 大納言様モ

以 上使安藤对馬守様被遊御拝領物、同十五日御登(信忠)

城、御礼被 仰上候処、御懇ノ被為蒙 上意、御馬被

遊御拝領候段御到来候、

六一四二

一東海道並木曾路間々交代往来次人馬員数、惣テ道中御(朱書)同

奉行衆へ御届相成事候付、左之通、

一江戸出立ノ面々立日限申出候節、次人足・次馬何疋卜

申儀書付可差出候、

一於道中何ソ誤合有之、人馬増減モ有之候ハ、其段於大

坂手形所へ可相届候、左候テ、御用人方へ可申来候、

一右人馬増減無之候テモ、其段於大坂同断可相届候、

一御国元ヨリ差越候人ハ大坂へ着ノ上手形所へ次人馬員

数何程卜申儀可申出候、

一同断江戸着届ノ節、御用人方へ同断人馬増減ノ誤迄可
申出候、

一右ケ条書之通、何レモ相心得、支配下ノ儀ハ奉行・頭
人ヨリ可申出候、

右、及御届候節、間違有之候テハ不相成候間、急度可
相心得旨、於江戸申渡有之候段申来候、

六一四三

一太守様御事、御持病之御疝積ニテ長途ノ御旅行難被遊(朱書)五月 将監

暫御保養、御快被為成候ハ、早速可被遊御発賀旨、先(親方)

月十日御用番様へ御届被 仰出候段御到来候、

六一四四

一若殿様、先月十六日 御前髪被為執候旨御到来候、(朱書)同

一依願湯治其外諸御暇被成下差越候人、日数等合候翌朝

六一四五

罷帰御届被申出来候へトモ、右通ニテハ御暇等合候翌朝

罷帰御届被申出来候へトモ、右通ニテハ御暇等合候翌朝

日二相掛候付、以来御暇日数筈合候夜中限罷帰御届可
被申出候、尤、今朝罷帰候届被申出来候へトモ、今晚

ト可被申出候、残り日数差上御届向等ノ儀ハ先年被仰
渡置候通ニ候間、此旨可致通達旨信濃殿ヨリ致承知候、
已上、

卯二月二日

西恰之介

六一四六

一御内証様、八月八日御首途・同十四日御出興ノ筈候、

六一四七

一八月朔日已上刻

御内証様、来月四日被遊 御首途候段申渡置候へトモ、

御差支ノ儀有之、右之通被相替候条可申渡候、

七月

(島津入奉)
将監

六一四八

(朱書)同 信濃

一随姫様御事、伊達遠江守様御嫡子兵五郎様へ御縁与御

願之通被仰渡候、

六一四九

一御宿札 薩州大奥

右之通相認、御休泊付ニテ有之候様、

一御答目ノ儀御道中ニテ相尋候ハ、御隠居様御内証様

ト相答、 太守様御実母ノ儀モ相尋候ハ、其通相答候

様、

一御幔幕ハヲノツカラ可有之、外々女中立ノ節ハノマセ

相用候へトモ、此度ハ御紋付御幕ニテ紫緒□桐ノ頭ニ

テ有之候様、

一御挾箱其外御紋付ノ儀ハヲノツカラ 御当人様御紋ノ

筈候、

六一五〇

一太守様御事、御痛所ニ付、此涯御発賀御延引ノ御届被

仰出候段ハ先達テ申渡通候処、今以不被遊御勝候、当

秋迄御滞府被遊御養生度、尤、其内御快候ハ、可被遊

御発賀旨御願出、御用番青山下野守様へ差出候処、先

月十六日御願之通被仰渡段御到来候、

六一五一

(卷之四五 三三九一)

〔朱書〕七月同
一 嫡子相統ノ願申出候者、名跡へ残置候男子無之、養子

ヲモ不承立節、自家兼帯ノ願申出候者其通被仰付来候

へトモ、此已後兼帯不被仰付候、此旨向々へ可致通達

候、

六一五二

〔朱書〕七月廿八日 将監

一 島津玄蕃殿養子謙次郎殿、病氣ノ処、養生不相叶、昨

日被致天亡候、

六一五三

〔朱書〕八月朔日 同

〔齊宣御室、齊興実母〕
一 於八百

(卷之二八 一七五八)

右、殿文字相用候様被仰付候、

右之通被 仰出候、

六一五四

〔朱書〕八月廿三日 信濃

一 御縁女様御儀

〔齊興〕 若殿様へ御縁組相济居候、此御方

へ御引取追テ御婚姻被為整度旨、御願之通被仰渡候付、

六月廿八日御引越御式向等万端無御滞被為済候段御到来候、

六一五五

〔朱書〕八月 信濃

一 随姫様御事、

伊達遠江守様ノ御嫡子兵五郎様へ御縁与御願之通被仰渡候段ハ先達テ申渡置通候、依之兵五郎

様御同名遠慮可仕候、

六一五六

〔朱書〕十月 典繼

一 来年 御参勤御時節御伺被

仰上候処、去年琉球人被召連候付被成御用捨、来年六月中可被遊 御参府旨被

仰出候段御到来候、

六一五七

〔朱書〕十月廿一日 同

一 太守様益御機嫌能、

一昨十九日出水へ御光着、御宿眠ノ通御通行、明後廿三日未ノ刻被遊 御着城筈候、

六一五八

一千眼寺

右、本山寺末寺相成、御目見寺被仰付置、御隠居(重泰)

様御寿像被遊御安置候付、於虎之間寺社奉行申渡之寺

格被仰付、入院ノ御札中紙三束進上ニテ御目見被仰

付、年頭御目見ハ是迄之通、順席ノ儀ハ本誓寺次被

仰付候、

弥勤院末寺西田寺(勸カ)

右、千眼寺へ御隠居様御寿像被遊御安置候付、思

召ヲ以寺格当分之通ニテ千眼寺末子(寺之)ニ改宗被仰付候、

大乘院末寺延命院

右、寺格当分之通、千眼寺末子ニ改宗被仰付候、

右之通被仰付候、

十一月

(顯姓久喬)
信濃

六一五九(の1)

(朱書)文化五辰年
一ヲロシヤ船取計方ノ儀ニ付、去寅年相達候旨モ有之候

処、其後蝦夷ノ島々へ来リ、狼藉ニ及ヒ候上ハ、向後

何レノ浦方ニテモヲロシヤト見請候ハ嚴重ニ打払ヒ、

近付候ニ於テハ召捕又ハ打捨、時宜ニ応シ可申ハ勿論

ノ事候間、万一難船漂着ニ紛レ無之船具等モ損シ候程

ノ儀ニ候ハ、其所ニ留メ手当致シ置可被相伺候、畢竟

ヲロシヤ人不埒ノ次第付取計方敷敷致候訳ニ候条、油

断ナク可被申付候、

右之通、万石以上以下海辺ニ領分有之面々へ不洩様可

被相触候、

十二月

(六一五九の2)

右之通、江戸ヨリ申来候条為心得相達候、

正月

(六一五九の3)

右之通、此節從長崎御奉行被仰渡候条、可承向々へ可

申渡候、

正月

(島津久泰)
将監
(篠田政興)
典膳

六一六〇

(朱書)正月 信濃
一当年御参勤ニ付テハ大里ヨリ御乗船、坂越御船卸

ニテ被遊御通行筈候条、御手当等ノ儀ハ向々へ可申

渡候、

六一六一

御城近火ノ節、御城内供定、左之通、

(朱書)二月 將監
一御一門方並右ノ嫡子

家来二人宛 草履取一人 弓張挑灯二張宛 但、家来持之、

一島津左衛門一列・右ノ嫡子並種子島佐渡

家来一人宛 草履取一人宛 弓張挑灯一張ツ、但書

同断、

一御家老ヨリ御側役迄並詰衆

家来一人ツ、草履取一人 弓張挑灯一張ツ、但書

同断、

一大身分並寄合並・右ノ嫡子

家来一人宛 草履取一人ツ、弓張挑灯一張宛 但書

同断、

一右ノ二男以下

草履取一人ツ、弓張挑灯一張ツ、但、草履取持之、

一御留守居以下諸御役人並無役御近習通

草履取一人ツ、弓張挑灯一張ツ、但書同断、

右之通、以來被相替候条、向々へ可致通達候、

但、諸御手当等ノ儀ハ都テ是迄之通、

六一六二

(朱書)二月 信濃
一大番頭 北郷作左衛門 島津矢柄

右御役場、一往御引払ニテ山吹之間へ相詰、与方取締

等是迄之通被仰付置候、左候テ、新番支配並諸職延月

限調御番帳仕付、明所ノ諸郷預リ被成御免、此以前ノ

通夫々若年寄・御小姓与番頭・月番御用人へ取扱等被

仰付候、

御小姓与番頭、

右、此已前之通小番・新番支配被仰付候、

月番御用人

右同断、明所ノ諸郷預リ被仰付候、

六一六三

(朱書)同 同 十二月
一御作事奉行へ

右ハ、道奉行御役場御引払ニ付、右職分ノ儀、此已前

之通受持被仰付候、此旨申渡、可承向々へモ可申渡候、

(行間朱書)
一右之通、江戸ヨリ申来候間、為心得相達候、

六一六四(の1)

〔朱書〕三月 正月
一道奉行御役場引弘、右職分ノ儀、御作事奉行受持被仰

付候付、道橋破損所見分方等ノ儀共、已前之通大目付

取計ノ筈候、此旨可承向へ可申渡候、

(六一六四の2)

〔行間朱書〕
右之通、此節從長崎御奉行被仰渡候条、可承向々へ可

申渡候、

正月

(島津久泰)
將監
(鎌田政興)
典膳

六一六五

〔朱書〕同
一直触以下ノ御役人、旅行帰又ハ御暇ニテ差越帰着ノ上、

是迄奏者番へ相調奉伺 御機嫌来候へトモ、一往不及

其儀筋被仰付候、此旨致通達、奏者番へモ可申渡候、

六一六六

〔朱書〕四月 典膳

一松平虎千代様御事、

(家齊室、茂姫)

御台様御養被 仰出候段、從

公義被仰渡候旨申来候、依之御名遠慮ノ儀申渡筈候へ

トモ、兼テ遠慮ノ文字故別段不申渡候、

六一六七

〔朱書〕同
(織姫女、彌姫)

一真含院様御卒去ニ付、御隠居様御忌服被遊御受候、

依之御一門方ヲ始、於席々謁可被奉伺御機嫌候、

六一六八

〔朱書〕六月 典膳

一太守様 御隠居様

(斎興)
若殿様

右之通、公辺向・他所・御内輪共御順被相究候、

一太守様 御隠居様 御前様 若殿様

但、御幼少ニテ御官位無之内ハ右之通ニテ、御官位

被為在候へハ 御前様ヨリ頭ノ御順被相究候、

一大御前様 御前様 若御前様

右、御夫人様ノ御事故、向後ハ右之通被相定候、

右ハ、御名御順ノ儀、先達テ申渡ノ趣有之候へトモ、

向後右之通被相究置候、此旨向々へ可申渡候、

六一六九

(六一六八号行間朱書)

一御名御順ノ儀、

(卷之二八 一七七五)
大守様 御隠居様 御前様 若殿様

ト相認来候へトモ、公辺・他所向へ相掛候節ハ 太

守様 若殿様 御隠居様 御前様卜御名順相認候様被

仰付候、尤、御内輪ニテハ是迄ノ通被仰付候、

三月、十日

(願姓久翁)
信濃

右朱書仰渡、於江戸御吟味有之、本文墨書ノ通被仰渡候ニ付、不用相成候へトモ為見合書留置候事、

島津家歴代制度卷之七十

六一七〇

(朱書) 閏六月 典膳
一七月六日九時 御首途

同月廿一日四半時 御発賀(駕力)

右之通被仰出候条、此旨向々へ可申渡候、

六一七一

(朱書) 同 将監
一諸土居屋敷四壁山植替ノ儀、道奉行方へ申出来候へト

モ、右御役場御引弘ニ付、以来ハ御勘定所へ願出候様

申付候、町屋敷ノ儀同断ノ仕向ニ申付候、

六一七二

(朱書) 同 将監・信濃・典膳

一御隠居様御儀、当分 御介助ノ儀ハ御名目迄モ御断ノ

事ニハ候へトモ、此節ノ一件ニ付、向後江戸御国元共

何篇 御下知被遊候間、此旨向々へ不洩様可致通達候、

(卷之四九 三七五九)

六一七三

(朱書) 御隠居様 仰出
一領國中風俗ノ儀ニ付テハ先年以来度々申渡趣有之候ハ

トモ、頃日ニ至リ其詮モ無之、城下ニテ向々ヲ立、

元来同明輩(朋力)ノ事候処、他与ハ他所ノ者ノ様相隔候風儀

有之、年若面々夜行辻立等ノ儀モ不相止趣相聞得、畢

竟右通風俗不宜所ヨリ全体一和不致、党ヲ結候事ニモ

成立、仕置ノ妨ニ相成不可然事候、依之大身・小身共

ニ第一兼テ定置候作法ヲ相守、分限相応夫々身分ヲ儀、

專國中静謐ノ儀ヲ心掛、一統ニ致和熟、若輩ノ者共ニ

モ喧嘩口論ハ勿論徒ニ夜行辻立等禁止ノ趣、其外言語

容貌等ノ儀迄申渡置候通忘却不致堅相守、屹ト風俗立

直候様取計、請持ノ役々ニモ無緩疎諸取締行届候様可

心掛候、此上相背候者モ有之候ハ、屹ト咎目申付、就

中党ヲ与、仕置ノ妨ニモ相成候者有之候ハ、其身ハ嚴

科ニ申付、親兄弟共ニ大形ノ依輕重、相当ノ咎目可申

付候、

右之通、薩摩守へモ申来、領國中へ申渡、其外締モ相

成候細々ノ儀ハ家老中申談、是非風俗立直候様可取計

候、

六月

家老中へ

(頼妹久庵) 信濃 (藤田政興) 典膳

六一七四

(朱書)右三付御家老兼添書

一御領國中風俗等ノ儀ニ付、此度於江戸 御隠居様御意

ノ趣御直ニ信濃承知仕、別紙写之通 御筆ヲ以被 仰

出候付、(齊意) 太守様被遊 御承知、右仰出ノ御趣意通人々

厚奉汲請、此涯屹ト其詮相見得候様ニトノ御事ニ候、

風俗等ノ儀ニ付テハ先年以來度々被 仰出置、御当代

猶又追々被為及 御沙汰御事候処、頃日ニ至リ其論無

之甚以不可然候、此節 御隠居様分テ被 仰出候趣、

御役々ヲ始奉承知通ニテ我々共ニモ奉恐入儀候条、於

諸向モ御深慮ノ程奉恐察、万端相慎、屹ト風俗等立直

リ候廉相見得、 尊慮ヲ奉安候様朝暮心頭ニ掛堅可相

守候、就中年若ノ面々へハ父兄ヨリ無油断可令教育、

万一不守ノ者モ候ハ、当人ハ勿論身近者迄モ相当ノ御

咎目可被仰付候条、此旨行届候様支配下々役所へモ時々

可申合候、

六月

(島津久泰) 将監

六一七五

(朱書)七月 李

一金二千兩

右ハ、此節 御隠居様何篇御下知被遊候付、差当リ御

所帯向ノ儀御氣ヲ被為付、當時至テ御難渋ノ段委細被

聞召通、別テ 御氣之毒被思召上候、依之 御隠居御

方御統料是迄追々被相減候上ノ御事候へハ御余計進ハ

無之候へトモ、御用分可成長被差欠、當時御用金丈見

賦、御余計金右之通此節表へ被差出候旨申来候間、此

旨可承向へ可申渡候、

六一七六

(朱書)御隠居様仰出

一此節江戸国許共何篇致下知候様、無抛承候趣有之、難

黙止ノ命ニ応シ候処、第一所帯向極々難渋ノ時節ニテ

段々聞通趣モ有之、難差置急務ニ候故、乍省略中五ヶ

年ノ間猶又稠敷取締ノ儀致工面、差当於爰元ハ掛ノ者

ヲモ申付、何篇取調申出候様、先達テ致沙汰置候、然

(卷之一六 九二五)

処既二段々省略為有之上ノ事候へハ一通リノ取調ニテハ致作略度心付候儀ニテモ、同前ノ差支ニテ最早手ノ付様ハ無之ト等閑ニ相成候儀モ可有之候へトモ、前文

通何篇用向聞届致承知候上ハ何レニモ取縮ノ詮相見得、所帶向少々ニテモ立直リ候様無之候テハ不相濟儀ニテ、是非詮立候様ニト手元ヲ始、日夜是ノミ致心勞事ニ候、依之諸役々ニモ此旨ヲ汲請、是迄ノ儉約筋トハ訳モ相替候儀ト相心得、実々一涯染入心頭掛、急度遂吟味候様可致候、勿論右通取縮向ノ事候へハ諸役場難儀ニモ可及儀ニテ氣ノ毒候へトモ、今形ニテ差置候テハ不遠弥増難渋ニ成立、其節ハ諸人ノ難儀モ無申計事候故、兎角取縮無之候テ不叶儀候間、深此旨ヲ可存候、乍然差当リ諸人迷惑ニモ相成候儀ハ用捨可致候、畢竟所帶向立直リ、諸人モ身分相成致渡世候様ニトノ本意候間、旁右之趣不取違、此涯無油断諸事取縮、鎖細ノ儀迄モ行届、無延引申出候様可取計、乍此上万一不頓着ニテ打過候向モ有之候ハ、屹ト可及沙汰候条、右ノ趣諸役場下役迄モ致得心候様申渡、於国元モ右趣意ニ準シ取計有之候様可申越候事、

六二七七

一此節江戶御国元共 （重要） 御隠居様何篇御下知被遊候処、第

一御所帶向極々御難渋ノ御時節ニテ、難被差置御急務故、乍御省略中猶又当年ヨリ五ヶ年ノ間敷敷御取縮被仰付、是非其詮相立候様、乍然差当リ諸人迷惑ニ相成候儀ハ御用捨可被仰付、畢竟御所帶向立直リ、諸人モ身分相成致渡世候様ニトノ御本意候間、旁 御趣意不取違、此涯無油断、鎖細ノ儀迄モ可申出、乍此上万一不頓着ニテ打過候向モ有之候ハ、屹ト可被及 御沙汰趣、別紙写ノ通被 仰出候付、 （弁意） 太守様被遊 御承知、厚御趣意被思召上候間、御役々得ト奉承知、極々セリ詰吟味ヲ尽シ、何レニモ近年中御取縮ノ詮相見得、奉安尊慮候様無之候テハ不相成事候条、一涯致精勤諸事取調無延引可申出候、

一江戶詰人数致交代候節、代役致出府候テモ、無故長々重リ合候者モ有之候付、以来ハ罷登候者着坂ノ上川登申渡候段、時々大坂御留守居ヨリ江戶詰御用人方へ申

越候付、右間合次第不差支向ハ中途代ニテ被差立候条、

奉行・頭人・支配頭等氣ヲ付、出立ノ儀可申出候、尤、

一人役又ハ御用次渡等付、中途代難致向ハ代役出府ノ

上御用濟早々致出立候様被仰付候間、右之趣人々心得

違無之様向々へ可申渡候、

但、同立等不承立出立難致向ハ、其段申出候ハ、何

分申渡可有之候、

六一七八

(朱書)七月 登
一諸稽古方ニ付、是迄御物御計ヲ以年中付届品被下来候

へトモ、此節分テ御取縮ニ付、年限中都テ引取被仰付

候旨、於江戸申渡有之候段申来候条、此旨可承向へ可

申渡候、

但、自分ニテ致稽古候儀ハ勝手次第第二候、

六一七九

(朱書)七月廿七日 典膳

一昨夜於大奥御女子様御出生被成候、
(齊真女)

六一八〇

(朱書)八月 同
一今度御出生ノ御女子様、於宝殿^ト奉称候、

六一八一

(朱書)九月 同
一随姫様御儀、伊達遠江守様御嫡子兵五郎様へ御縁与御
(齊真女) 願之通被仰渡置候処、兵五郎様御事先達テ御卒去付、

追テ御相応ノ御縁与御願可被成旨、御用番様へ御届出

被差出候段申来候、此旨可承向へ可申渡候、

六一八二

(朱書)同 同
一六人賄料以下ノ医師上下ノ節、是迄薬箱持夫賃被下、

鍼医師へハ挟箱持夫賃被下来候処、此節分テ御取縮ニ

付一往不被成下候、

但、絵師モ同断、細工人並大工棟梁上下ノ節、細工

道具持夫賃被下来候へトモ、同断ニ付不成下候、

右之通、於江戸申渡有之候段申来候、

六一八三

(朱書)十月 登
一随姫様御事、淡路守殿御嫡子島津護^(忠愍)之助殿へ被成御縁
(島津忠持 佐土原)

与度旨、御願之通被仰渡候、

右之通被仰付候段申来候、

六一八四

(朱書)同

(齊草)同

一 隨姫様御儀、(島津忠持、佐土原)

(忠徳)

淡路守殿御嫡子護之助殿へ御縁与御願之

通被仰渡候付、御承知ノ上表向御引越可被為在候へト

モ、御逗留ノ筋ニテ先月廿一日御内々御引越被為濟候

段申渡候、

六一八八

(朱書)同

(同)

一 御小納戸頭取ヨリ御小姓頭取、以来兼務被仰付候段申

来候、

(卷之五一 三九八五)

六一八九

(朱書)同

一 御近習番ノ儀、奥御小姓ヨリ兼務被仰付候段申来候、

(卷之五二 四二二五の2)

六一八五

(朱書)同

一 御側目付・御小納戸ノ儀ハ以来双方兼務相勤候様被仰

付候段申来候、

(卷之五一 四〇四一)

六一九〇

(朱書)御賜旨様仰出

一 此節無抛訳合ニ付、政事向何篇致下知事候処、所帯向

極難渋ニテ、江戸・京・大坂借金致増長、利払其外諸

用金は迄ノ産物料ニテハ余程不引足、大坂続金モ相滞、

当時勤事モ調兼候程ニ成立候段細々聞通候、右之趣ニ

テハ今形召置候ハ、年々令困窮、国家難相立成行、其

上万一公私ニ付格段ノ入価ニ及候儀共致到来候節ハ必

至下差支、可取計手段モ無之儀案中ニテ、誠ニ大事ノ

時節候間、一日モ難差置、則ヨリ掛り役々ヲモ申付諸

向取縮、鎖細ノ事迄モ自身聞届減少申付、且産物仕送

六一八六

(朱書)同

一 奥御同朋

(卷之五二 四一三二)

右御役名被相除候、

六一八七

(朱書)同

一 御茶道頭

(卷之五一 四〇八七)

右御役名被相建候、御役順御同朋頭次、

等ノ儀モ追々取調、国元ヘモ掛合、何篇手ヲ尽事ニテ、右通乍隠居引請候儀不容易事ニテ、先年致介助候節ト

ハ沢合モ相替、老年ノ儀万一其詮不相立成就不致候テ

ハ老後ノ恥辱、何トモ残念ノ至候故、日夜是ノミ致心

勞候、然処江戸国元共ニ是迄段々致省略候上ノ事候ヘ

ハ此節取縮ノ儀ハ到テ迫リ詰候事而已、其上賄料諸給

金引方並一匁出銀迄モ申付、以前トハ引替諸事不便利

相成、諸人モ及迷惑甚氣之毒候ヘトモ、一通リノ儀ニ

テハ中々可詮立様無之、年々衰微ニ及国中ノ面々飢渴

ノ難ヲ難逃相成候儀必定ニテ、其節ニ至リ候テハ最早

相救候趣法モ有之間敷、兎角此涯急度不取扱候テ不叶

事候条不得止事、前文通嚴敷取縮申付、年限中ニハ是

非其詮相立、諸人ヘモ安堵為致度念望ニテ精魂ヲ尽事

候間、此旨ヲ得ト汲受、一往ノ不如意ヲ致堪忍、專国

家ノ為ヲ相考、向々勤場等モ可成文差操、一統致和熟

令精勤、末々迄モ心得違無之様申渡、一通リ申渡ノ分

ニテハ得心致兼候者モ可有之候間、支配頭等ヨリ右之

趣意親切ニ可申聞候、

右之趣、江戸国元並京大坂屋敷迄モ不洩様申渡、猶又

家老中ヨリ右之趣意ヲ以別段委細ニ申渡、諸事行届候様可取計候、

九月

家老中へ

六一九一

(卷之一六 九三七の?)

御所帯向極御難渋ニテ御借入金致増長、御利私其外無御

抛御用金は迄ノ御産物料ニテハ余程及御不足、大坂御統

金モ相滞、当時御勤事モ御調兼被遊候程成立候段、御

隠居様細々被 聞召通、此上万一格段ノ御入価共被及御

到来候節ハ確ト御差支、御国家ノ御危難ニモ可相掛、殊

更 御老年様ナカラ何篇御引請ノ上、若其詮不相立候テ

ハ御恥辱被 思召上候トノ御趣意、到我々共何共奉恐入

次第二候、御取縮向ノ儀ニ付テハ先達テヨリ追々被仰付、

御年限中ニハ是非其詮相見得、諸人モ安堵仕候様ニ御心

ヲ被為尽候趣、旁御別紙之通被仰出、御深慮ノ程難有次

第二候間、段々申渡置候通、掛御役々ハ勿論於諸向モ一

統致和熟、朝暮掛心頭、鎖細ノ儀迄モ細密尽吟味、何レ

ニモ近年中御所帯向立直リ、諸人モ身分相応致渡世候様

成立 御安慮被遊候様、精々可相励候、此節於江戸表モ
猶又御吟味ノ上、詰御役々等迄モ減少被仰付、万端御事
ヲ被為欠、一涯御作略向セリ詰御取調有之事候間、厚御
趣意ノ程末々迄モ奉汲受、每物省略ヲ加、着服又ハ無益
ノ参会等ノ儀迄モ先年以来申渡置候通、弥以堅可相守候、
此旨支配下下役等へモ時々可申合候、

十月

(島津久泰)
将監

(顯桂久喬)
信濃

(島津久兼)
登

(鎌田政興)
典膳

六一九二

(朱書)十一月 将監

一 太守様就御参府、先月十三日以上使土井大煩頭様御懇
(大炊頭カ、利厚)

之被為蒙上意、同十五日御参府ノ御礼御痛所被為在、

御使者ヲ以御献上物等無御滞被為濟候段御到来候、

六一九三

(朱書)十一月廿八日 典膳

一 於宝殿

右、今日帶刀嫡子肝付米鶴へ縁与被仰付候、
(兼書)

六一九四

(朱書)同
一 於宝殿

右、今日帶刀嫡子肝付米鶴へ縁与被仰付旨被仰出候条、
向々へ可致通達候、

六一九五(の1)

(御触書天保集成 五四四七号)

一 服忌ノ儀、難心得品ハ兼テ大目付・御目付ノ内へ承合
相糺置、差懸尋候ハ、可為不念旨、元文ノ度相触候処、
近来忌服請候時ニ臨、問合候面々多且又入組候訳合無
之候テモ承合^候類有之様ニ相聞候、向後右体ノ儀無之
様相心得、親屬ノ内服忌不審ニ存候者ハ前以大目付・
御目付ノ内へ承合置可申候、

右之通可被相触候、

九月

(六一九五の2)

右之通、從 公義被仰渡候条、此旨可承御役々へ可申
渡候、

十一月

将監

六一九六

(朱書)十一月 将監
一千眼寺

右、当住持大幻目刀建言(自力建立カ)ニテ候処、思召ヲ以 御寿像

御安置被遊候付、御影当(堂カ)ヲ初御座ノ間容殿・開山堂

ニ至リ、後年御修甫所被仰付、住持柄居所・庫理等(庫カ)ハ

自分修甫(筋カ)ノ箱被仰付候、勸音堂ノ儀モ開山堂同様御修

甫所被仰付候旨申来候、此旨寺社奉行其外可承向々ハ

可申渡候、

六一九七

一

島津淡路守殿

御家老

御用人

御留守居

右役々、他所・御内輪共是迄御字不相用唱来候へトモ、

淡路守殿御儀、乍御末家御大名ノ御事候間、以来御内

輪ニテハ右之通相唱、又ハ諸書付等モ右ノ振合ヲ以可

相認、尤、他所向ノ儀ハ是迄之通被仰付候旨申来候、

六一九八

(朱書)十二月 安房

一大納言様、去ル朔日 御婚禮被為済候付テ、姫宮様御

事、御簾中様卜可奉称旨被仰渡候、

右之通、從 公義被仰渡候段申来候、

六一九九

(朱書)文化六年巳正月 登
一旧臘七日暮六ツ過頃江戸桜田御屋敷へ火起リ、段々消

方有之候へトモ、難取鎮御長屋等及焼失、右ニ付翌八

日御差控御伺書被差出候処、同日御用番青山下野守様

ヨリ出火御遠慮被仰渡置、同十五日被成候旨被仰渡候

段御到来候、

六二〇〇

(朱書)御家老座印 正月十六日 行カ
一道中筋宿々人馬賃錢割増ノ儀、寛政十一年年ヨリ当夏

十二月迄二年限ニ候処、宿々困窮ニテ難儀ノ趣相聞候

付、東海道ハ品川ヨリ守口迄並佐屋路共、来巳正月ヨ

リ寅十二月迄十ヶ年ノ間人馬賃錢・船賃共是迄ノ通ニ

割増、中山道ハ坂橋ヨリ守山迄並美濃路共、日光道中

八千住迄鉢石迄例幣使道・壬生通り・御成道・水戸佐

倉道共、甲州道中ハ内藤新宿ヨリ下諏訪迄、奥州道中
ハ白沢ヨリ白川迄、来巳正月ヨリ寅十二月迄十ヶ年ノ
間是迄ノ通一割五分増受取候様宿々へ申渡候、

東海道之内

小田原宿

箱根宿

三島宿

蒲原宿

日坂宿

二川宿

藤川宿

石薬師宿

坂之下宿

右九ヶ宿ハ近年別テ困窮候付、来巳正月ヨリ酉十二月
迄五ヶ年ノ間前条ニ割増へ、猶又三割相増、都合五割
増申渡候、

中山道之内

美江寺宿

右同断ニ付、来巳正月ヨリ未十二月迄三ヶ年ノ間前条

一割五部増へ、猶又三割五部相増、都合五割増申渡、

奥州道中ノ内

喜連川宿

右同断ニ付、来巳正月ヨリ酉十二月迄五ヶ年ノ間前条

一割五部増へ、猶又三割相増、都合四割半増申渡候、

右之通候間可被得其意候、右之趣向々へ可被相触候、

辰十一月

右之通、從 公義被仰渡候、

六二〇一

(朱書)正月 登

丹後守様御家内御曾祖父

本多(忠水)随翁様

右同御大伯父

本多(忠憲)甲馬様

本多(忠建)官十郎様

右之通申来候条、可承向へ可申渡候、

六二〇二

(朱書)同 同

一税三郎様御事、本多丹後守様、

右ハ、御家内様共以來此御方 御惣方様ニ御両敬ノ御

(卷之四八 三六五一)

取替被成度旨、於江戸被 仰進趣有之、旧臘廿五日被
応其意候由申来候、

六二〇三

(朱書)同

一 随姫様御事、島津護之助殿へ御縁与御願通被仰渡候付、

(忠徹 佐土原)

御内々御引越御逗留ノ筋ニテ被為入候処、旧臘廿五日

御引越ノ御届被仰出候段御到来候、

六二〇四

(朱書)同

(信濃)

一去ル丑年御米一萬石・御金一萬兩御拝借被為蒙仰、去

卯年ヨリ十ヶ年賦御返上納ノ筈候へトモ御願ノ趣有之、

当年ヨリ御上納ノ筋被仰渡置、且又去々寅年御金一萬

兩御拝借被為在、是又当年ヨリ十ヶ年賦御返上ノ筋被

仰渡置候処、当御時節ノ儀故御役々へモ致吟味、二口

共二御上納ノ儀ハ御操合出来兼候付、丑年ノ御拝借金

米御返上御皆済ノ上、寅年ノ御拝借金来ル寅年ヨリ十

ヶ年賦御返上ノ筋被仰付被下度趣ノ書付、御勝手御掛

牧野備前守様

(忠勝)

へ被差出候処、去月廿一日備前守様ヨリ
其通被仰渡候、

六二〇五
(朱書)三月朔日
(登)

一 昨晦日夜子刻於大奥 御女子様御出生被成候、
(齊宣女、於幹)

六二〇六

(朱書)三月七日

(典膳)

一 昨六日於大奥 御男子様被成御出生候、
(齊宣男、範之進)

六二〇七

(朱書)三月

(同)

一 今度御出生ノ御女子様於韓殿、御男子範之進殿卜奉称
候、
(幹力)

六二〇八

一年若面々、学文武芸ノ儀ハ第一心掛出精不致候テ不叶

事故、造士館・演武館ヲモ令造立、無油断致修練候様

ニトノ儀、段々申渡置通二候、然処此以前ヨリノ風俗

ニテ、兼テ懇意ノ者申合夜会等相企向々寄集、内証二

テ会統又ハ武術稽古致候儀モ有之由候へトモ、其通二
(説力)

テハ國中一統不致様成立候基候間、向後右体夜会ハ勿

論向々寄集候儀堅停止申付候条、造士館・演武館又ハ

夫々於師家折角致出精、自分宅へ相集候儀一切致間敷

候、尤、家柄ノ面々不断師家へ差越候儀不相成向、宅

へ相招師南ヲ受候儀ハ其通可有之候、左候テ、造士館・

演武館掛ノ面々、右之趣得ト相心得、稽古方ニ付テハ

油断無之様取計、夫々師家ノ儀モ右之心得ヲ以門人教

導ノ儀致出精候様可申渡候、此上万一致違背候者於有

之ハ屹ト咎目可申付候、

右之趣不洩様申渡、猶又取締向等ノ儀ハ家老中申談、

大目付・大番頭・小姓与番頭へモ委細申聞、行届候様

可取計候

正月

家老中へ

六二〇九

年若面々、学文武芸第一出精無油断致修練候様ニトノ儀、

追々被 仰出、毎度面々承知ノ通候故、此以前ヨリノ風

俗ニテ、懇意ノ者申合向々夜会致シ、内証ニテ会説式ト

武術致稽古候儀モ有之由、其通ニテハ一統不致様成立候

基ニ候間、向後造士館・演武館又ハ於師家可致出精趣共、

此節猶又御別紙之通 御隠居様被 仰出候付、難有奉承

知、 仰出之 御趣意人々急度可相守候、且家柄ノ内不

断師家へ差越儀難成向ハ、宅へ相招指南ヲ受候儀ハ其通

ニテ、折角出精稽古方可有之候、右ニ付テハ師家ノ儀ハ

多ノ門人引受ノ事候間、猶以心掛丁寧教導可致候、乍此

上若モ不守ノ族有之段相聞得候ハ、当人ハ勿論夫々相

当ノ御取扱可有之候条、此堅相守候様支配下下役等へモ

時々可申含候、

三月

(島津久兼)
将監

(頼廷久衛)
信濃

(島津久兼)
登

(鎌田政興)
典膳

六二一〇

(朱書)三月 信濃
一大番頭

右御役場、一往御引払被仰付候へトモ、以前之通被仰

付、御役所モ以前ノ通与所へ被相建候、

六二一一

(朱書)同 同
一小番・新番支配

(卷之五〇 三八九八)

一 御番帳仕付

一 明所ノ諸郷預

右之通、大番頭へ被仰付候、

右御役名被相除候、

六二一六

(朱書)同

一直触以下御役人、旅行帰又ハ御暇ニテ差越帰着ノ節、

六二二三

(朱書)同

一 御小姓与番頭

(卷之五〇 三九二三)

右、小番・新番支配被仰付候へトモ被成御免候、

以前之通被仰付候、

六二一七

(朱書)同

一大目付以上、台輪・駕籠相用來候へトモ、一往歩行・

(卷之三五 二三五〇)

六二二三

(朱書)同

一 道奉行

(卷之五一 四〇三三)

右御役場、一往御引弘被仰付置候へトモ、以前之通被

仰付、御役所ノ儀ハ御作事詰所へ相勤候様被仰付候、

年頭・節句日計当分ノ通相心得候様被仰付置候へトモ、
成丈台輪・駕籠・乗馬相用、依事テハ歩行モ可有之旨、
此節 御沙汰之趣江戸表ヨリ申来候、

六二二四

(朱書)同

一 御庭奉行

(卷之五二 四一〇二)

右御役場、御引弘ニ付、御鳥預頭取ヨリ兼務被仰付候、

六二一八

(朱書)三月 信濃殿ヨリ被相度候御書付ノ存

一何ソニ付内意ノ趣ヲ以訴訟事差出候節、用達又ハ内用

頼其外手寄ノ者相頼、於宅内意申込候上書付差出候モ

有之候へトモ、以来ハ御用人取次ヲ以書付可差出候、

六二二五

(朱書)同

一 学校目付

尤、御用人ノ儀モ於宅内意等承間敷候、

一 依役場訴訟事、御家老へ直申込候向モ有之候へトモ、
以来ハ右様ノ儀共御用外ハ致間敷候、

一 役場訴訟事、御用紙ニ内意書相認差出候向モ有之、御
用書付ニ紛敷候間、右体ノ儀付御用紙召仕間敷候、

一 輿掛並御家老座書役ノ儀モ於宅内意等承間敷候、

一 奉行・頭人並書役等ノ儀モ於宅内意等承間敷候、
(敷説カ)

右之通、去年二月申渡、御勝手方ヨリモ同様ノ趣申渡
置候へトモ、以前之通被仰付候条、此旨向々へ可申渡
事、

六二一九

(卷之一九 一一三五)

(朱書)三月 信濃
一 琉球・道ノ島へ被差越候人並付足輕へ御心付銀又ハ故

実代被成下事候へトモ、当御時節柄ニ付、一往右被下
方無之御扶持米迄被下置候、左候テ、当話ノ人ハ最早

渡リ方為有之筈候付、以後代リ合節ヨリ右通ニ候、

一 諸藏役人ノ内、御心付銀被下來候分ハ前条同断ニ付、

一 往不被下候、左候テ、以来藏相仕舞候上、御損失無
之様御為筋而已心掛、骨折相勤候者へハ諸所下代・出
物藏役人又ハ垂蠟所取扱役人等ノ間被仰付筈候、

六二二〇

(朱書)三月 将監

一 操姫様御事、本多下総守様へ御縁与御願之通被仰渡置
(齊直女)

候付、御届ノ上先月十五日御引越被為濟候、左候テ、

御婚姻之儀ハ追テ御整ノ筈候旨御到来候、

六二二一

(朱書)三月廿八日 典膳

一 於□殿御儀、安芸殿嫡子島津三次郎殿御入輿、
(忠俊)
範之進
(齊直男)

殿御儀、島津図書養子被 仰出候、
(久徳、宮之城)

六二二三

(卷之三九 二八二七)

(朱書)四月 信濃
一年頭ニ付 御書院椀飯御飾ノ儀、御年限中御引取被仰

付候、

六二二三

(卷之三六 二四四四)

(朱書)同 同
一年頭御謡初ノ儀、被下方ノ御入価ニ相成儀ハ御年限中

御引取、御式ノ儀是迄ノ通被仰付候、

一 正月十一日御鏡御祝ノ餅被下候儀、御年限中大目付以
上並物頭且掛ノ肝煎へ計被下候、

一大般若経並愛染明王御祈禱ノ節、出家へ御賄被下候儀
菓致作略、一度被下粥ノ儀ハ御年限中御引取被仰付
候、

一御法事相濟候上、御名代御寄合ノ節迄薄茶被差出、
其外ハ煎茶ニテ相濟候様被仰付候、

右之通、御年限中被仰付候、

六二二四

(朱書)四月登

一御国元ヨリ被差越候交代人数ノ内、木曾路通行ノ儀、

道中御奉行衆へ御願立有之候処、人足七八人・馬三疋

迄ハ不及伺、江戸着ノ上御届申出、右人馬(高九)ヨリ余計

ノ儀ハ前広得差図候様被仰渡候付仕向左之通、

一御国元ヨリ被差越候交代人数ノ内、木曾路通行望ノ者

ハ被差廻候条、春秋五六度ツ、二限り、右人馬高ヨリ

過上無之様大坂御留守居見計ヲ以可差通候、

一右二付、交代等ニテ被差越候面々、木曾路望ノ者ハ於

大坂御留守居へ相付願申出、入用人馬數書付差出、免

許ノ上罷通、江戸へ致着候ハ、繼人足幾人・繼馬幾疋

ニテ罷通候訳、又ハ自然於道中病氣差発、大坂ニテ申

出置候人馬數ノ外無扱高人数繼置候ハ、於何方駄々向
程ツ、何様ノ訳ニテ臨時ニ相雇候旨、是又御留守居役
所へ届書差出、御留守居役所ヨリ承届候書付相渡、右
書付物奉行所へ差出候上、御賄料等は迄ノ仕向通可相
渡候、

一大坂ヨリ木曾路差立候面々並繼人馬數、春秋両度ツ、
江戸御留守居へ可申遣候、左候テ、右ハ取調道中御奉
行へ御届可申出候、

一通行ノ面々自然心得違、自儘ニ木曾路罷通候者ハ江戸
着ノ上屹ト可及沙汰候条、御国元出立ノ砌向々支配頭
等ヨリ時々無手拔様可申聞候、

一江戸ヨリ木曾路被差立候向モ、時々御留守居役所へ入
用人馬届書差出、御留守居役所承届候書付相渡、物奉
行所へ差出候上、御賄料等可相渡候、

一江戸ヨリ被差立候面々、繼立人馬並道中ニテ不時雇入
人馬數有無ノ訳、於大坂御留守居へ届可申出候、其上
ニテ御賄料等可相渡候、

一右二付、於大坂取揃候繼立人馬届書、是又春秋両度ニ
江戸御留守居方へ可差遣候、

一 木曾路通行御願ニ付テハ道中御奉行衆下役等へ御付届
向等有之事候間、右人目料ノ儀ハ木曾路罷通候面々へ
割合代銀上納申付候、

右之通被 仰付候条、聊緩セノ儀共無之様於江戸申渡
有之候段申来候、

六二二五

(朱書)四月 登

一 寛二郎様御事、来午春 御下向、直ニ 御本丸へ被為

入候様被 仰出候旨申来候、

六二二六

(朱書)同 同

一 御隠居 御家督ノ御願被仰出、御願之通被仰渡候へト

モ、 御家督様へ御什物御讓状被進候御先例ニ候、依

之 御当代右式御道具等増減モ可有之哉、早々取調申

出候様御納戸奉行・物頭其外へ可申渡候、

六二二七

(朱書)同 同

一 太守様御隠居、
(齊興) 若殿様御家督ノ御願書、当六月中被

差出、御内定ノ段申来候間、御手当相掛候儀ハ勿論御
省略中ニ付 公辺御勤向ノ外御内輪ノ儀ハ可成文作略
被仰付候旨ヲモ申来候間、右之趣ヲ以取調申出候様、
内々御役人限可申聞置候、

六二二八

一 去年四月十四日講堂へ御入可被遊旨、同月九日樺山主
祝カ、久言 祝名前ヲ以被仰渡置候へトモ、主祝名前消除、典膳殿
御差図ニ相直候様被仰渡候、

一 去年 御参勤ノ儀、六月中被遊 御参府候様被仰渡置
候へトモ、御持病ノ御積氣、其上御頭痛被為在、時々
御不同有之、御当分ノ御様子ニ付テハ、右御時節迄ニ
ハ難被遊 御参府旨、御届被仰上等候段、去四月廿日
樺山主祝名前ヲ以被仰渡置候へトモ、前又同断御名前
相直候様被仰渡候、

一 樺山主祝・秩父太郎勤役中御家老衆連名ヲ以被仰渡候
御書付ノ内、右両人名前相見得候分ハ両人名前消除候
様被仰渡候、

右之通被仰渡候間、向々帳留等右様可被取計候、此段

致通達候、以上、

五月十三日

大山宗之丞

六二二九

(卷之八 三九五)

(朱書)五月 信濃
一 当巳年朝鮮信使对州迄来聘候処、被对外國御大札候得

八万石以上高役金並御領・私領惣国役可差出旨被 仰

出、去辰年ヨリ来ル申年迄五ヶ年ニ割合可相納旨、從

公儀被仰渡、右高役金ノ儀、一万石ニ付金七拾兩宛ノ

積ヲ以、一ヶ年一万石ニ付金十五兩ツ、ノ割合ヲ以相

納、国役金ノ儀ハ村高百石ニ付金一兩ツ、同断、五ヶ

年割合御上納可被成旨被仰渡候、右付御願立ノ趣有之

候処、諸国一般ノ事候間、高役・国役免除ニハ難相成

琉球国十二万石ノ儀モ高役ハ相納、国役ハ被差出不及

旨被仰渡候、然処去ル寅年居屋敷類焼、琉球人參府付

去辰年ヨリ来ル申年迄年延、翌未年ヨリ五ヶ年ニ割合御

上納候様被仰渡候旨、江戸ヨリ申来候、

六二三〇

(卷之四九 三七九四の1)

(朱書)五月 信濃殿ヨリ被相渡候御書付ノ写
一 樺山・秩父勤役中取扱ノ儀ハ何モ御取用ニ不相成候付、

諸向帳留等モ都テ焼捨申渡置候処、別冊並別紙之通得

差図候向モ有之、夫々々条書ニ付紙ヲ以申渡通二候、

右ニ付テハ不得差図向モ此節申渡通相心得、諸事同様

可取計旨可致通達事、

六二三一

(朱書)五月 將監

一 去月廿八日 若殿様御結納御婚姻首尾能被為濟候段御

到来候、

六二三二

(朱書)同 同

一 若殿様御婚姻被為整候為御祝儀、御一門方以下諸士迄

モ進上物被仰付答候処、当時格別ノ御省略中ニ付不及

進上物、御祝儀迄申上候様被仰付候旨申来候、

六二三三

(朱書)同 將監・信濃

(卷之二八 一七三二)

一 御縁女様御事、御婚姻当日ヨリ 若御前様ト奉称、御

順ノ儀ハ (齊直室) 御前様御次被 仰出候、

六二三四

一先月十五日(朱書)六月 登 若殿様御婚姻ノ御礼被仰付候間、為御

名代御一類中様御登 城被成候様、御老中様御連名ノ御奉書御到来、御名代九鬼和泉守様御登 城、御礼

被仰上、公方様(家考)・大納言様(家慶)・御台様(家齊室、茂能)へ御献上物無御滞被為濟候段御到来候、

六二三五

(卷之二八 一七五五)

一瑠林院殿、此御方ニテハ是迄殿文字相用被来候へトモ(重書)六月 信濃 重書兼味、島津久柄室

御隠居様思召ヲ以、此節ヨリ様文字相用、諸書付等モ(重書)

右ニ準相認、御順ノ儀ハ(齊草女) 随姫様御次ニテ、御座席ノ

儀ハ其節ノ御都合次第可被為在候、

右之通被 仰出候段申来候、

六二三六

(朱書)同 同

一右、島津(忠實、重書)若狭殿養子被 仰出置候処 思召有之、御取

返被成候旨被 仰出候、

(齊皇男) 武五郎殿

六二三七

一太守様御隠居、(齊皇) 若殿様御家督ノ御願書、先月十三日

御用番松平伊豆守様へ被差出置候処、同十六日御老中

様御連名ノ御奉書御到来、翌十七日 太守様御名代有

馬肥前守様(總) 若殿様御登城、於御白書院御縁頼御老中

様御列席ノ上、御用番右御同人様ヨリ 太守様 御隠

居、若殿様御家督御願之通被 仰出候段御到来候、

此段奉承知、御三殿様へ御祝儀可申上候、

六二三八

(卷之五七 四四五二)

一对御道具(朱書)同 同 熊毛投鞘

一御長刀(兼力) 巢袋黒羅紗

一御手道具(毛) 白鳥植毛

御隠居様為御持御道具、右之通被仰出候段申来候、

六二三九

(卷之二八 一七八三)

一此節(朱書)同 同 御隠居 御家督ニ付、太守様御儀 御隠居様、

若殿様御事 太守様(齊皇)、高輪御隠居様御事ハ 大御隠居(重書)

様卜奉称候、左候テ、御内輪ニテハ 太守様 大御隠

居様 御隠居様 大御前様 御前様ト 御名順被仰出候段申来候、

六二四〇

(卷之二六 一六三六)

〔朱書〕同 一此節 御隠居 御家督御願之通被 仰出候付、 御隠

居様御儀、 修理大夫様ト御改名被遊度段、 従 太守

様御伺書御用番様へ被差出置候処、 御伺之通被仰渡候

段御到来候、

六二四一

(卷之一六 九五四)

〔朱書〕同 一当时御省略中付、 御隠居様御方御高二万石所務代金

ノ内、 二千両宛 思召ヲ以御年限中表方へ被差出候、

一 大御前様御方ノ儀モ 御隠居様御方ヨリ御引受ニテ、

右同断御年限中 思召ヲ以御渡方二千五百両ツ、 都テ

表方へ被差出候、

右之通、 御隠居様被 仰出、 太守様ヨリモ 思召ニ

被応候段申来候、

六二四二

〔朱書〕同 一今度 御家督ニ付何レモ是迄之通相勤、 猶又入念候様

被 仰出候条、 難有可奉承知候、

〔行間朱書〕 御本文二付、 五日中大目付以上へ為御礼致廻勤候様、

御供目付ヨリ廻達有之候事、 全文略ス、

六二四三

(卷之四 一三三八の2)

〔朱書〕七月 將監・宿衛・登 一御隠居御付外八都テ是迄之通 御家督様御方へ相勤候

様被 仰出候条、 難有可奉承知候、

六二四四

〔朱書〕同 一此節 御隠居 御家督付、 御政事向等何篇 大御隠居

様御介助ノ儀、 猶又御願被仰進候趣有之候処、 其通被

遊 御承知候、 此旨奉承知候様向々へ可致通達候、

六二四五

〔朱書〕七月 登 一御隠居御付外八都テ是迄之通ニテ、 御隠居御方兼相

勤候様被 仰出候条、 難有可奉承知候、

六二四六

(朱書)七月廿四日 將監

一松平越前守様御隠居左兵衛督様、先月廿二日被成御卒

去候、右付 御隠居様御叔父ノ御統ニテ、左兵衛督様

越前家御養子被為成候付、半減ノ御忌服被為請候旨申

来候、

六二四七

(朱書)七月登

一御隠居御方御高二万石

右御高ノ所務ニ応候金高、高輪御同様可被差上旨被

仰出候段申来候、

(卷之一六 九四九)

六二四八

(朱書)七月毎日 將監

一今度御隠居 御家督ニ付テハ御大礼ノ儀ニハ候ヘトモ、

当時格別ノ御取縮付、御一門方始其外都テ進上物不被

仰付旨申来候、右通故御一門方並島津左衛門一列ヨリ

江戸へ家来使被差上ニ不及、御家老以下諸士迄ノ相中

使モ差上候ニ不及候条、右御祝儀ハ明朝日中急便被申

上候様、向々へ可致通達候、

六二四九

(朱書)七月廿九日 將監

一去ル九日御隠居・御家督ノ御礼可被仰上旨、御老中様

御連名ノ御奉書前日御到来、太守様 御登城、御

隠居様御名代有馬肥前守様 御登城、御黒書院へ

公方様 出門、御礼被仰上、太守様御懇ノ被為蒙上

意、御引次御名代肥前守様御礼被仰上候段御到来候、

六二五〇

(朱書)八月同

一奥向御役人

右ハ、此節 御隠居・御家督付、御隠居御付外、

太守様御方へ打込勤被仰付候面々ハ是迄ノ御付無差別、

年功ヲ以致席順候様被仰付候、

六二五一

(朱書)同

一此節就 御隠居・御家督、諸御役人・小役人其外勤方

付誓詞被仰付候面々ハ都テ改誓詞被仰付候、

(卷之四六 三四五五)

六二五二

(朱書)同

一毎月 四日 十三日但、正月 廿五日

(卷之三六 二四五六)

右之通、以来 御前御用日被定置候旨被仰出候段申来候、

六二五三

(朱書)同

一 範之進殿御事、御病氣被成御座候処、御養生無御叶、

昨晚被成御天亡候、

六二五四

(朱書)同

一 範之進殿御法名 瑤桂院殿滴露幻素大禪童子

六二五五

(朱書)八月十五日 同

一 於幹殿御法名 香雲院殿華質幻舜大禪童子

六二五六

(朱書)八月廿七日 同

一 先月廿五日 以上使小出助四郎殿、御鷹ノ雲雀 太守様御家督初テ 御拝領、 御隠居様ニモ御隠居初テ御

同様 御拝領被遊候旨御到来候、

六二五七

(朱書)九月 安房 十一月 安房

一 重陽御規式ノ儀、当時格外ノ御省略中故、御引取被仰付候、

六二五八(の1)

(朱書)九月十六日 同

一 島津飛驒殿死去ニ付、 大御隠居様御忌三日・御服七

日御掛被遊候、

(六二五八の2)

(行間朱書)同

一 島津飛驒殿事、 大御隠居様御従弟違ノ御統ニ被為成候、然処飛彈殿儀、先年加治木家相続後、御従弟ノ御

取扱為被 仰出置事ニハ候ヘトモ、前文通ノ御統故、

御忌服ハ不被遊 御受段被 仰出候旨申来候、

六二五九

(朱書)九月十九日 同

一 此節 有邦院様五十年御回忌御法事、明廿日迄御執行被為濟候、

六二六〇

(朱書)九月 同

一 操姫様御事、去ル二日本多(康徳)下総守様へ御婚姻被為整候

段御到来候、

六二六一

(朱書)九月 安房

松平飛驒守様

御嫡子
松平孝之進様

一 右八、松平因幡守様御方御縁与被為在、無御扱御統柄

付、御家内様共以來此御方御惣方様へ御両敬ノ御取交

被成度被 仰進趣有之、被懸其意候、

一 飛驒守様御精進日

六日 九日 十二日 廿一日 廿三日

右之通申来候、

六二六二

(朱書)十月 信濃

一 武五郎殿御事、先達テ島津若狭殿養子御取返被仰出候

へトモ、万事是迄ノ通ニテ表向ハ先殿文字相用候様被

出候、

六二六三

(朱書)十月 安房

一 正月十三日 頼朝公御正忌日二付、是迄之通朝夕御精

進日二被立置候、

毎月御忌日朝夕 御精進、

一 得仏様

淨国院様

慈徳院様

有邦院様

円徳院様

淨岸院様

芳蓮院様

慈照院様

正覚院様

御正忌日 御精進、

一 貞嶽院様

靈龍院様

瑞仙院様

智光院様

玉貌院様

慈光院様

妙心院様

嶺松院様

右之通被定置候条、此旨可承向々へ可申渡候、

六二六四

(朱書)同 同

一 幻住院殿

光容院様

宝池院様

瑞光院様

右御四靈様、

(奇異) 太守様御兄弟様ノ御事故、御正忌日計

御精進日被定置候、

七月三日 月桂院様

七月廿六日 照雲院様

六月十三日 翠黛院様

五月三日 蓮心院様

七月廿六日 芙蓉院様

三月廿三日 青林院様

(卷之二五 一四四八)

(卷之二五 一四四八)

七月廿九日 四月十一日 七月五日
香樹院様 義光院様 麗珠院様
三月七日 七月廿日 三月三日
天苗院様 蓬窓院様 宝台院様

右御十二靈様、以来御精進日被為除候、

右之通、表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可相達候、

六二六五

(朱書)十月廿四日(將監)

一 瑠林院様御卒去、

(重妻) 大御隠居様御忌日御服三十日被遊

御請候、

六二六六

(朱書)十一月安房

一 先月十五日 太守様御登城、

(齊宣女) 操姫様御婚姻之御礼

被仰上、 公方様 (家齊) 大納言様 (家慶) 御台様へ御献上物無御

滞被為濟候段申来候、

六二六七

(朱書)十一月廿八日(同)

一 御隠居 御家督初テ重陽之御内書、先月廿一日 太守

様 (齊意) 御隠居様被遊御頂戴候段御到来候、

六二六八

(朱書)同(同)

一 去年於高輪大奥御誕生ノ 御女子様、御名富姫様ト奉

称候、最早御丈夫被為成候付、此節御弘有之候、

六二六九

(齊宣女、於幹) 一 香雲院殿

右御正忌日、御精進日被相立候、

十二月

(島津入輪) 安房

六二七〇

一 瑠林院様御法名 瑠林院殿廉誉馨宝惠恭大姉

右之通被仰渡候旨、此節申来候、

十二月

安房

六二七一

一 去年十月六日於高輪大奥御誕生ノ御女子様、御名 富

姫様ト奉称、御順ノ儀ハ雅姫様御次候条此旨奉承知、

富之字並同唱迄モ名付居候人ハ可致遠慮候、

十一月

安房

六二七二

(卷之二五 一四七七)

(朱書)文化七年正月

一大中様 貫明様 松齡様 慈眼院様

右 御四靈様御年回御法事ノ儀、御物又ハ寺役御法事

御執行日数、御不同有之候へトモ、以来右 御四靈様

御年回被為当候節、日数三日寺役御法事被仰付、御香

奠銀五枚御家老 御代参ヲ以御寺納被遊筈候、尤、右

御四靈様外ニモ此已後格別ノ御功又ハ御德被為在候

御方様ハ 御六代以上ニ御世代被為遷候節、寺役御法

事ノ内ニテ、右 御四靈様御同様御執行有之筈候、且

五廟様御法事ノ儀ハ是迄ノ通御物御執行被仰付候、

右之通被仰付候条、此旨寺社奉行へ申渡、可承向々へ

モ可申渡候、

六二七三

(朱書)正月十三日 安房

一大納言様御婚禮被為濟候付テ、旧臘四日從 大納言様

上使松平 壱岐守様、從 御簾中様御使 荻野金十郎殿ヲ

以一種一荷ツ、御三殿様被遊御拜領候旨御到来候、

六二七四

(朱書)同 信濃

一 太守様御儀、旧臘十六日 御城へ被為 召、少将御仕

官被仰出候旨御到来候、

六二七五

(朱書)同 安房

一 虎千代様御事、紀州様御躰養子被仰出候旨、旧臘十

一日御用番青山下野守様ヨリ被仰渡候段申来候、

六二七六

(朱書)同 同 一 御簾中様へ 白銀拾枚 太守様ヨリ

右之通、向後 御参勤之節、御献上被遊候様御留守居

御呼出ニテ、御掛御老中松平伊豆守様ヨリ被仰渡候段

申来候、

六二七七

(朱書)同 同

(卷之四七 三六四〇)

一 今度 少将御任官被 仰出候付テハ、御一門方ヲ初諸

士迄使者並惣代被差越進上物等有之事候へトモ、当時

格別御省略中付、此節ハ都テ其儀ニ不及筋被仰付候段

申来候、

六二七八

(朱書)同

一安姫様御事、岸姫君様卜御名御改被成候旨從(家齊志) 公義

被仰渡候段申来候、依之右唱ノ名付居候者ハ可致遠慮候、

六二七九

(朱書)同廿六日

一旧臘廿八日 太守様御任官ノ御礼被仰上候段御到来候、

六二八〇

(朱書)正月 信濃

一御在府ノ節、於御書院重陽ニ付御規式上リ候儀、以来

モ御省略御年限中ニ付、御引取被仰付候条、可承向ヘ可申渡候、

六二八一

(朱書)二月 安房

一諸向交代書役・小役人等ノ内、江戸表御用差支ノ趣ヲ

以中急等ノ儀、向々頭人ヨリ申出事候ヘトモ、格外ノ御時節柄故、以来不時ノ儀ニ付急ノ不差越候テ不叶節

ハ於江戸頭人ヨリ得差図、吟味次第爰元へ問合申来筈

候間、向後其通無之者ハ容易ニ被仰付間敷候条、交代ノ時節不及延引様前以ヨリ頭人氣ヲ付出立可申出旨、

去ル酉年申渡ニ相成居候処、到頃日間ニハ取扱不行届向モ有之、當時猶又格別御取縮ノ砌ニ候間、以来右申渡通於江戸不申出者ハ容易ニ中急等被仰付間敷候条、

此旨可承向ヘ可申渡候、

但、式日飛脚ノ場人柄見合ヲ以中急差立候儀ハ当分通、時々吟味次第ノ事候、

六二八二

(朱書)二月 安房

一芳蓮院様御正忌日御仕置者相除、其外無御構、月次御

忌日ハ都テ無御構旨被究置候ヘトモ、今度 御家督ニ付毎月御忌日御精進日被相立候付テハ、以来御忌日御

咎目者其外申渡事等外 御靈々様、右御同様御精進日被立置候通被仰付候、

十二月廿一日
一覺了院様
七月十一日
一深達院様

右御正忌日、御隠居様御部屋柄内御朝夕御精進被定(齊直)

置、御家督之節ヨリ表向御精進被立置候処、此節

御隠居 御家督ニ付テハ、太守様御事ハ御統モ被為

替候付、表向御精進日不被相立、御隠居様御事ハ御

部屋柄内ノ通被定置候、

六二八三

(朱書)同

一寛二郎様御事、御上気御強御座候付、為御養生御国元

へ御越、一往御逗留ニテ御入湯被遊度御用番様へ御伺

書被差出候処、御伺之通被仰渡候旨申来候、

六二八四

(朱書)三月 相馬

一五社へ 御着城脇並正月朔日 御参詣

御留守年正月朔日 御名代 御一門方

護摩所 同 同

一稻荷 八幡 天神 同 福ヶ迫 不動 諏訪 靈府堂

表御看経所へ 御着城並正月十五日ヨリ内一度 御参

詣 御留守中正月十五日ヨリ内一度 御代参 若年寄

正月朔日御在府 御在国共 御代参 御側御用人

一花尾山 郡山 一之宮

遠方故 兩御在国二一度 御参詣

御参詣無之 御在国年一度 御名代 御一門方

御祭礼 年始 御年忌ノ節 御代参御家老

右之通、太守様 (齊奥) 御参詣 御代参被等被仰付候条、

可承向々へ可申渡候、

六二八五

(朱書)同

一江口表

芝 一神明宮 御庭之 一諸堂社 年頭一度 御参詣

福ヶ迫 御国許

一諏訪社

御庭之 一諸堂社 年頭一度 御参詣

是迄年頭其外式々 御代参有之来候 一諸神社 年頭一度 御代参 御側御用人

但、御祭日計 御代参有之分ハ其通可有之候、尤、

福ヶ迫諏訪・芝神明宮へハ御祭日 御誕生日等ノ

御代参ハ有来通、

右之通、御隠居様 (齊直) 御参詣 御代参被仰付候条、可

承向々へ可申渡候、

六二八六

(朱書「同」)

一得仏様

淨国院様

有邦院様

淨岸院様

慈徳院様

円徳院様

慈照院様

正覚院様

右ハ、御隠居様御事、

御下向被為在候へトモ、以

来右 御靈々様へ御発賀前

御着城 御参府脇御家者

御代参、右ノ節 御惣霊様へモ御代拜被仰付筈候、

六二八七

(朱書「同廿七日 信濃」)

一太守様、少将

御任官付、口 宣 宣旨御頂戴ノ御使

京都へ被差越、御官物御納無御滞口 宣 宣旨相渡、

先月十九日被遊御頂戴候段申来候、

六二八八

(朱書「四月廿七日 安房」)

一寛二郎様御事、

今日鳥津若狭殿養子被仰出候、

六二八九

(朱書「四月 同」)

一寛二郎様御事、此節鳥津若狭殿養子被仰出候付テハ此

以来御同列方御同様諸書付其外何篇殿文字ノ筈候、此

旨諸向為心得可申聞置候、

(卷之二八 一七五九)

六二九〇

(朱書「同 同」)

一寛二郎様御儀、鳥津若狭殿養子被 仰出候付、明後廿

九日九時御引越ノ筈候、其節北御門外ニテ御乘輿、行

列供廻等若狭殿方ヨリ可差越候、此旨内用頼・御用人

へ申渡、可承向へモ可申渡候、

(卷之三七 二六八二)

六二九一

(朱書「四月廿七日 同」)

一寛二郎様御事、今日鳥津若狭殿養子被仰出候付、御三

殿様へ御祝儀、

六二九二

(朱書「六月 同」)

一此節被遊 御頂戴候口 宣 宣旨女房奉書辛領被仰付、

一昨晦日出水到着ノ段申越候付、明後四日昼時御当地

へ致着、直ニ御本門罷通、荷物ノ儀ハ虎ノ門雁木ヨリ

詰居ノ中小姓へ可引渡候、御座へ可差通候御手当ノ儀ハ別段申渡候、

六二九三

(朱書)六月三日 同

一 太守様、少将御任官付、口宣 宣旨女房奉書、明日昼時御到来ノ筈候、依之御手当左之通、

御本丸へ御到来ノ節 御本丸相開、虎ノ間雁木ヨリ詰居ノ中小姓受取、虎之間へ相備、御用人・御目付相詰、

御記録奉行致取引荷作等解調、内箱御記録奉行水仙ノ間へ可相備候、左候テ、内箱切封御家老座書役致同封、

御家老中拝見相濟候上御記録奉行罷出、本之通入付持下、

但、着服麻袴、

六二九四

(朱書)六月 同

一 島津安芸殿

右御名代島津玄蕃殿ニテ、来年就 御初入部為御迎出府有之候様被仰付候、

(卷之二八 一六八〇)

六二九五

(朱書)七月 將監

一金八千六百六十八兩

右ハ、御隠居様御方御高二万石ノ所務ニ応候金高、

高輪御同様可差上旨、先達テ被 仰出置候へトモ、右

御高差分ニ不及、本行之通 大御隠居様御方同様ノ仕

向ヲ以年々差上候様被 仰出候段申来候、

六二九六

(朱書)同 同

一二月十五日 十九日 廿一日

右、御国許御発駕御定日

一四月廿一日 廿二日 廿五日

右、江戸御発駕御定日

右、御参勤・御下国付、毎年御国元江戸御発駕御日

限、以来右之通御定日ニ被仰付置候間、以上三日定ノ

御掛日、前年 御通行ノ節宿々へ相達、無相違様引結

可致首尾旨被 仰出候段申来候、

六二九七

(六二九六号行開朱書)

一二月六日 九日 十五日

(卷之三 四 一三三三)

(卷之三 四 一三三三〇)

右、御国許 御発駕御定日、先達テ申渡置候処、御差支ノ儀有之、右之通被相替候段申来候、

但、御掛日等ノ儀ハ先達申渡置通二候、

九月

右近

六二九八

(朱書)八月 安房
一川辺 出水

右、此節ヨリ御鷹場被相建候条、向々へ可申渡候、

但、出水ノ儀ハ先年ノ通方限ヲ以被相建候、

六二九九

(朱書)九月 同
一重陽御規式ノ儀、御省略御年限中且御留守年ニモ候故、

御引取被仰付候旨、去年九月申渡置候、以来共 御在

府年ノ上リ物御引取被仰付候、

六三〇〇

(朱書)十月 安房
一今度就 御隠居・御家督改誓詞被仰付候段ハ先達申渡

置候、依之 御先代勤方被仰付、未誓詞不相濟面々ハ

御先代ノ誓詞前書迄読聞セ、改誓詞ノ儀ハ血判迄モ被

(卷之四六 三四五三)

仰付咎候条、其通取扱可致旨向々へ可致通達候、

六三〇一

(朱書)十一月 将監

一佐竹右京大夫様御母堂貞明院様御卒去付、

(齊興)
太守様御

母方御祖母ノ御続ニテ、御忌二十日・御服九十日被遊

御請候段申来候、

六三〇二

(朱書)同 安房
一来年就 御初入部惣御供ノ節ハ物頭御先乗仕候様御行

列帳ニテ申渡置候得共、御発賀(駕方)・御着城ノ節計 御

先乗有之、其外ハ惣御供ノ節連モ 御先ニ不及旨被仰

付候、

一具足箱棹屋形ノ儀、御行列乗外ハ直触以上ノ御役限為

持可申、其外ハ棹屋形可致無用旨、去ル午年申渡有之

候へトモ、以来ハ直触以下御行列乗連モ無棹ニテ具足

箱為持候様被仰付候、

右之通、江戸ヨリ申来候条、此旨可承向々へ可申渡候、

六三〇三

(朱書)十一月廿四日 御家老降印
一此度東海道大磯・袋井兩宿困窮二付、人馬賃錢割増左

之通可請取旨申渡、

已正月ヨリ寅十二月迄拾ヶ年ノ内人馬賃錢二割増申

付置候処、猶又当午十月ヨリ来亥九月迄中五ヶ年ノ

間三割増、

東海道

大磯宿

袋井宿

右二ヶ宿割増錢申渡候間可被得其意候、

右之趣、向々へ可被相觸候、

午十月

別紙之通從 公義被仰渡候条、此旨与中・支配中諸郷

へ不洩様可被申渡者也、

六三〇四

(朱書)十一月 將監
一去年於高輪大奥御誕生ノ御女子様、御名 寿姫様卜奉

称候、最早御丈夫二被為成候付、此節御弘有之候、

六三〇五

(朱書)同廿七日
一去年十一月廿一日於高輪大奥御誕生之 御女子様、御

名 寿姫様卜奉称、御順ノ儀ハ富姫様御次候条、此旨

奉承知、寿之字並同唱迄モ名付居候人ハ可致遠慮候、

六三〇六

(朱書)十二月 右近

一来未年 御留守詰被仰付候面々、御供代ノ分ハ 御発

賀前致出府候様、向々へ可申渡候、

六三〇七

(朱書)文化八年辛未正月七日 安房

一鳥津登一昨夜病死二付、大御隠居様御忌五日・御服

十五日御掛被遊候、

一右同断二付、鳥津淡路守殿御事モ御忌掛二候、

六三〇八

(朱書)正月 右近

一寛二郎殿御事、鳥津若狭殿養子被 仰出候段ハ先達テ

申渡置通候、依之去年十一月廿一日御用番牧野備前守

様へ御届書被差出候処、被成御落手候旨申来候、

六三〇九

(朱書)三月 將監
一富姫様御事、御病氣被成御座候處、御養生不被為叶、

先月八日御天亡被成候段御到来候、

六三一〇

(朱書)同
一富姫様御法名 麗岱院殿紅露雪顔大禪童女

六三一

(朱書)同二月 安房・信濃
一大目付以上 日勤乗物ニテ手鍮立サセ登 城有之来候

ヘトモ、御儉約中ニ付乗物台輪・駕籠勝手次第被仰付

置、当時日勤台輪・駕籠ニテ手鍮伏セサセ出勤有之候

ヘトモ、乗物ノ場御儉約ニ付右通ニテ、殊ニ屹ト出勤

ノ事候間、手鍮立サセ致出勤、外々ヘ屹ト相越候節モ

日勤同様可有之旨被 仰出候付、途中式対ノ儀ハ先年

申渡有之節ノ通可被相心得候、且シノヒ又ハ見廻先ノ

向ニヨリ屹ト立節ハ其節ノ時宜次第手鍮伏サセ候間、

其折ハ式対ニ不及候条、此旨向々ヘ不洩様可申渡候、

六三一一

(朱書)三月 安房
一御内証様御妹石野宰相様奥方様御事、先月十日被成御

卒去候付、御隠居様 御内証様御忌服被遊御請候段

申来候、

六三一二

(朱書)同
一島津安芸殿

右ハ、先月廿一日於御座々間御直ニ当年就御入部為御

迎出府有之候付、御下国御供被仰付候段申来候、

六三一四

(朱書)四月 同
一干鯛一箱ツ、 御在国 御在府共 御三殿様ヘ

右、年頭為祝儀表向進上、

一御肴代百疋ツ、 (齊直雜室) 大御前様 (齊興室) 御前様 御内証様ヘ

右同断、

暑中
一素麴・西瓜一種

寒中
一御肴一折 御隠居様ヘ

右、暑寒為伺御機嫌御内々進上、

但、御在国ノ節計、御在府ノ節ハ伺御機嫌一通、

一御肴一折 御在国 御在府共 御同人様へ

右、御生身魂為御祝儀表向進上、

一御肴一折 御在国 御在府共 御同人様へ

右、御誕生日付表向進上、

一御肴一折 御同人様へ

右、端午ノ為祝儀表向進上、
上巳・端午・七夕・八朔・重陽

一祝詞一通 御三殿様へ

右ノ節々、御内々ヨリ御祝詞、

但、 御在国ノ節計、

暑寒 一伺御機嫌一通 御在国 御在府共 御三殿様 大御

前様 御前様 御内証様へ

右之節々、御内々ヨリ伺御機嫌、

一御祝詞一通 御三殿様へ

右之節々、御内々ヨリ御祝詞、

但、 御在国ノ節計、

一千鯛一箱ツ、 御在国 御在府共 御三殿様へ

一御祝詞一通 大御前様 御前様 御内証様へ
(齊直繼室) (齊直室) (重豪御室、齊直美母)

右、歳暮ノ為御祝儀表向進上又ハ御祝詞、

一伺御機嫌一通 御隱居様へ
(齊直)

右、初雪ノ節御内々ヨリ伺御機嫌、

右ハ、寛二郎殿年中進上物等ノ儀、若狭殿内用頼・御
(齊直男、忠念) (島津忠實、重臣)

用人ヨリ得差図候趣有之、元服相濟迄之間、右之通進

上被仰付候、尤、臨時御祝儀事等ノ儀ハ時々可被相同

旨内用頼・御用人へ申渡、可承向へモ可申渡候、

但、当時御儉約年限中故、年頭迄進上物被仰付候、

六三一五

一朱書(五月、将監) 麗俗院様
一正月八日御正忌日

右御正忌日迄、御精進日被相立候、

六三一六

一朱書(同十七日、将監、安房) 太守様初テ御国元
一先月十五日以 上使松平伊豆守様 (曾明) (齊奥)

へノ御暇御給、銀百枚・巻物三十御拝領、從 大納言
(乘保)

様モ以 上使松平能登守様巻物二十被遊御拝領、同十

九日御登 城、御礼被 仰上候処、御懇ノ被為蒙 上

意、御腰物御馬被遊御拝領候旨御到来候、

六三二七

一 御領国ノ儀ハ、不依大少身御譜代旧臣ノ事候ヘハ從

御先代様被定置候御制禁ノ趣致連統、聊モ無緩疎堅可

相守ノ処、如何心得違候哉、此已前ニハ実学ト唱、党

ヲ結ヒ其後モ右類ノ儀有之、又々近頃ニハ亡權山主稅(入言)・

亡秩父太郎(季保)与党ヲ催シ致夜会等類ヲ求、御政道ノ妨

ニ相成、御国中一統及混雜、既 公辺ヘモ内々ハ相聞(前)

候故、彼是 御賢意ヲ以御取計被 仰付候付、不及意

儀ニ(ハカ)□候、就中毎朔ノ御条目ニモ不依何色党ヲ結ヒ類

ヲ引或最眞致連判、其所ノ妨ニ相成候程ノ事ヲ相企候

者ハ可被行嚴科旨為被裁御事候、剩余国ヘ相聞、御外

聞ニ可相掛トノ無弁モ、御譜代ノ御厚恩ヲモ忘候仕形、

誠以不忠ノ至候条、右之者共ハ夫々相当ノ御取扱被仰

付候、尤、大少身共年若ノ面々、学文武芸稽古付テハ

致集会、互ニ文武忠孝ノ道ヲ相励、成長ニ随ヒ 御国

家ノ御用相立候様ニトノ厚 思召ヲ以、先年造士館・

演武館ヲモ御創立有之、猶又夜行辻立風俗等ノ儀共、

先年以來度々為被 仰出御事候処、布テハ右通夜会等

致シ党ヲ結ヒ候類ノ儀共相企、御仕置ノ妨ニ相成、別

テ如何ノ至被 思召迄(上カ)、去ル巳年夜会等ノ儀共細々被

仰出置候、猶又向後右式党ヲ結ヒ候類ノ儀共相企候者

ハ明白札方ノ上(旧記雜に上り補)、没収所帶、家名可被召禿、其外身近

親類共迄茂評儀之上△大形ノ依輕重御咎目可被仰付候

条、兼テ存其旨万一右様ノ取違有之者モ候ハ、夫々身

近者共ヨリ氣ヲ付可加異見候、此旨屹ト可申渡旨、

大御隠居様被 仰出候、

三月

六三一八

御領国中ノ輩学文武芸ヲ可相嗜、且風俗等ノ儀付テモ度々

被仰渡事候条弥以致忘布間敷候、此節猶又 大御隠居様

御配慮被為 在別紙之通分テ委敷被 仰出候、御趣意汲

受人々懸心頭屹ト可相守候、此旨申渡候様被 仰出候、

四月

六三一九

一 松平豊後守今般御暇被下、初テ被在邑候付テハ未年若

ノ儀ニモ有之候条、政事向是迄ノ通不崩様被入念、万

端一己ノ存寄無之様有之度事ニ候、其許ヨリモ能々示談有之、可然儀、卜何レモ申合候事ニ候、

今般御暇御給、初テ 御下国ニ付、御老中様方被仰合、御政事向ノ儀共御別紙之通御用番土井大煩頭様ヨリ有(宋休頭カ、利厚)

馬左兵衛佐様ヲ以被 仰達、御三股様被遊御承知、從

御先代様御例モ無之、誠ニ御親數御事共、別テ御大幸

ノ御儀被思召上候、依之未御年若ノ御事ニモ候ヘハ御家老・若年寄・大目付御政事向一涯入念、朝暮掛心頭、

從前々被定置候御規定事等無緩疎可致沙汰候、就中党

ヲ結乱風俗、御政道ノ妨ニモ相成候儀共、万一モ致到

来候テハ対 公辺屹卜御申訳モ不被為在御事候条、御

國中靜謐ノ儀ヲ專可心掛候、當時御介助中ナカラ、猶

又今度 御発賀(駕カ)ニ付テモ御政事向ノ儀、從 太守様分

テ御頼被 仰進、甚以御心配被遊、先達テ以来追々被

仰出置候上ナカラ、此節從 公辺御承知被遊候御旨趣

モ有之、分テ被 仰出御事候間、御趣意ノ程厚奉泣請、

聊モ決テ不致忘布、屹卜相守候様御役人限得卜可申聞

旨、(重孝) 大御隠居様被 仰出候、

四月

六三二〇

今度初テ就 御下国、御用番様ヨリ仰達ノ趣御承知被遊、

從 大御隠居様モ細々被 仰出候、此上万一異変ノ儀モ致到来候テハ決テ不相成事候条、急度可相守旨被 仰出候、

四月

六三二一

(宋書〔六月晦日、安房・信濃〕)

一御内証様、御病氣御養生不被為叶、去ル十四日被成御

卒去候段御到来候、

一本文御忌日十三日被相定候、以後被仰渡(空古)□ヲ可見合事、

午刻、

六三二二

(宋書〔六月、安房〕) 一御内証様御卒去ニ付御忌服左之通、

(音奥) 太守様

一御忌十五日 一御服七拾五日

右、御父方御祖母様ニテ、御忌三十日・御服百五十日

被遊御請答候ヘトモ、 御隠居様御儀、 慈照院様御(重孝)

養子被為成候付、右之通半減ノ御忌服被遊御請筈候処、
日數相過候付一日御遠慮、

大御隠居様

一御遠慮三日

〔弄意〕
御隠居様

一御忌五十日 一御服十三ヶ月

〔弄意〕
操姫様 随姫様

一御忌十五日 一御服七十五日

右之通、御忌服被遊御請候条、此旨向々へ可致通達候、

六三三三

〔朱書〕七月九日 御家老座
一御内証様御法名 春光院殿心月清涼大姉

右之通奉称候間、承知仕候様支配中へ可被申渡者也、

六三二四

〔朱書〕七月 安房
一御隠居様へ当八朔進上物、御忌中ニ付来月十五日差上

候様被仰付候、

六三二五

〔朱書〕九月 奥廳
一大御隠居様御事、御持病ノ御疝積、其上御脚痛被遊御

座候付、摂州有馬温泉へ為御湯治被遊 御光越度、御

暇ノ御願被仰上趣有之候処、御願之通被仰出候段御到

来候、

六三二六

〔朱書〕同 同
一江戸上下ノ面々、人馬届ノ儀ハ先達テ委細申渡置候通

ニテ、中急又ハ急飛脚等ニテ被差越候面々へモ同断、

東海道・木曾路共二間屋へ相掛、臨時人馬相雇候ハ、

致書留置、何方於駅人馬何程相雇候訳、江戸並於大坂

其届可申出候、

一東海道・伊勢路・美濃並木曾路通行ノ面々、着出立ノ

節、御当地又ハ於大坂モ何方通行ノ駅入用人馬何程、

且又於道中臨時相雇候儀モ有之候ハ、其段可申出旨細々

申渡ノ趣モ有之候へトモ、間ニハ届不申出者モ有之哉

ニ相見得候付、屹ト無間違様可申出候、左候テ、右届

書ノ儀ハ御用人ヨリ御留守居へ可相渡候付、御留守居

ヨリ致裏書物奉行へ差遣、右書付見届候上道中御賄料

等可相渡候、

右之通、於江戸申渡候段申来候、

六三二七

(朱書)十月十三日 將監

一大御隠居様御事、有馬温泉へ為御湯治、先月十五日江

戸被遊 御発賀候段御到来候、

六三二八

(朱書)十月十七日 安房

一御家督初テ就 御帰国、為 御尋以宿次御奉書御肴御

拝領、明後十九日御到来、被遊 御頂戴筈候、

(卷之二六 一六四二)

六三二九

(朱書)十月 同

一鳥津省之進殿元服ニ付進上物左之通、

(重寢) 大御隠居様 (齊意) 御隠居様

一御太刀・馬代銀三十兩ツ、

一三種三荷ツ、 省之進殿ヨリ

(齊興) 太守様 大御隠居様 御隠居様

一御太刀・馬代銀三十兩ツ、 (久照 加治木) 兵庫殿ヨリ

右之通被仰付候、

六三三〇

(朱書)十月 安房

一鳥津省之進殿元服ニ付進上物左之通、

(齊真繼室) 大御前様 (齊興室) 御前様

一干鯛一箱ツ、

一御樽代二百疋ツ、 省之進殿ヨリ

(重養女) 雅姫様 (重養女) 寿姫様 (齊真女) 随姫様

一御肴代百疋ツ、 右同人ヨリ

大御前様 御前様へ

一干鯛一箱ツ、 兵庫殿ヨリ

雅姫様 寿姫様 随姫様

一御礼計 右同人ヨリ

太守様 大御隠居様 御隠居様

大御前様 御前様

一干鯛一箱ツ、 兵庫殿内ヨリ

雅姫様 寿姫様 随姫様

一御礼計 右同人ヨリ

右之通、進上又ハ御礼被仰付候、

六三三一

〔朱書〕同相馬
一來月七日加治木長年寺へ 御參詣ニ付三本御道具、六

日ヨリ御光越、加治木飯屋 御止宿、御往来御船ニテ

八日被遊 御婦殿答候、

六三三二

〔朱書〕同
一來月三日 御初入部、初テ稻荷神事ニ付 御參詣、直

〔流鏑馬力〕
鏑流馬御覽、宝持院へ御入、

六三三三

〔朱書〕十一月 安房
一春光院様六月十四日御忌日ヲ御内外共以來十三日被相

替候旨申來候、

六三三四

〔朱書〕同
一諏訪御神事ニ付、社役勤与合ノ内、伊地知家ノ儀モ相

勤來候へトモ、先達テ本家秩父太郎事被 〔季様〕 聞召通趣有

之、家被召禿候付、右勤方被差免候条、是迄社役勤來

候面々へ寄々相達候様伊地知ノ内へ申渡、可承向へモ

可申渡候、

六三三五

〔朱書〕十一月 將監・安房
小番酒匂次郎左衛門

一右ハ、諏訪御神事ニ付、社役勤与合ノ内、伊地知家ノ

儀訳有之、此節被差免候付、以來跡代リ社役勤被仰付

候、尤、庶流別紙ノ面々モ繰廻相勤候様被仰付候条、

勤前ノ節ハ時々見計ヲ以申渡、左候テ、勤方仕向ノ儀

与合同様被仰付候間、承合可相勤旨申渡、可承向々へ

モ可申渡候、

〔行聞朱書〕
「別紙名書ノ儀ハ略ス、」

六三三六

〔朱書〕十二月四日 典膳
一川上臨觴一昨夜病死ニ付、 大御隠居様御忌五日・御

服十五日御掛被遊候、

六三三七

〔朱書〕十二月十四日 同
一大御隠居様御事、有馬御湯治被遊御相応、先月四日

御帰府、猶御機嫌能被遊御座候段御到來候、

六三三八

(朱書)文化九年申正月 將監

年頭
一御太刀一腰

一御馬代銀一枚

右、御在府御在国共、

暑寒
一伺御機嫌一通

右、御在府御在国共、

歳暮
一御肴一折

右、御在国ノ節、

但、御儉約年限中御祝詞一通、

右同
一御肴代二百疋

右、御在府ノ節、

但書同断、

一御肴一折

右、御発賀並御着城ノ節、
(親力)

但書同断、

右、
(齊興) 太守様へ、

年頭
一御太刀一腰宛

一御馬代銀一枚宛

右、御在府御在国共、

暑寒
一伺御機嫌一通

右、御在府御在国共、

歳暮
一御肴一折宛

右、御在国ノ節、

但、御儉約年限中御祝詞一通、

右同
一御肴代二百疋ツ、

右、御在府ノ節、

但書同断、

右、
(重憲) 大御隠居様 御隠居様へ、

年頭
一御肴代三百疋宛

但、御儉約年限中御肴代二百疋ツ、

暑寒
一伺御機嫌一通

歳暮
一御肴代二百疋宛

但、御儉約年限中御祝詞一通、

右、
(齊直繼室) 大御前様 (齊興室) 御前様へ、

右ハ、島津若狭殿年中進上物右之通被仰付候、
(忠公、重憲)

六三三九

(朱書)二月 安房

一雅姫様御法名 英祥院殿香譽清熏履操大姉
(重兼養女)

右之通候旨、此節申来候、

六三四〇

一(朱書)同三日同
一雅姫様御卒去二付、 太守様御忌二十日・御服九十日

被遊御請筈候へトモ、御忌日数相過候付、一日被遊御

遠慮候、 大御隠居様二ハ御忌十日・御服三十日、

御隠居様御忌二十日・御服九十日被遊御請候、

六三四一

(朱書)同廿二日 安房・信濃

一(齊島男)武五郎殿、御病氣御養生不被為叶、今卯上割被成御卒

去候、

六三四二

(朱書)二月 安房
一武五郎殿御卒去付御忌服左之通、

太守様 一御忌二十日 一御服九十日

大御隠居様 一御忌三日 一御服七日

御隠居様 一御忌十日 一御服三十日

操姫様(齊草女) 随姫様(齊草女) 一御忌二十日 一御服九十日

右之通、御忌服御請候、

六三四三

一(朱書)同同
一武五郎殿御法名 靈合院殿義相理演大禪童子レイカインアンギノワリテ

右之通奉称候、

六三四四

一(朱書)同同
一靈合院殿御遺体、明廿四日暮六ツ時過福昌寺へ御入寺

ノ筈候、

六三四五

(朱書)同同

一靈合院殿、明後廿七日暮六時御葬送ノ筈候、

六三四六

(朱書)三月十四日 伊勢兼家

一阿久根町ノ儀、近年殊ノ外勞入、浦並ノ御奉公難相勤

別テ困窮付、上下御奉公人泊ノ節、旅込私被仰付度願

申出趣有之、一往願之通旅込代相当可請取旨被仰付候、

此旨向々へ可仰渡旨、豊後殿御差図ニテ候、典膳

六三四七

(朱書)五月 安房
一毎月十三日 春光院殿御忌日付御精進日被立置、月次(重豪御室、齊宣実母)

朝計・御祥月終日、三十三回御忌迄ハ御正忌日並年頭・

盆・歳暮御家老、月次御忌日当番頭 御代參、且盆付

当番頭御使ヲ以御灯炉御寺納被仰付、 御下国脇御免

賀前(備力) 宥邦院様迄ノ 御牌、 御參詣ノ御序春光院様

御牌前へ可被遊御拜候、尤、年頭・盆・歳暮等付、福

昌寺へ 御參詣ノ御序 御拜被為在候節ハ別段 御代

參被仰付不及候、且毎月 御忌日御肴類進上並御咎目

事不被仰付候、

一 御仏龕御米三石・御銀五枚被召付、御施鐵鬼ノ儀(銀力)ハ七

月四日 恕翁様(元久) 大玄院様御已前ノ御正院様、其外

御夫人様御同日御執行被仰付、役僧・詰夫等ノ儀ハ宥

邦院様御方へ被掛置候内ヨリ兼役相勤候様被仰付候、

一 御隠居様ヨリ年頭・御年回・御正忌日・盆・歳暮御家

老 御代參、

一 毎月御忌日朝夕御精進、盆ニ付御側御用人・御側役ノ

間ヲ以御灯炉御寺納被仰付候、

但、太守様(齊興) 御隠居様ヨリ御灯炉御寺納ノ儀ハ、御

年限中ハ御拜殿ニ御寺納被仰付候、

一 大御隠居様ヨリ御正忌日御番頭御年回ノ節、御家老

御代參、

右之通被相定候条、此節寺社奉行其外可承向へ申渡、

御灯炉御寺納付テハ御使番請持致取扱候様可申渡候、

六三四八

(朱書)五月 安房 (卷之三三 二二五八)

一 朱紋挑灯ノ儀ハ大目付御役火事騒動ノ場ニテ何角差因

ノ節為目印被相用、横目ノ儀モ火事場へ駈付、盜賊改

又ハ諸下知等致、其外群集ノ場所へハ為締差越候付、

朱紋ニ役名ヲ相記候挑灯従前々持セ来、藏方目付ノ儀

モ同様申渡有之候、然処頃日御一門方並諸大身分ノ内、

間ニハヤツレニ朱紋挑灯被相用候方モ有之由相聞得候、

右通ニテハ目印ニ相紛、对御役場差支相成候間、以来

ハ大目付以上並横目・藏方目付迄、是迄之通朱紋ノ挑

灯相用、其外不斷ハ勿論火事場迄モ朱紋ノ挑灯一切不

相成候、此旨御一門方並諸大身分・御役人限致通達、

横目・藏方目付へモ可申渡候、

但、奥向御役場朱紋相用來候面々ハ是迄之通可相心

得候、

六三四九

(朱書)同(同)
一 每月十六日

右ハ、十三日御用日被定置候処御差支有之、右之通被

相替候旨被仰出候段申来候、

六三五〇

(朱書)同廿六日(同)

一 先月十九日御老中様御連名ノ以御奉書、 太守様増上

寺火ノ御番被為蒙 仰候段御到来候、

六三五一

(朱書)六月(信濃)

一 舒時 温 亮 諸 祀 豹 銀 兵 富 雅 寛

虎

右ハ、 公義並此御方 御子様等ノ御名文字ニテ、 実

名等ニ遠慮申渡置候へトモ、 最早不及其儀候、

六三五二

(朱書)同(典膳)
一 於八百殿 (倉直御室、若與実母)

右、 以来於八百ノ御方ト相唱、 女中五人被召付候、

六三五三

(朱書)七月四日(安房)
(貞久)

一 道鑑様四百五十年御回忌御法事被為濟候、

六三五四

(朱書)七月(将監)

一元姫君様 友松様 文姫君様 保之丞様 要之丞様御

事、 御台様御養被仰出候段、 従 公義被 仰渡候旨

申来候、 依之右唱ノ名付居候者ハ可致遠慮候、

六三五五

(朱書)同(同)

一 堀田豊前守様

右ハ、 御家内様共以来御両敬被仰談度、 於江戸此御方

様ヨリ被仰進趣有之、 先月十日被成其意候旨申来候、

六三五六

(朱書)七月(同)
一 堀田豊前守様 御家内

御嫡子 堀田美濃守様

右ノ 御新造様

御二男 真野亮之助様

(卷之四八 三六五四)

御四男 堀田門次郎様

御女子 於滿様ミチ

於池様キツ

御妹 於幸様

右之通候条、此旨可承向々へ可申渡候、

六三五七

(朱書)八月 安房

一二月廿二日 靈舍院殿(齊宮男、武五郎)

(卷之二五 一四五〇)

右御正忌日付、御精進日被相立候、

六三五八

(朱書)九月十二日 桂太郎兵衛

一日奈久町焼失二付宿無之候付テハ江戸其外交代ノ面々

上下ノ節、其考ヲ以致宿賦候様被仰渡候、

六三五九

(朱書)九月 安房

一邦丸様御事、当申御三歳ニテ追々御丈夫被為成候付、

先月十五日御用番様へ御嫡子御届書被差出候処、被成

御請取候段被 仰聞候旨御到来候、

六三六〇

(朱書)同

一去年三月朔日高輪於大輿 御男子様御誕生、御名 桃

次郎様卜奉称、御丈夫被為成候付、此節 大御隠居様(重孝)

御九男御届被為濟候、

六三六一

(朱書)同

一邦丸様御事、去々午三月廿八日御誕生、当申御三歳被

為成候間、其通相心得候様、向々へ可申渡候、

六三六二

(朱書)同

一邦丸様御事、若殿様卜可奉称、且御順ノ儀、御前様(齊興室)

御次被 仰出候、

一右二付、邦ノ字並同唱迄モ可致遠慮候、

右之通、不洩様向々へ可致通達候、

六三六三

(朱書)同

一邦丸様御事、御嫡子之御届被為濟候付テハ年頭其外

月次・御祝儀・伺御機嫌等 太守様御部屋柄内之通被(齊興)

申上候様、向々へ不洩様可申渡候、

六三六四

一邦丸様、御嫡子ノ御届被為濟候付テハ、太守様・若殿様へ御一門方ヲ始諸士迄モ進上物被仰付先例候へト

モ、当時蔽敷御省略中付、都テ進上物不被仰付筋被仰付候付、其通被相心得候様、向々へ可致通達候、

六三六五

一去年三月朔日高輪於大奥、御男子様、御誕生、御名

桃次郎様ト奉称、御順ノ儀ハ、(重孝)寿姫様御次ニ被、仰出候条、此旨奉承知、桃ノ字並同唱迄モ名ニ付居候人ハ可致遠慮候、

六三六六

一若殿様へ一橋民部卿様ノ御息子様、(女カ)英姫様御儀、御縁

組、御内談被為在、一橋様ヨリ御内慮御伺被為濟候付、此御方様ヨリモ御内意書、先月廿五日御用番様へ被差出候段御到来候、此旨承知仕候様御役人限可致通達候、

六三六七

一若殿様御儀、此節御嫡子御届被為濟候付、年頭・八朔進上物其外ノ儀共左之通、

一年頭付、御一門方・大身分・一所持・一所持格・大目付以上並江戸詰ノ諸地頭其外ヨリ御太刀進上被仰付、

一右ニ付、江戸へ御祝儀等不申上、諸地頭其外ヨリハ於当地、太守様へ御太刀進上仕候節、是又納ニ被仰付、

一八朔付、若殿様へ進上物、(齊道)御隠居様御同様被仰付、御一門方以下寄合並以上元服・家督・継目・養子成等

並初テノ、御目見ノ節、且又御役・地頭職ノ御礼、以來、若殿様へ、御隠居様御同格御礼進上物被仰付候、

一若殿様へ月次其外御祝儀・伺御機嫌等ノ儀、先達テ申渡置候通ニ候、

一御同人様へ御祝儀・伺御機嫌等江戸へ書状等ヲ以被申上來候面々、太守様御部屋柄内ノ節ノ通被仰付、

一年頭・八朔等ノ屹卜御式ニ相掛候儀ハ御次第書等ニモ御裁被遊候様被仰付、御内輪次第書等其事々ニヨリ思召次第被仰付候、

右之通被仰付候、左候テ、謁・進上・振等ノ儀共都テ

太守様御部屋柄内之通被仰付候旨申来候、

六三六八

(朱書「同」)

(齊宮御室、齊興実母)

一於八百ノ御方御門通融ノ節、両扉相開番人下座等ノ儀並途中ニテ諸人参合候砌モ、都テ是迄之通ニ候条、此旨可承向へ可申渡候、

六三六九

(朱書「同」)

一於八百ノ御方事、於八百ノ御方ト此御ノ字書認候様被仰出候、

六三七〇

(朱書「同」)

(齊棟)

一若殿様へ一橋民部卿様ノ御息女 英姫様御縁与御願之通被 仰出候付、御順ノ儀ハ 若殿様御次ニ被 仰

出候、此様ノ字被相用候、

一右ニ付、御名ノ字並同唱ノ名付居候者ハ可相改候、

六三七一

(朱書「二月 典膳」)

一若殿様、先月十六日芝神明宮へ被遊御官参候旨御到来候、

六三七二

(朱書「同、安房」)

一若殿様、御官位無之内ハ

(齊興実)

候へハ 御前様御上、 御名順等相認候様被仰付置候へトモ、以来 御官位被為蒙 仰候テモ、 御前様御

次 御名順等相認候様被仰付候旨被 仰出候段申来候、

六三七三

(朱書「天御隠居様御筆仰出」)

一徒目付・横目・蔵方目付・広敷横目ノ儀ハ夫々掛ノ向見聞ノ為メ掛置、過半ハ一列ニテ勘定ヲモ相遂由候故、

別テ大切成勤柄ニ候処、其意ヲ不汲受、間ニハ役場不

相応ノ儀モ有之哉ニ相聞得不埒ノ至ニ候、諸蔵々並膳

所・納戸方・広敷其外於勤場日用ノ損費迄モ屹ト令見

聞、不正筋ノ儀ハ勿論少事タリトモ見聞ノ次第不差置

申出候様可申渡候、此上ナカラ万一不取締ノ趣モ候ハ、

一涯重ク咎目可申付候、尤、格別出精相勤候者へハ品

能可及沙汰候間、此段モ可申聞候事、

一見聞役掛置候場所へ相勤候者ハ勿論諸向へ分テ此節見聞ノ趣申付候間、已前ヨリ仕来ノ事タリトモ急度相改、実意ヲ以令精勤、当時分テ儉約ノ詮相立候様申渡、格別出精勤候者へハ其功可相立候間、支配ノ者右心得ニテ召仕候様細々以添書可申渡候、尤、国許へモ同断可申越候、且隠目付申付置候間、諸向其旨可相心得候事、
〔朱書〕
「右ニ付、御家老衆添書略ス、」

六三七四

〔朱書〕文化十年癸酉正月 将監

一去ル辰年ヨリ五ヶ年ノ間、分テ稠敷御儉約ニテ、御年限中諸向二年詰被仰付置、格別御取縮有之候へトモ、差テ其詮不相見得候、依之一往当分ノ通二年詰被仰付候、

右之通、於江戸申渡有之候段申来候、

六三七五

大御隠居様御筆仰出写

一先達テ内々申越置候、当秋其元入湯御暇申上差越候心

得ニテ候処、

〔家齊奏、披露〕
御台様神田橋ニテ御差留ニ相成、御厭

之趣誠算加至極難有仕合、何分畏リ御受申上、先ツ近年中ニハ、御暇ノ儀ハ不相願候処、得ト相考候ニ、先年混雑後御老中方ヨリ内沙汰ノ趣モ有之、当時介助中ニ候へハ、何レ今一度ハ鳥渡差越、其元ノ様子不及見聞候テハ永々ノ儀無覚束存候、其上其方共ヨリモ毎度願越候一筋モ有之、旁以此度猶又無拠詔合申立候へハ御両方様共ニ御聞濟ニテ国家長久難有仕合、来秋御暇申上候心得候、然ハ自分着ノ上彼は見聞致シ、万端可申聞候へトモ、先夫迄容貌言語其外前々申渡置タル趣意等折角取調、行届候様各申談末々迄モ可申渡置候、見聞ノ上万端届兼候筋合モ候得ハ急度存寄モ有之候、此段前広申聞置候事、

十月朔日

国元 家老中へ

右ニ付、御家老衆連名ノ添書略ス、

六三七六

〔朱書〕三月 将監
一二月廿日

(齊宣男、武五郎)
靈合院殿御正忌日、二月廿二日候へトモ御差支ノ儀有
之、右之通被相替候、

六三七七

(朱書〔四月〕同)

一御隠居様、当年四十一御受厄ニ付、諸大身分、奥・表
諸御役人並諸士又ハ諸郷・三町人相中迄、御願文先例
差上来候へトモ、当時諸向困窮ノ段被 聞召通候付、
此節モ御願文不及差上、併自分心入ヲ以差上度存候向
ハ勝手次第被仰付候、

(卷之三二 二二三九)

六三七八

(朱書〔五月〕同)

一先月廿三日増上寺火ノ御番御代松平陸奥守様へ被 仰
付、御引渡相濟候段申来候、

六三七九

(朱書〔六月〕同)

一御当地ヨリ江戸へ被差越候面々、東海道・伊勢路・美
濃路通行ノ節、継人馬二十五人・二十五疋及以上候節
ハ御伺ニ相成候様、道中御奉行衆ヨリ被仰渡、尤、人
馬何程卜御伺濟ノ上ハ相減致通行候儀モ不相成候、依

之以来仕向左之通、

一二十五人・二十五疋以上ノ人馬同日繼立候儀有之節ハ
往返日賦考ノ上、出立日限前以其訳可申出候、左候ハ、
御免ノ上可被差立候、

一右人馬數ニ不及被差立候面々、御当地同日ニ出立不致
候テモ、船中不順ニ有之候カ、又ハ何ソニ付相滯多人
數一所ニ着坂致シ、同日ニ罷立候テ人馬過上致候へハ
可及差支候、上坂ノ上御留守居へ得差図候上可致通行
候、

一右ニ付、於道中先触外臨時雇人馬致候節ハ何方於駄々
何程ツ、何様ノ訳ニテ雇人候旨日付迄書記、江戸着ノ
上御留守居役所へ届可申出候、

一御用物被差越候節迎モ、二十五人・二十五疋及以上候
へハ、是以御伺無之候テハ不相叶事候故、受持御役場
氣ヲ付、可成丈右人馬數ヨリ内ニテ相濟候様可取計候、
乍然急ニ不差越候テ不叶品モ有之、人馬過上致シ御伺
ニ相成候儀、間ニ合兼候節ハ伏見ヨリ二手ニ可差越候
間、右之趣於大坂宰領人ヨリ御留守居へ可得差図候、

六三八〇

(朱書)七月安房
一 光合院殿心珠浄(空白)大姉

右八、於憐殿御母須賀法号右之通候、以来諸書付等モ

光合院殿下此殿ノ文字相用候様被仰付候、

六三八一

(朱書)九月同

一 右八、御内証様御同様何篇取計、御柄居所等モ是迄

春光院殿被成御座候場所へ御柄居有之候様、当分御

留守ノ儀ニモ候間、御年寄ヲ初惣女中差寄相勤、追々

於八百ノ御方思召モ可有之候付、其上ニテ御付女中モ

可被仰付候、尤、年中表方ヨリ御渡方ノ儀モ是迄 春

光院殿様御同様ノ振合ニテ御広敷御用人取計被仰付候、

六三八二

(朱書)同

一 於八百ノ御方御門通融ノ節、大戸相開本下座被仰付候

間、途中ニテ諸人參逢候砌モ右ニ応ヘク候、

六三八三

一 此節 (重書) 大御隠居様被遊 御下向、御領國中風俗等ノ儀

付、細々被 仰出候趣夫々奉承知通候、右付四家並御

家老ヲ始一統家督ノ者ヨリ御請書血判ニテ差出、末々

至リ候テモ其頭立候者ヨリ同断差出候様、左候テ、右

之趣家々ニ書留、後代ニ至候テモ聊忘却致間敷旨被

仰出候条、別紙案文ノ向ヲ以夫々御請書相認、血判ノ

上支配頭等へ相付可差出候、此旨向々へ不洩様可申渡

候、

但、血判ノ儀付テハ追テ何分可申渡候、

十月

(川上久芳)

右近

(島津久家)

將監

(島津久備)

安房

一 御領國中風俗等ノ儀付、委細被 仰出候趣一々奉承知

候、以来屹下相改、後代子孫至リ聊忘(却カ)布仕間敷候、仍

御請書如是御座候、以上、

年号月日

何某血判

右同

〔朱書〕右付、血判名書与合並血判被仰付候場所等ノ儀、安房殿ヨリ被仰渡候御書付二通略ス、

六三八四

〔朱書〕十月右近
一是迄御勝手方吟味役被仰付置候ヘトモ、此節被成御免、
一往役場引取被仰付候条此旨申渡、可承向ヘモ可申渡候、

六三八五

〔朱書〕同同
一此節御趣法掛・御儉約掛・御側御用人、其外御勝手方二階へ致日勤、諸向ヨリ差出候書付等相請取候様被仰付候テハ、何篇御所帶向ノ儀ハ勿論訴訟事等モ御所帶向ニ相拘リ候儀ハ都テ右役場へ申出、其外ノ儀ハ是迄之通御勝手方御用人定式ノ御役場へ可申出候、此旨向々へ可申渡候、

六三八六

〔朱書〕同同
一此節御勝手方二階へ御趣法掛・御儉約掛等ノ御役々其外相詰、御勝手向ノ儀取扱被仰付候付、右御役場御趣

法方ト相唱候様被仰付候条此旨申渡、可承向ヘモ可申渡候、

六三八七

〔朱書〕閏十一月安房
一去年正月芝於大奥、御隠居様御女子様被遊、御誕生、御名シツ閑姫様ト奉称候、最早御丈夫被為成候付、此節御弘有之候、依之御役人限並詰衆明後十五日御礼、後居残候テ、御三殿様〔齊彬〕若殿様へ於席々調、御祝儀可被申上候、

六三八八

一今度御誕生ノ〔家慶男〕若殿様、竹千代様ト奉称候旨被仰渡候付、御名ノ文字遠慮ノ儀ハ別紙申渡通候、依之千代ト統候唱モ遠慮致候様可申渡候事、

〔朱書〕同同
一公方様〔家茂〕大納言様〔家齊男〕御台様〔家慶男〕御簾中様〔家慶男〕
竹千代様〔家齊女〕淑姫君様

右之通、御順候旨被仰渡候段申来候、

六三八九

(朱書)同 一今度 若君様御誕生、竹千代様卜奉称候旨被渡候段申来候、依之 御名ノ文字並実名ニ相用候儀、且同唱ノ文字迄モ遠慮可仕候、

六三九〇

(朱書)同 一去年正月芝於大奥 御隠居様御女子様被遊御誕生、御名 閑姫様卜奉称候、御順ノ儀ハ(齊宣女)随姫様御次候条、此旨奉承知、閑ノ字並同唱迄モ名付居候人ハ可致遠慮候、

六三九一

(朱書)同 一今度御誕生ノ 若君様御事、被遊 御官位候迄ハ御呈書其外 竹千代様卜奉相認旨被仰渡候段申来候、

六三九二

(朱書)十二月廿六日 右近 一今般 (齊興室)御前様 御安産、御二男様御出生、御名治五(齊敏)郎様卜奉称、御順ノ儀ハ 閑姫様御次被仰出候条此旨奉承知、治ノ字並同唱迄モ名付居候人ハ可致遠慮候、

六三九三

(朱書)同 一今般 御前様御安産、御二男様御出生、御名治五郎様卜奉称、十一月十七日御二男ノ御届被為濟候段御到来候、

六三九四

(朱書)同 一閑姫様御事、(朱書)改名藤正台田光胤松平久五郎様へ御縁与御取結被成度、松平楽山様ヨリ無御扱被仰進趣有之、被応其意、先月朔日先御内々ニテ楽山様御方へ御引越被為濟候段御到来候、

六三九五

(朱書)十二月 同 一於長殿 (齊宣女)

右ハ、島津太郎次郎へ縁与被 仰出置候へトモ、被為在思召御取返被仰付候、

六三九六

(朱書)同 一御同人御事、長姫様卜奉称候様被仰付、尤、御順ノ儀ハ 随姫様御次、閑姫様御頭へ被成御座候様被

仰付候、

六三九七

〔朱書〕同
一於長殿御事、長姫様卜奉称候付、長ノ字並同唱迄モ

名付居候人ハ可致遠慮候、

六三九八

〔六三九七号行間朱書〕
先達テ長姫様御名遠慮ノ儀申渡置候ヘトモ、聡姫様卜

御名替付最早不及其儀候、

戌二月

〔島津入禮〕
安房

六三九九

〔朱書〕文化十一年甲戌正月 安房
〔弁算女〕

一閑姫様御事、松平久五郎様へ御縁与御願之通被仰渡、

旧臘廿五日御引越ノ御届御用番へ被 仰出候段申来候、

六四〇〇

〔朱書〕同
一閑姫様御事、松平久五郎様へ御縁組御願之通被仰渡候

付、久五郎様御名同名ノ者ハ遠慮可仕候、

六四〇一

〔朱書〕同
〔忠職 佐土原〕
一又四郎殿御事、島津筑後守殿、

右ハ、旧臘十六日御叙爵被 仰出、右之通御改名被成

候申来候、

六四〇二

〔朱書〕二月 同

一今度 御隠居様御屋敷白銀村今里ノ内、百姓地面一円

ニシテ御取入相成、御家作等御成就ノ上追テ御引移被

遊筈候旨申来候、

六四〇三

〔朱書〕同
〔弁算女〕同

一長姫様御事、当秋御出府被 仰出、島津啓之助殿ニモ

同断、御供人数其外都テ 御子様方ノ通ニテ、御物御

計ヲ以御一所ニ御出府有之候様御内定候付、右体御例

ヲ以致吟味、当時ノ儀故何篇御手細ニ取調申出候様御

広敷御用人へ申渡、可承向へモ可申渡候、

六四〇四

一長姫様御事、(朱書)同 聡姫様、

右之通御名替、(弁置雜巻) 大御前様御養被 仰出候、

六四〇五

一長姫様御事、(朱書)同 聡姫様卜奉称候付、聡ノ字並同唱迄モ

名付居候人ハ可致遠慮候、

六四〇六

一竹千代様御色直御祝儀付、(朱書)三月 同 従 竹千代様先月三日 上

使松平周防守様ヲ以 (兼任) 御三殿様被遊御拝領物候段御到

来候、

六四〇七

一不宜聞得等有之、何分申渡迄ノ間勤方差控慎罷居候様

申渡置、後達テ御役等被差免候者御役料米ノ儀ハ慎申

渡前日迄ノ日割ヲ以差引可致候、尤、慎申渡置候テモ

役義不差免、逼塞・遠慮等ノ輕御咎目申付候者ハ慎内

ノ被下方不及差引候条、此旨物奉行御代官へ申渡、可

承向へモ可申渡候、

六四〇八

一白銀村・今里村百姓地面ノ内一畝二相円、(朱書)同 右近 御隠居様

御名前ニテ御抱屋敷御免有之候付、白金御屋敷卜相唱、

諸書付等ニモ其通可仕候、左候テ、御殿向其外御出

来ノ上、当六月頃 御隠居様 (重巻) 大御隠居様被遊御移御

内定候、御移ノ上ハ万端高輪御屋敷御仕向ニ被準筈候

条、向々其心得ニテ致取扱、物毎御手細ノ方ニ取調可

仕候、

六四〇九

一右ハ、丹羽左京太夫様御叔父修滅様御事、御養子御願

之通被 仰出、旧冬御引取相濟、右付御談合モ被為在

候故、以来御両敬被仰合度被仰進、先月廿日被応其意

候段申来候、

候段申来候、

(卷之三十七 二七二四)

六四一〇

(朱書)同 一生駒大内藏様 御精進日

五日 十六日 廿三日

右、終日、

十九日 廿一日

右、朝計、

右之通申来候、

六四一一

(朱書)同 一生駒大内藏様 御家内

御養子(修藏カ、親孝) 生駒修減様

大内藏様

奥方様

修減様
奥方様
安藤将曹様御縁女
於中様

右之通申来候、

六四一二

(朱書)同 右近・安房 一於他所御家中ノ者未々ニ至迄、少事ノ儀逆モ無調法有

之候へハ兼テノ被仰付様大形ノ体ニ相聞得、御名ヲ

出事候間、此旨不致忘布家来下々迄諸事ヲ相慎候様ト

ノ儀、従前々ノ御大法ニ候間、人々其覚悟ハ有之筈候

へトモ、輕者末々ニ至候テハ物毎勘弁薄取違候儀モ有

之事情間、此旨ヲ猶又吃ト可申付置候、勿論御当地又

ハ道中筋ニテハ一涯行当等無之様相心掛、無用ノ場所

等へ不立障万端可相慎候、乍其上万一不慮ノ儀致到来

候ハ、龜忽ノ働不致可成丈其場ヲ致堪忍、其節ノ応時

宜夫々可相届向へ相届筋々ノ取計可致候、仮令末々ノ

者タリ共一分ノ立候様無之候テ不叶事候、兎角手前ノ

不慎ヨリ事起り候へハ、其身ノ不覚ハ勿論御外聞ニモ

相掛事候間、兼テ右ノ所ヲ致忘布、平生ヲ相慎候様支

配頭・主人ヨリ毎度嚴敷可申付候、尤、他所旅申付候

者ハ人柄一涯致吟味、勿論召列候家来下人ノ儀モ同断

ノ事候間、万一不埒ノ仕形有之候ハ、依事頭人・主人

迄モ可及迷惑候、

右之通、弁意 御隠居様被 仰出候条、聊モ無忘布吃ト可

相守候、

六四一三

(卷之三 五 二四三六)

(朱書)四月内藏

一 江戸詰トシテ致往来候面々、於道中人馬繼立方ノ儀、

以来左之通、

一 繼人足二十五人

一 繼馬二十五疋

右ハ、何ソ付御礼使並御用物才領、其外間々交代等ニ

テ東海道致通行候節、一日分右之通繼立候テモ不苦候、

右外ハ一人一疋タリトモ 公迎へ御何無之候テハ通行

不相成候、

一 繼人足五六人ノ間

一 繼馬二三疋ノ間

右ハ、美濃路ノ儀、一日分右人馬数ニテ罷通候儀ハ不

苦候、過上ニ及候へハ前条同断、御何無之候テハ通行

不相成候間、可成丈伊勢路可罷通候、

一 中山道・木曾路ノ儀ハ被究置候通、猶又無間違様可心

得候、

一 江戸致出立候節、人馬数届申出置候外ニ於道中臨時相

雇候節ハ何月何日何方於宿幾人何疋相雇候訳、於大坂

御留守居へ届可申出候、最初申出置候通無間違候テモ

其段可申出候、尤、爰元ヨリ致出立候節ハ、於大坂増

減等ノ儀ハ於江戸可申出候、左候テ、右届申出候節、

役目等片書ニ相記、銘々名前相立、同立一所ニ可申出

候、

右ハ、道中人馬繼立方ノ儀付テハ先年ヨリ度々申渡趣

モ有之候処、間ニハ不行届儀モ有之、不可然事候条、

以来右之通相心得、聊大形ノ儀有之間敷候、乍此上不

守ノ者モ候ハ、屹ト可及沙汰候、此旨不洩様向々へ可

申渡候、左候テ、出立ノ節申出候節、向々御用人ヨリ

当人又ハ支配頭等へ前文ノ趣無間違様時々可相達旨、

是又可申渡候、

六四一四

(朱書)四月内藏

一 啓之助殿御事、島津首令養子被 仰出置候処思召有之、

(音真勇、忠則)

此節御取返被成候旨 大御隠居様被 仰出候、左候テ、

外 御子様方御同様此様文字相用、御順ノ儀ハ 聡姫

様御次被仰付候旨、是又被 仰出、御本丸へ御上有

之候、

六四一五

一啓之助殿御事、島津首令養子御取返被 仰出、啓之助

様卜奉称候付、啓之字並同唱ノ名付居候人ハ可致遠慮

候、

上寺火之御番被為蒙 仰候段御到来候、

六四二〇

一太守様御不快付御滞府、被遊 御保養候処、御快御参

府ノ御時節相成候付、御用番土井大炊頭様西丸御老中

松平能登守様へ御対容ノ儀被仰込、先月十一日 御見

舞、公刃御機嫌被相伺、同十五日 御登城、御参府

ノ御礼被仰上候処、御懇之被為蒙 上意、御直御請被

仰上、諸事御先格之通被為濟候段御到来候、

右之通、御滞府後初テ 御出勤、御参府ノ御礼迄モ被

仰上候、

六四一七

一聡姫様 啓之助様御儀、 御出府之節、御道中御休泊

御一所ニテ、御宿札等ノ儀ハ 啓之助様御名前ニテ被

遊御通行筈候、

六四二一

一御年寄上席曾美病氣養生不相叶、先月廿日致死去候、

御子様方御出生モ為被在御事候付、 大御隠居様日数

三日御遠慮被遊候、

六四一八

一啓之助様御事、 此節 御隠居様御七男之御届被為濟候、

一先月十九日御老中様御連名ノ以 御奉書、 太守様増

六四一九

一柏寿院殿貞節如純大姉

右ハ、曾美法号右之通二候、以来諸書付等ニモ柏寿院殿卜此殿文字相用候様被仰付候、

六四二二

(卷之三十七 二二五六五)

御隠居様(朱書同) 大御前様白金御屋敷へ御引移ノ上ハ左之通被仰付候、

一年頭・節句日其外御祝儀・伺 御機嫌、又ハ何ソニ付御礼申上候儀、且又御付人数着出立届振等ノ儀共、何篇 大御隠居様御方御同様ノ仕向被仰付候、且 大御前様へ是迄御広敷へ罷通御祝儀等申上来候面々ハ右ニ準申上候様被仰付候、

一御付御小納戸ヨリ御側目付・御供目付兼務被仰付、御厩ノ儀ハ御小納戸頭取ノ内へ御馬預兼務被仰付候、
一新番一人・中小姓十人相詰候様被仰付候、
右之通被仰付候旨申来候、

六四二四

(朱書)七月 内蔵

一聡姫様御儀、当秋御出府付テハ先月十八日御用番青山(赤筆)下野守様へ御届被及候段申来候、

六四二五

(朱書)七月 御目付

一大風ノ節請持之御座々、奉行・頭人ハ勿論書役・小役人、当番・非番ニ不限罷出候様、先年被仰渡置候処、先夜大風ノ刻モ無其儀候間、向後右様ノ節ハ屹卜罷出、若異変ノ儀(有力)右之候ハ、御目付へ届可被申出旨、(新納久命)内蔵殿ヨリ被仰渡候、

六四二六

(朱書)七月 内蔵

一御隠居様 大御前様御事、先月十八日白銀御屋敷へ御引移被為濟候段御到来候、

六四二七

(朱書)同

一御隠居様 大御前様御事、白銀御屋敷へ御引移被遊候付テハ、何ソ付 上使御給等ノ節ハ上御屋敷ニテ御引請可被遊旨、御用番様へ御届被 仰出置候旨申来候、

六四二八

(朱書)同

一聖堂(築力)積(築力)ノ儀、当分名目迄被立置、春一度御名代等ハ有之、備物ハ輕キ品迄ニテ、儀式ハ無之候処、以来春

一度釈(築カ)□ノ儀式執行候様被仰付候、左候テ、当時嚴敷御俵約中ノ事故、万端不及御入価様可取計旨被仰付候、

六四二九

(朱書)八月 安房

一 聡姫様 啓之助様、来ル廿七日被遊 御発輿候、

六四三〇

(朱書)八月廿三日 未川主膳

一 西方宿場ノ儀、浦人共近年相勞(空白)□方等一円無之、往来

御奉公人宿等差支候付、江戸・大坂其外往来之御奉公人西方泊ノ節、旅込仕調差出相当ノ旅込錢相請取候筋

被仰付被下度願申出趣有之、願之通被仰付旅込代相当

可相請取旨、向々へ不洩様可被仰渡旨、(川上久考)右近殿御差函

ニテ候、

六四三一

(朱書)九月 右近

一 御先供(駕カ)兩人

一 御賀籠廻ノ内奥御小姓一人・奥御茶道一人

一 合羽籠二荷

右ハ、御地廻御供立ノ内、右之通御減少ノ筋 公辺へ

被為及御届候間、右外二毛向々吟味ノ上可被相減儀ハ其通可有之旨、(重書)大御隠居様御沙汰被為在候段申来候、

六四三二

(朱書)十月二日 右近

一 竹千代様御不例御養生不被為叶、八月廿六日被遊御逝

去候段御到来候、

六四三三

(朱書)十月 右近

一 慈照院様

右御忌日九月廿六日、九月廿三日ニ被相替候、

一 芳蓮院様

右御忌日六月十一日、六月八日ニ被相替候、

一 嶺松院様

右御忌日十一月廿日、十一月十九日ニ被相替候、

一 宝台院様

右御忌日三月三日、三月二日ニ被相替候、

右御靈々様御忌日、右之通被相替候旨被仰出候段申来

候、

六四三四

〔朱書〕同〔同〕
一 竹千代様御院号 玉樹院卜奉称候旨、從 公義被仰渡
候段申来候、

六四三八

〔朱書〕同〔同〕
一 太守様 大御隠居様 御隠居様 〔齊意〕
〔齊真繼室〕 大御前様 御前様 〔齊興室〕
〔齊地〕 若殿様
右ハ、御名順被相究置候へトモ、以来公辺向・他所・
御内輪共右之通被相究候、

六四三五

〔朱書〕十一月 内藏 〔家慶女〕
一 今度於西丸 姫君様御誕生、御名 達姫君様卜奉称候
段、從 公義被仰渡候旨申来候、依之右唱之名付居候
者ハ可致遠慮候、

六四三六

〔朱書〕十二月 右近
一 聡姫様 啓之助様長途御機嫌能、先月六日被遊 御着
府候段御到来候、

六四三七

〔朱書〕同〔同〕
一 御子様方ノ御中、是迄御内輪ニテ姫ノ字被相用、表向
ハ不被相用事ニ候、以来モ弥其通可有之、乍然御近親
ノ御方様方へ御文等ニ相認候節、依時宜ハ姫ノ字相用
候儀モ可有之事候、

英姫様御事ハ御内輪・表向共姫ノ字相用候様被仰出候、

島津家歴代制度卷之七十一 文化十三年ヨリ
文政十四年マデ

遠慮候、

六四四二

一 去戌八月六日於高輪大輿御誕生之御女子様、御名 種シノ

姫様ト奉称、御順ノ儀ハ 虎之助様御次ニ候条此旨奉

承知、種之字並同唱迄モ名付居候人ハ可致遠慮候、

六四三九

文化十二年亥

一 去年於高輪大輿御誕生之 御女子様、御名 種姫様ト（重妻女）

奉称候、最早御丈夫被為成候付、此節御弘有之候、

六四四三

一 達姫若君様御事、御簾中様御節被仰出候、（家慶室）

右之通、從 公義被仰渡候、

六四四〇

一 去年西正月六日於高輪大輿 御男子様御誕生、御名虎（重）

之助様ト奉称、御丈夫被為成候付、此節 大御隠居様（重妻）

御十男之御届被為濟候、

六四四四

一 去々々年 御下向ノ節、御領国中御取締向ハ勿論容貌・

言語等ノ儀、御細密御ケ条書等ヲ以被 仰出、御一門

方・大目付以上ハハ 御直ニ被 仰出候付諸向奉承知、

万端御趣意通相守様ト被思召上候、然共従古来ノ風俗（積カ）

ニテ兎角ニ旧俗ニ立婦儀已而有之候間、往々□通相守（籠カ）

候様猶又可申渡候、且又学文武芸ノ儀、每度 御沙汰

モ被為 在候上ナカラモ、猶又御ケ条書ヲ以モ細々被

六四四一

一 去年西正月六日於高輪 大輿 御男子様御誕生、御名

虎之助様ト奉称、御順之儀ハ 桃次郎様御次ニ被仰出（重妻、奇也）

候条此旨奉承知、虎ノ字並同唱迄モ名付居候人ハ可致

仰出置、第一士持前之事候間、致練熟候様無油断可相

心掛、尤、師匠家ノ儀ハ指南方可致精勤候、勿論言行

不正候テハ芸術之本意ニモ不相叶筈候間、容貌・言語・

風俗等ノ儀モ師範家ヨリ兼テ可致教戒、若不相用族者

師弟ノ道相背者候条、夫々従師家可致破門候、且又諸

御役所向ヘ相勤候者モ同断ノ儀候間、仮令日用ノ御用

向ハ兎哉角相^(弁カ)候テモ、御趣意ニ不相叶不行跡ノ者ハ

往々御用ニモ難相立事候条、支配頭等ヨリ御趣意通立

直候様時々申聞、乍其上モ不相用言語・容貌等不宜者

ハ專御役場ノ風俗ニモ相掛事候間、其勤向可差免候、

分テ造士館ノ儀ハ学館ノ儀ニテ御領國中ノ目当ニモ相

成事候条、一涯子弟教育可為第一候、去々年 御下向

ノ儀ハ御政務筋 公辺ヘ御申立、乍 御老年様 御下

向被遊タル御事候付、急度仰出ノ詮相立、一統御趣意

通不立直候テハ 公辺御聞合^(聞カ)モ如何敷、殊更當時御介

助中ノ御事候得ハ被对 公辺御申訳モ無之御迷惑ニモ

相掛候条、 御領國中ノ面々聊モ無忘却、堅可相守旨

末々迄モ可申渡候、

三月

六四四五

^(朱書)四月 監物、安房、内蔵
一御領國中御取締向並容貌・言語等ノ儀、 大御隠居様

去々年御下向ノ砌御ケ条書ヲ以御細密被仰出置候処、

従古来ノ風俗ニテ兎角旧俗ニ立帰候儀而已有之候間、

往々^(罷カ)通相守候様委曲別紙之通、此節於江戸島山数馬

へ被 仰出候、畢竟間ニハ被守薄向モ有之候所ヨリ、

又候被為反 御沙汰甚以奉恐入儀候条、以来万端御趣

意通堅相守、往々^(罷カ)通候儀可心掛候、去々年御細密被

仰出候付テハ一統承知ノ上、後代子孫ニ至リ聊忘却仕

間敷旨、御請書差上、血判迄モ被 仰付置候付、何レ

モ立直候様無之テハ不叶事候間、此節 仰出ノ御趣意

ヲ以猶又人々厚可奉汲請候、就中年若ノ面々へハ父兄

等ヨリ朝暮無間断可致教戒候、乍此上若不守ノ族モ候

ハ、屹卜御取扱被 仰付、父兄等迄モ相当ノ御咎目可

被 仰付候、此旨行届候様支配下下役等へモ時々可申

含候、

右之通、 大御隠居様被 仰出候、

一去ル辰年 (重蒙) 大御隠居様又ハ御介助被成進、其砌御儉約

御年限中ナカラ五ヶ年ノ間猶又稠敷御取締向鎖細被

仰出、諸人困窮ノ乍時節難被黙止出銀米並給分引方迄

モ被仰付、大坂新御仕送等ノ儀ハ 御下知被為立追々

御仕送物等モ相重旁ニ付相応ノ御出目有之、夫丈ケ三

都ノ御借財モ先年ヨリハ相減、御役々ハ勿論一統出精

ノ廉モ相心得、御満足被 思召上候、然共基莫太(大カ)ノ

御借財高故、中々以御所帯方御立行ノ方ニハ未到候付、

御年限ニモ相滿候得共無扨、又々去ル酉年ヨリ来ル卯

年迄七ヶ年、是迄ノ通御儉約被 仰出、三都ノ御借財

御趣法向モ被相替、彼是御吟味被仰付御事ニ候、依之

於向々緩セノ儀無之様候得共、兎角ニ其際ノ様無之物

每廢弛ノ方ニ成行、仰出ノ御趣意不相立方ニ相成儀

モ有之、不可然事候条、無緩疎様可心掛候、勿論御役

場勤人数ヲ初諸向減少方ノ儀モ押テ被仰付候テハ差支

モ有之積卜被 思召上候ヘトモ、尚御時節難被差置無

扨被 仰出置候処、追々取締筋申立、連々本之通相成

振合ニテ御取締向被 仰出候詮モ無之、仰出ヲ奉輕

筋ニ相当甚以不可然儀ニ候、且又御国役モ難被為勤程

ニ成立ヘク御時節故、上々様御身辺ノ儀迄モ御事ヲ

被為欠、御不如意ニテ被為在御事候処、右様ノ汲受

モ無之等閑ノ方ニ相見得、旁以別テ如何ノ至ニ候、依

之於諸向右等ノ所得卜汲受、減方被仰付候所ヲ以御差

支不相成様申談可致弁別候、右ニ付テハ夫丈ケ万端ニ

付、諸向昼夜可致骨折儀ニテ 御氣之毒被 思召上候

ヘトモ、此節ノ儀ハ被為及 御老年至テ御心慮御世話

被遊候御事候間、是非御取締ノ詮不相立候テハ不叶儀

候処、何レノ筋ニモ 御仰出ノ御趣意(罷カ)通兼候間、急

度取守昼夜掛心頭精々致御用弁候様 思召候、就中大

與向ノ御取締向(罷カ)通候様分テ可申渡候、尤、是迄段々

御儉約モ被仰付候後ニテ、最早吟味ノ致様モ無之扨卜

諸向等閑ニ打過候テハ決テ不相成候付、日ニ新ニ尽心

力候様於無之ハ、御所帯方御立直ノ期ハ有之間敷候条、

一統此旨ヲ最初 仰出ノ御趣意無忘却、猶又鎖細尽吟

味可致精勤旨、大御隠居様被 仰出候、

三月

六四四七

(朱書)四月 監物・安房・内藏
一御所帯方極御難渋二付、格外御取縮向 大御隠居様鎖

細被 仰出置候付、於向々緩七ノ儀無之様候へトモ、

兎角其際ノ様無之物每廢弛ノ方二行行、(行カ) 仰出ノ 御

趣意不相立方二相成候ヲモ有之候付、無緩疎様心掛、

最初 仰出ノ 御趣意無忘却、猶又鎖細尽吟味可致精

勤旨、此節於江戸畠山數馬へ別紙之通被 仰出、一々

御尤ノ御事候条、一統其旨ヲ奉承知、一涯尽心力、

御趣意通急度相守、聊モ緩セノ儀無之様可致精勤候、

六四四八

(朱書)五月十三日 内藏
一先月十三日以 上使松平伊豆守様 (信明) 太守様御国件へノ

御暇御給、御「」ノ通被遊御拝領物、(先格カ) 従大納言様モ上 (家憲)

使松平能登守ヲ以被遊御拝領物、同十五日 御登城、(乗保)

御礼被仰上候処、御懇之被為蒙 上意、御馬被遊御拜

領候段御到来候、

六四四九

(朱書)五月 内藏
一於都殿 (於都カ、青直女)

右、島津兵庫殿嫁二被 仰出置候得共思召有之、御取
返被成候旨、 大御隠居様被 仰出候、

六四五〇

(朱書)五月 内藏
一於都殿

右、島津兵庫殿嫁御取返被成候旨被 仰出候付テハ御

順ノ儀被 仰出迄ノ間、先於都様ト申上、書付等モ此 (都カ)

様文字可相認候、尤、郁ノ字並同唱迄モ名付居候人ハ

可致遠慮候、

六四五一

(朱書)六月 安房
一着座門首へ 寿国寺

右、大龍寺次二被仰付候、

右之通、 大御隠居様 思召ヲ以被仰付候条、此旨寺

社奉行へ申渡、可承向へモ可申渡候、

六四五二

(朱書)六月 安房
一於都殿御事、

郁姫様ト奉称候様被仰付、御順等ノ儀
ハ追テ可仰付旨申来候、

六四五三

(朱書)六月十四日 監物(基前)
一先月三日 近衛左大臣様江戸上御屋敷へ被為入候付、

当日從 御台様(家齊室)以御使桂山但馬守殿、御杉重一組ツ、

鯛一折ツ、 太守様(齊興) 御前様被遊御拜領候段御到来候、
(齊興志)

六四五四

(朱書)六月 監物
一四月十六日増上寺火ノ御番御代松平因幡守様へ被仰出、

御引渡相済候段申来候、

六四五五

(朱書)六月 監物
一赤松造酒

右、御滞府中御家老座へ出席、御用向御家老名前ヲ以

致取扱候様被仰付候、

六四五六

(朱書)六月 監物
一慎又ハ勤方差控候様申渡候節、向後ハ屹卜御咎目被仰

付候者同様申渡候向々ヨリ、時々家内迄モ慎候段申渡、

左候テ、家内罷在候子兄弟等勤方有無ノ儀モ相糺申出

候様、向々支配頭等へ可申渡候、

六四五七

(朱書)六月 監物
一江戸上御屋敷 御座候間後、此節御造次御座之事、

御小座敷、

右之通、以来相唱候様被仰出候旨申来候、

六四五八

(朱書)六月 監物
一福昌寺 白巖

右ハ、住職被 仰付候付、公方様へ御目見等先格之

通被 仰付被下度、左候テ、当秋中出府仕度旨被申出、

願之通被 仰付候条、諸事先例ヲ以被得差凶候儀共ハ

被申出候様寺社奉行へ申渡、可承向へモ可申渡候、

六四五九

(朱書)六月廿四日 監物
一太守様御機嫌能、先月廿五日江戸被遊 御発駕候旨御

到来候、

六四六〇

(朱書)七月 内蔵
一福昌寺

右ハ、当秋出府被仰付置候へトモ、来秋致出府候様被

仰付候、

六四六一

(朱書)七月 安房

一 太守様益御機嫌能、一 昨十日出水へ御光着、御宿賦之

通御通行、来ル十六日晝七ツ苗代川御立、午ノ刻被遊

御着城候旨申来候、

六四六二

(朱書)七月 安房

一 大御前様、此程ヨリ御病氣被遊御座候処、極々御大切

ノ御容体被為人候旨御到来候、

六四六三

(朱書)七月 安房

一 七本御道具・五本御道具ニテ 御出ノ節、熊手ノ御手

道具為御持被遊候得共、豹ノ皮御手道具為御持被遊

候、

一 熊毛一本杉御道具

一 熊毛塗物御道具

一 御長刀

右三本御道具ニテ、 御出ノ節為御持被遊答候、

一 一本御道具ニテ 御出ノ節、(狸力) 狸々皮ノ御道具為御持被

遊候へトモ、大夕、キ十文字御道具御持被遊答候、

右之通、為御持御道具被相替候旨被 仰出候、

六四六四

(朱書)七月廿五日 監物・安房

一 大御前様、御病氣御養生不被為叶、先月廿六日御逝去

被遊候段御到来候、

六四六五

(朱書)七月 安房

一 大御前様御逝去ニ付御忌服左之通、

一 御遠慮一日 太守様

右、御繼母様ニテ御忌十日・御服三十日被遊御受答候

へトモ、日数相過候付、右之通御遠慮、

一 御忌三十日 御服九十日 (齊意) 御隠居様

一 御忌五十日宛 御服十三ヶ月 (齊草女) 操姫様 清姫様 (空百) 姫

様

右、御養被仰出置候付、右之通御忌服被遊御受候、

一 御忌十日 御服三十日 (齊直男、忠剛) 啓之助様

一 御遠慮一日 (齊直女) 閑姫様

右、御嫡母様ニテ御忌十日・御服三十日被遊御受候へ

トモ、七歳御未滿故、右之通御遠慮、

一御遠慮一日 郁姫様(青直女)

右同断ニ付、御忌服ノ儀モ御同様被遊御受筈候得共、

日数相過候付、右之通御遠慮、

右之通、御忌服被遊御受候、

六四六六

(朱書)七月 安房
一郁姫様御事、

(忠懸)

近衛様へ御縁与御内定ニテ、来春女中

立一所ニ御発輿可被為在候間、諸向御手当相掛儀入取

調申出候様可承向へ可申渡候、

六四六七

(朱書)八月 内藏
一門首へ 千眼寺

右、幸善寺次被仰付候、

右之通、(重懸) 大御隠居様思召ヲ以被仰付候条、此旨寺社

奉行へ申渡、可承向へモ可申渡候、

六四六八

(朱書)八月十三日 内藏

一佐竹右京大夫様御事、於御国許御病氣ノ儀御座候処、

御養生不被為叶、御卒去ニ付 太守様御母方御叔父ノ

御続ニテ、御忌十日・御服三十日被遊御受筈候へトモ、
日数相過候付一日御遠慮被遊候、

六四六九

一領國中風俗・言語・容貌其外政事向万端且所帶方差迫

候付、勝手方仕向等ノ儀、先日直ニ(微力) 微細申聞、猶書付

ヲ以申聞通ニ候、自ラ於国元家老・若年寄・大目付其

外役々末々迄モ申聞、御趣意可申渡事ニハ候得共、此

度モ申聞候通、去ル西十月国許へ差越候上、万端ノ儀

委曲申聞、殊勝手方仕向替ノ儀ハ、猶又微細申聞ノ節

ハ得ト合点為致趣ニテ受書等迄モ差出、猶ヲ保書ヲ以

申渡日用右ヲ本ニ致シ何篇可遂精勤、吞込ノ事ナカラ

趣意致齟齬、此節時節柄誠費ヲ不厭役々招呼候次第ニ

テ、又此節申聞御趣意モ此涯ハ得心為致様有之候得共、

程過候へハ緩七相成候儀難計、甚以心痛至極ニ候、夫

故又々招呼再重申聞事候間、此上ハ国元役々屹ト相改、

意味少モ無相違、後代混ト相居候様可心掛候、趣法掛
側用人・勝手方用人・大坂御留守居其外勝手方支配役
場一役一人定練廻日勤申付、用向取扱申付候テハ其一
人ニ不限ノ故、用向不連続ノ意味等ニ心得候向モ可有
之方、右様心得候テハ又趣意違ニ候用向取扱ハ不依一
人其役場ノ事候間、其役場へ召仕候役々ハ一身同体ニ
候故、役場ヲ以連続イタシ候様可有之事ニ候、其一人
ヲ以取扱候へハヤハリ是迄ノ吟味役へ類シ、往々心得
違多候、能々右ノ意味深ク味ヒ可申事ニ候、當時ハ勝
手方へ出席ノ役々其一人ニ掛申付有之候付テハ、間ニ
ハ諸人訴訟事等ニテ諸参会等有之哉モ難計、若哉右様
ノ儀モ於有之ハ吟味役ノ旧俗ニ立帰候節ニ候間、終ニ
ハ鼻肩ノ取扱ニモ有之ニ成立不可然事ニ候、何分諸向
質素ニ実儀ヲ專ニ故、少モ無私不致精勤候テ不叶事候
間、家老・若年寄・大目付能々趣意得心イタシ、無忘
却汲受、後代相居候様朝暮尽心力役々末々迄モ相流候
様一涯可心掛候、此節モ趣意心得違又等閑ノ取計等有
之候テハ決テ不相成候条、又々此等ノ旨申聞事ニ候、

五月

六四七〇

一大御隠居様ヨリ此節御役々被召呼、御領國中風俗・
言語・容貌其外御政事向且御所帯方御差迫ニ付、御勝
手方御仕向等ノ儀、段々被 仰出候趣 太守様被遊御
承知御尤ノ事候条、御家老ヲ初御役々ニ至リ御趣意ノ
程得ト奉承知、朝暮尽心力鎖細ノ儀迄モ立直、永久相
居候様猶更可致精勤旨御沙汰候事、

八月

六四七一

御領國中風俗等ノ儀、前々ヨリ度々被 仰出置、猶又
去ル西十月 公辺へモ御願立ノ趣有之、專御政務ノ一
筋ヲ以 御下国被遊、御ケ条書ヲ以(微力)御出、
御一門方・御家老・若年寄・大目付へ 御直被 仰出
置候 御趣意モ有之、右御ケ条書御役場都テ壁書等ニ
仕置、後代ニ至リ無忘却家ノ書留日用 御趣意迫相守
候様被 仰出置、其通可有之儀ナカラ程過候へハ其涯
ノ様ニモ無之、乍此上等閑打過候テハ被及御老年、御
政務筋御申立ニテ 御下国ノ詮モ無之不可然事候、決

テ等閑ニハ不致筈候ヘトモ、日用右 御趣意ヲ本ニイ
タシ御用筋等取扱、第一御家老深ク 御趣意ヲ味ヒ、

末々申渡候様無之候テハ汲受薄ク可有之候、容貌・言

語等ハ古来ヨリノ風俗不容易事ニテ、ヲノレニ相考候

付立直候期無之、畢竟心掛薄処ヨリ直兼候、是迄ノ言

語ニテ他所向応対等出来可申哉、能々其所致勘弁不通

無之様ニトノ 思召候条、能々心掛候様可致教示候、

第一重御役方家柄ノ面々深加勘弁、末々可致教示事候、

一与中年若者言語・容貌・風俗等ノ儀、大番頭・御小姓

番頭專致教示、時々丁寧ニ申聞、取締向行届候様可致

事候処、間ニハ不頓着ニ打過候者モ有之、折角 御趣

意相守致取扱候者ニ相任、他ノ事ノ様存候者モ有之哉

ニ相聞候、不可然事右体ノ者ハ御家老・大目付氣ヲ付、

時々不差置申出候様被仰付候、其上ニテ屹ト 思召モ

可被為 在候、何分支配頭人ヨリ等閑ニ打過候ヘハ自

然ト末々ニ至リ汲受薄相成事候間能々心掛、右ケ条ヲ

本ニイタシ日用取締^(届カ)行居候様可致精勤候、

一御領國中諸士風俗・言語・容貌等ノ儀ハ専大番頭・御

小姓与番頭受持ノ事故、頭人心得薄候ヘハ一統行居兼^(届カ)、

終ニハ不得心之モノモ有之候、能々頭人ノ心得第一ニ
候、其外末々百姓ニ至リ支配人相心得教育致シ候ヘト
モ、自然ト立直候様可有之事候、

一諸参会・衣服等ノ前々ヨリ毎度被 仰出置候ヘトモ、

緩セノミ相成易キ事ニ候、是又頭人不守ノ処ヨリ末々

ニ至リ行届兼候、譬ハ頭役ノ者綿服相用候ニ、下役ト

シテ絹布相用候テハ不相応ノ儀故不申聞候共、自然立

直可申ハ頭人ノ心得第一ニ候、諸参会モ右ニ準候、頭

人宅ヘ下役招呼候節、酒肴ヲ飾候ヘハヲノツカラ末々

モ其風儀相流事候、頭人ヨリ質素ニ致候得ハ、末々ハ

ヲノレト質素可成事ニ候、自然ト^(空)「」ニ成行候付、不

相応ニ酒食ヲ過酒ニ垂シ及事儀有之候、能々加勘弁頭

人ノ心得第一ニテ、末々ハヲノレト立直候様可有之候、

右之通、此節猶又被 仰出候、支配下末々ノ儀ハ頭人

自分ノ子ヲ養育同前ノ心得ニテ、丁寧令教示候様ニト

ノ御事ニ候、

五月

六四七二

(朱書)八月 内藏

一 郁姫様御儀、(前)近衛左大臣様御息辰君様、御縁与御内

談被為濟候付、先月十八日御願書被差出候、右二付来

春御上京、(重卷)近衛様へ可被為入旨、大御隠居様御沙汰

ノ由申来候、

六四七三

(朱書)八月 内藏

一 郁姫様御縁与ノ儀二付テハ、(齊興)太守様被遊御養女御願書

被差出候段申来候、

六四七四

(朱書)八月 内藏

一 瑞聖寺、(重年)円徳院様、(重卷)正覚院様御靈前へ年頭・盆・歳暮

大御隠居様御直参有之節ハ御付御例御用人・御例役ノ

間、御代参被仰付来候へトモ、以来ハ御家老、御代参

被仰付候、右ノ節、御惣靈様へ、御代拜被仰付候、且

又、(齊直繼室)蓮亭院様へ、御代参勤ノ節モ、御惣靈様へ右同

様、御代拜被仰付候、右外、御惣靈様、御代参ノ儀ハ

大円寺迄ニテ、瑞聖寺、御代参不及候、

一 円徳院様、正覚院様御正忌日並御施餓鬼等付、大御

隠居様御直参無之節ハ是迄ノ通御付御側御用人・御側

役ノ間、御代参被仰付候、

一 前件之通御家老、御代参被仰付候へトモ、時々ノ御心

入思召ヲ以之御内輪ヨリ御付御側御用人・御側役ノ間

御代参被仰付儀モ可有之候、

一 御参詣二付御備物又ハ歳暮付瑞聖寺方丈其外へ高輪御

取計ヲ以被下方有之候、以来表御計被仰付候、

一 盆付徳照殿へ從、大御隠居様高輪大奥御取計ヲ以御灯

炬御進納有之候へトモ、来年盆ヨリ大円寺へ御灯炬御

進納ノ振合ヲ以、御惣方様御相中ヨリ表方御取計ヲ以

御進納被仰付候、

一 御隠居様ヨリ被成向モ右ニ準候様被仰付候、

右之通、以来被仰付候旨、大御隠居様被、仰出候段申

来候、

六四七五

文化十三年子

(朱書)正月 典體一 今度於大奥御出生ノ御女子様、御名、(齊興女)定姫様ト奉称、

御順ノ儀ハ祝姫様御次ニ候条此旨奉承知、定ノ字並同唱迄モ名付居候人ハ可致遠慮候、

六四七六(の1)

一 政務ニ相抱リ吟味事並取調ノ儀、尤、依事々急ニ埒明兼候向モ可有之候得共、掛心頭折角相^(空白)付候様可有之候処、延々ニ成行自然ト相怠、程過候得ハ其儘ニ相過候事ニ至リ甚以不可然候、且国元へ存寄ヲ以吟味事等申越置候処、是以取調致延引候儀共段々有之、兎角等閑ノ姿ニ相見得用向難^(弁カ)、向後ハ即ヨリ取調無怠行届、物毎速ニ差別相分リ候様ニ可取計候、右之趣此節分テ申聞候間能々各申談、以来左様ノ儀無之様可致取計候事、

十二月

家老中へ

(六四七六の2)

御別紙之通、此節從 大御隠居様被 仰出、誠以奉恐入事候条、於諸向モ承知、急度掛心頭取調事等行届、無延引物每涯々相^(空白)付候様可被致取扱候、此旨御役人

限可申渡候、

正月

(町田久視) 監物
(高津久備) 安房
(鎌田政興) 典膳

六四七七

(朱書)正月(監物)
一 英姫様御引越被為在候付テハ兼テ大奥へ御祝儀等申上
来候面々、向後御同様申上候段被仰付候、

六四七八

(朱書)正月十三日(監物)
一 英姫様御儀、旧臘六日 御逗留上屋敷へ被為入、御惣方様御寄合御対顔有之御式事被為在、夫ヨリ高輪御屋敷へ被為入、是又御式事無御滞被為濟、直 御逗留御機嫌能被遊御座候段御到来候、

六四七九

(朱書)正月(監物)
一 英姫様御精進日
毎月十七日 終日
此外 公義御精進日之節々御朝計、

御手前

毎月廿二日 終日

十二日 八日 御朝計

右之通申来候条、可承向々へ可申渡候、

六四八〇

(朱書)正月 監物
一久留島伊予守様御精進日

三日 十八日

右之通申来候条、可承向々へ可申渡候、

六四八一

(朱書)正月 監物
一九鬼和泉守様御精進日

公義御日柄ノ外 毎月廿三日

右之通申来候条、可承向々へ可申渡候、

六四八二

(朱書)正月 監物
一久留島伊予守様

右之奥方様

法雲院様

(音興) 太守様 両御隠居様 御前様 若殿様ヨリ

右ハ、此節御^(両九)敬被仰合候付、以来右之通御通融被為

在候段申来候、

六四八三

(朱書)正月 監物
一九鬼和泉守様

九鬼松翁様

御同氏撰心^(音九)斎様

右ノ奥方様

和泉守様ノ奥方様

太守様 両御隠居様 御前様 若殿様ヨリ

右ハ、此節御兩敬被仰出候付、以来右ノ通御通融被為

在候段申来候、

六四八四

(朱書)正月 監物
一近衛様へ御縁中御使ハ、往来ノ節ハ 太守様ヲ始、

御法ノ様殿文字相用候様トノ御事候ヘトモ、御断被仰

進、^(音宜文)郁姬様御名御口上書別通ニ相認様ト可相認、且

又 誰若様御方へ御同様可相心得旨申来候、

六四八五

(朱書)正月御月付

一勝軍御威御通内へ御安置被成置候ヲ、此節靈符堂近辺

御城山へ御引直被為在候付テハ依時宜磴(炬カ)□ノ火外方ヨ

リ相疑候儀モ難計候間、右之趣御目付ヨリ向々支配頭

等へ寄々可致通達旨可申聞候事、

六四八六

一屋敷中風俗・容貌・言語且取締等ノ儀、毎度申聞通り

二候、猶又緩七ノ様(無之カ)可致事二候、將又此節別紙申聞候

通、稠敷省略筋申付候付テハ乍此上取締向行届候様ニ

可有之候、頃日至リ間ニハ外方参会等相催候向モ有之

哉二間(通カ)□リ候処、当時ハ所帯向等極々難渋ノ砌ニテ、

其心得モ可有之ノ所、外出ニ及度々候ヘハヲツカラ

末々不勘弁ノ儀令致来、終ニハ難渋筋申立、剩他借等

及増長首尾不行届、公訟等ニモ及不外聞ノ至二候、畢

竟不勘弁ノ所ヨリ右様ニ成立、且又折々屋敷内諸所へ

相集酒宴ヲ催シ、殊ニ祝事等ノ節、身分不相応ノ仕向

モ有之、不入及物入時節ヲモ不弁、尚以不可然事二候、

向後屹卜取締申付候、就中支配頭並役儀等トモ相勤候

面々ハ勿論目付役等ハ屋敷中取締ニ相成候職分候条、

聊取違ハ無之筈候ヘトモ、一涯身ヲ相慎見聞可致候、

乍其上不取締ノ儀モ有之候ハ、屹卜存寄有之候付、分

テ稠敷可申渡候、尤、言語容貌等ノ儀、何ケ度モ申聞

候ヘトモ、兎角ニ汲受薄直リ兼候、就中江戸勤役中ハ、

外方応答モ致事候ヘハ人々折角掛心頭、不外分無之様

可心掛候、此上不守ノ者ハ以来江戸並他所勤申付間敷

候条、取違無之様可申付置候、此等ノ趣申聞候事、

十二月

六四八七

此節江戸御屋敷中風俗・容貌・言語且取締等ノ儀トモ、

御別紙之通、(重要)大御隠居様御筆ヲ以被、仰出候条、兼テ江

戸詰等被仰付候面々始一統、仰出ノ趣謹テ可奉承知、於

御当地モ右ノ、御趣意ニ随物每質素ニ心掛、無益ノ参会

等相催、其外祝事等ノ節モ不相応ノ仕向無之様堅相守、

諸事不加勘弁候、且風俗並容貌・言語等ノ儀ハ毎度被

仰出御事候間、屹卜相直候様可致候、就中支配頭又ハ御

役等相勤候面々ハ勿論目付役等ハ夫々身分ヲ相慎可致見

聞候、左候テ、支配有之向ハ支配下末々迄モ前文ノ趣意ヲ以取締向等可申渡候、

正月

(町田久視)

監物

(島津久備)

安房

(鎌田政興)

典膳

六四八八

所帯向不如意ニ付、先年以来度々省略趣法申付、勝手方

仕向等迄モ相替、分テ取締申付候ヘトモ、其詮不相見、

段々入用向相重、当年モ五万両余ノ及不足候由、依之此

節猶又存寄ノ赴有之、(趣カ)産物□金高且江戸統料三都借財利

分等取調申付候所、三ヶ年相並シ、一ヶ年分ノ産物料(口)

惣高凡拾四万両余ニテ、江戸統料△臨時相込、十三万両

余ニ及居候、左候ヘハ三都ノ借財利分ニ毛頭不引足故ヲ

以、年々過分ノ及不足候、去ル巳年江戸定式五万両ニ定

置候処、無拠臨時等相重、右通不引足趣ニ付、此節二万

両相重メ、都合七万両ニテ定式相濟候様イタシ度、右之

七万両ヲ元ニイタシ、向々ヨリ取シラヘ申出候様可取計

候、勿論諸役場等減少ノ儀モ巳年委敷申付候処、頃日ニ

至リ追々故障筋申立、最初ノ趣意ヲ相崩シ何分最通兼候、(罷カ)
此節ハ急度往年相居候様ニ向々ニテ遂吟味候、尤、産物

料十四万両ヲ以三都割合、江戸統料七万両、外二三都借

財利払等イタシ、且京・大坂定式入用等ハ可成長差操ヲ

以相払、成丈余銀相殘候様可取計候、尤、差掛リノ吉凶

等ハ不及是非候ヘトモ、折角定式外入用無之様取計、尤、

右七万両統方月割等且難黙止臨時入用等、例年十一月マ

テニ産物料総立、於大坂一ヶ年分ノ金割可相定候、其上

ニテ不時ノ入用向等可成長致作略候カ、□ナラサル儀ハ

相延、来年ノ金割ニテ可相調候、定式・臨時共二年々屹

ト前年金割相居候様可取計候、右通相究候上八年々不及

難済ニモ且損益モ相見得、取締モ可行届候、勿論於国元

猶又細密遂吟味、定式仕送物並新仕送ノ品共無間断差送、

惣高十四万両ヨリ不引入様極々可遂吟味候、自然新仕送

品ノ内不引合品有之候ハ、(練カ)外品ニ操替、少事モ損益無之

様可取計候、何分此節ノ儀、後年最通屹ト相居候様可取

計候事、

十二月

家老中へ

御所帯向御不如意付、先年以來度々御趣法被為替、分テ御取縮等被仰付候へトモ、其詮不相見得、去年モ五万兩

余ノ被及御不足候付、此節猶又 (重巻) 大御隠居様思召寄ノ趣

有之、御産物料金高御取調ノ上、江戸定式金高五万兩ヲ

二万兩被相重、七万兩ニテ年々被相済度旨ノ赴(趣力)ニテ、

御別紙ノ通此節御筆ヲ以被 仰出候条、此旨謹テ奉承知、

夫々請持ノ御役場ハ勿論其外於諸向モ細密尽吟味、物毎

取縮御損失ノ儀共無之様精々心掛、諸事 御趣意通行届、

此節ノ御趣法後年最通屹(罷力)ト相居候様可取計候、

五月

(町田久徳)
監物

(島津久徳)
安房

(鎌田政興)
典膳

六四九〇

(朱書)正月 典膳
御産物料十四万兩ヲ以三都割合、江戸御統料七万兩余ニ

三都御借財利私、京・大坂御常式御入用等ハ可成丈差操(繰力)

ヲ以相私、余銀相残候様可取計旨、被 仰出候趣ハ別紙

申渡通二候、尤、別紙ノ御趣意ハ御臨時ノ儀マテモ御土

産物料ヲ以取補候様トノ儀ニテハ無之、 御子様方モ追々

御成長被為在御事候へハ御身ノ廻其外ニ付御入増モ有之、

且御慶事等ニ付御臨時ノ儀ハ自ラ御産物料ニテ不引足様

候へトモ、御常式ノ儀ハ是非此節ノ御趣法向ヲ以取補候

様被 思召上候、依之於諸向一涯御取縮向鎖細可達吟味

候、右ニ付テハ是マテ諸御役場勤人数等減方被仰付置候

向モ御用差支候趣申立、連々本ノ通相帰候振合ニテ御規

定相破候端ニ相成甚以不可然、 御役場ニテハ纔計ノ御

出方ノ様ニ候へトモ、諸向ニ行渡候テハ過分ノ及御入増

事候付、其所能々致勤并故障筋不申立向々互ノ由諸差操(繰力)

相動候様被仰付候、且又御持扶米拝借等ノ儀、此涯一切

被仰付間敷候、夫共及飢渴候程ノ者へハ自ラ御吟味モ可

有之事候へトモ、色々弁ヲ付拝借等申出候へハ難被黙止

被仰付儀モ有之事候付、於諸向右ノ心得ニテ鎖細取調行

届候へハ此節ノ御趣法向ヲ以御差操可相調旨、被 思召

候旨、訊テ御沙汰被為在候条、別紙 仰出承知ノ御役々

へ不洩様可申渡候、

六四九一

(朱書)正月 監物

一英姫様、御逗留中何篇 御前様被成向、御同様二有之

候様 神田橋様被仰進、御登 城ノ儀ハ一橋御構ニテ

御取計有之候旨申来候、

六四九二

(朱書)正月 監物

一諸人内用向等付諸郷へ差越候書状、是マテ宿次御用使

ヨリ届方相頼致用弁来候処、御用封郷士持被仰付候以

後相滞候哉ニ相聞、不勘弁ノ至候間、以来是迄ノ通相

届候様可申渡事、

六四九三

(朱書)正月 監物・安房

一諸郷我領ヨリ宿次御用封郷士並家来持ノ儀ニ付難相弁

夫々申出趣無拗筋合相心得候付、以来何ソニ付郷士勤

向等有之、差支候砌ハ助夫召仕、諸事は迄ノ振合ヲ以

取扱候様申付候、我領ノ儀モ右ニ準可取計旨可申渡候、

六四九四

(朱書)正月 典膳

一大奥新御殿

右ハ、此節 大奥へ 英姫様御部屋御造立有之、右ノ

通被相唱候旨申来候、

六四九五

(朱書)三月廿三日 安房

一先月廿七日 太守様以宿次御奉書御鷹之鶴御拝領、去

ル九日於播州姫路駅被遊御頂戴候段御到来候、

六四九六

(朱書)三月廿四日 安房

一隨姫様御事、先月廿一日島津淡路守様御嫡子筑後守殿

へ御^(精力)納御婚姻被為整候段御到来候、

六四九七

(朱書)三月 監物・安房・典膳

一御所帯方御難渋ニ付、追々被 仰出趣有之、殊更去ル

酉年 御下向ノ砌、於大坂銀主中へ 御直ニ 御沙汰

被為 在候 御趣意モ有之候処、去年中大坂表御趣法

向相崩候趣モ有之、甚御氣ノ毒被 思召上候、依之当

奉大坂へ被遊 御越、彼表万端ノ仕向 御直ニ可被遊

御見聞モ、且ハ銀主中へ取計向旁ノ儀トモ 御直被

仰聞度旨被 思召上、御内々御旅行ノ御手当モ被仰付候、然処右近ハ初御役々御旅行御内沙汰ノ儀、御内々奉承知、畢竟 御趣意不相立トノ御事ニテ、御旅行ノ被為及 御沙汰ニモ候御事ト奉恐察候、諸御役々罷在ナカラ取揃モ不相調、 上様へ御心勞ヲ奉掛上候、相當誠恐懼仕候御儀、殊 御老年様ノ事ニモ被為入候処、旁以奉恐入候御儀、其上脇々響合ニモ相掛事候付、彼是二付今度 御越ノ儀ハ何卒御用捨被遊被下度旨、御内々願出趣有之、尤モ被 思召上、右二付テハ 御趣意相立往々最通候様、於諸向急度相改可致取捌候、左候テ、此節御旅行ノ儀ハ弥願通被遊御延引、為御名代(川上久秀)右近可被差越トノ御事二候、若又以後 御直ニ不被遊御越候テ不被為叶御事モ候ハ、其節御上坂可被為 在候、此旨右近初諸役々へ申聞七置候様、 大御隠居様被 仰出候段申来候、此旨御役人限奉承知候様可申渡候、

六四九八

(朱書)四月 監物)
一付郷士ノ儀、何ノ何某付郷士何方預リト是マテ書付等

ニモ認来候ヘトモ、以来ハ不及其儀、其預リ郷何方郷士ト可相認候、勿論付郷士ノ格式ヲ被召上候テハ無之様是迄ノ格式通ニテ候間、此所致取違間敷候、尤、上古由諸有之夫々ノ家へ為被召付置積故、其家ノ家来同(緒力)前致隨身来候ハ、是迄ノ通無忘却可致隨身旨被仰付候、此旨向々へ可申渡候、

六四九九

(朱書)四月 監物)
一火事場見舞ノ儀、近火ノ節鍛付候白塗笠モ被相用、鍛色合ハ紅ヲ除、其外ハ好ニ応シ被相用筈候旨申来候、

六五〇〇

(朱書)四月 監物)
一盛姫若様 モリ(君カ) 乙五郎様御事、ワト(家齊男) 御台様御養被仰出候段、(家齊室、茂姫) 従 公義被仰渡候旨申来候、依之盛・乙ノ字同唱ノ名ハ可致遠慮候、

六五〇一

(朱書)四月 監物)
一太守様御機嫌能、去ル朔日被遊 御参着候旨御到来候、

六五〇二

(朱書)四月 監物
一去年十二月三日高輪於大奥御誕生ノ御女子様、御名

定姫様ト奉称候、御順ノ儀ハ種姫様御次ニ候条、此旨

可奉承知候、

六五〇三

(朱書)四月 監物
一郁姫様御事、去ル十五日 近衛様へ御入輿被為在、御

式向等無御滞被濟、且同日彼御殿於テ郁君様ト若号被

進候段御到来候、

六五〇四

(朱書)五月 監物
一種子島藏人

右ハ、亡父佐渡儀万石以上ノ儀故、格別ノ 思召ヲ以、

其身計月次御礼等ノ節ハ独礼ノ面々御礼相濟候テ、佐

渡一人御書院御敷居内一畳目ニテ御礼申上、其節奏者

番名披露可仕、謁ノ儀ハ於松ノ間独礼一同謁相濟候上

引次相謁、登城ノ節ハ松ノ間相招候様被仰付置、国名

相用候儀モ御免有之候、此節藏人儀モ 大御隠居様厚

思召ヲ以佐渡同様被仰付候、

右ノ通、向々へ可致通達候、

六五〇五

(朱書)五月十日 監物
一島津長門守殿昨九日死去ニ付、 大御隠居様御忌三日・

御服七日御掛被遊候、

六五〇六

(朱書)五月 監物
一去年於 大奥御出生ノ 定姫様、御名文字御差合ニ付、

智姫様ト奉称候付智ノ字並同唱迄モ名付居候人ハ可致

遠慮候、

六五〇七

(朱書)五月十三日 典膳
一太守様御参府付、先月十六日以上使松平伊豆守様御懇

ノ被為蒙 上意、同十八日御登城、御参府ノ御礼被仰

上候処、御懇ノ被為蒙 上意御直御請被仰上、諸事先

格ノ通被為濟候段御到来候、

六五〇八

一今度御転任御兼任被為濟候為御祝儀、先月十六日（朱書）五月 典膳公

方様（家應）右大將様ヨリ以 上使、太守様（秀興） 両御隠居様御
拜領物被遊候段御到来候、

六五〇九

一今暁於大奥（朱書）五月 安房 村田伊左衛門漆書五月廿九日也
御男子様御出生被為 在、御内分ノ御取

扱二候条、此旨可承御役々へ可申聞置候、

六五一〇

一此度於大奥（朱書）六月四日 監物・安房 御男子様御出生被為 在、先御内分ノ御

取扱被為入候処、俄二 御機嫌不被遊 御勝、御養生
無御叶、昨夜亥下刻被遊御天亡候、

六五一一

一御天亡ノ御男子様御法名 蓮珠院殿夢幻実如大禪童子（朱書）六月 安房

右之通奉称候条、此旨奉承知候様可承御役人限可申渡
候、

六五二一

一飯隈山蓮光院義盤（朱書）六月 監物

右ハ、此節権少僧 直叙法眼被仰付候条御礼申上度、
左候テ、年頭其外屹立候節着座供廻等ノ儀願申出趣有

之、依之右官成御礼申上候節ハ一束一本進上ニテ着座
被仰付、年頭其外屹立候節モ高祖父同様是又着座被仰
付候、左候テ、官職相当ノ供廻召列候儀モ被成御免候
条、上リ口足輕下座等ノ儀ハ是迄ノ通可相心得候、

六五二二

一太守様御儀、四月廿四日御用ノ段前日御奉書御到来二（朱書）六月十五日 監物・安房・典膳

テ御登城被遊候処、濃州・勢州・尾州・東海道筋川々
御普請御用被為蒙 仰候段御到来候、

六五二四

一御用金七万七千六百六十四兩二步永百七十二文（朱書）六月 監物・安房・典膳

右ハ、此度濃州・勢州・尾州・東海道筋川々御普請御
用被為蒙 仰候段ハ別紙ヲ以申渡通候、然ハ御普請御
仕立相濟御入用御出金御高割ヲ以右之通被仰付候、左

候テ、御上納方ノ儀ハ御支座次第御伺有之候様、先月
四日被仰渡候段申来候、

六五二五

(朱書)六月(安房)
一御小姓与番頭

右ハ、此節御役座別段御取建成就有之候付、明廿六日
ヨリ右御役座へ可被精勤候、依之当番頭兼務ノ儀ハ被
成御免、御小姓与番頭一向ノ勤被仰付候条、猶又御取
締等一涯行届候様心懸可被致精勤候、左候テ、御代参
勤ノ儀ハ是マテノ通被仰付置候、此旨申渡、可承向へ
モ可申渡候、

但、諸御役場同様退出可有之候、

六五二六

(朱書)七月廿三日(監物)
一有馬肥前守様御息女於章様、先月十八日被成御夭亡候、

六五二七

(朱書)七月(監物)
(齊真女)

一郁君様御事、青木休右衛門娘琴腹ニ被遊御誕生候ヲ、
林権太夫娘伊尾腹ニ御誕生ノ筋、是迄御取扱被為 在

候へトモ、以来ハ内実ノ通右琴御実母被仰付候、

六五二八

(朱書)八月十一日(右近)
(齊真女)

一智姫様御病氣被成御座候処、御養生無御叶、昨夜戌下
刻被遊御夭亡候、

六五二九

(朱書)八月(右近)
一智姫様御法名

智桂院殿妙雲幻香大禪童女

右之通奉称候、

六五三〇

(朱書)八月(典膳)

一諸所下代出物蔵役人名前替ノ儀、依訳ハ春代ノ正月限、

秋代ハ五月限定置候へトモ、春代ノ儀ハ是迄之通ニテ、

秋代ノ儀ハ四月限申付候、其外ノ儀ハ是迄ノ通、右月

限相過候ハ、何様無抛願出候ハ、取揚間敷候、役場

等ニテ相通跡差支候向ハ、月限相過候テモ頭人支配頭

ヨリ依申分ハ名前替可申付候、尤、差掛病氣又ハ無抛

訳合有之、右勤方難叶者ハ其節ノ吟味次第名前替可申

付旨申渡置候、然処限月相過首尾掛等ニテ勤場難加様

申出向多々有之、別テ及涉難候、首尾掛等ノ儀ハ前以
其程合モ可有之事候付、向後御役場差支難迦向モ都テ
限月通屹無延引名面替申出候様申付候条、緩セノ儀有
之間敷候、

六五二一

(朱書)八月 右近
一道之島詰役トシテ渡海ノ面々、依願親類列越候儀段々

有之、島中迷惑筋ニモ相掛候間得有之候間、向後親類
列越候儀ハ不相成候、乍然実々無拗訊合付テハ可吟味
候、

六五二二

(朱書)八月 右近・安房・典膳
一重御役又ハ奥向ノ面々、出入等ノ儀堅被定置候処、連々

緩セノ向ニ成立、至頃日奥・表ノ無差別相交候向モ有
之哉ニ被 聞召通、去年十二月分テ被 仰出、其段申
渡置候付テハ其心得薄、今以不守ノ者モ有之哉ニ相聞
得、御用向ニ付テハヲノツカラ致弁別候様可有之候処、
右次第甚以心得違ノ事候、若此上被 聞召通候様モ候
ハ、不差置屹可被及 御沙汰候条、右ノ趣奉承知、聊

取違無之様可相慎旨、猶又此節於江戸被仰出候段申来
候、

六五二三

(朱書)八月 安房(齊興男)
一六月三日 蓮珠院様

右御正忌日、御精日被相定候、
(進脱カ)

六五二四

(朱書)閏八月 安房
一江戸御鳥方ノ儀、以来御庭方ト相唱、御鳥方ノ名目被

相除候旨被仰出候段申来候、

六五二五

(朱書)閏八月 安房
一野装束ノ事ヲ野支度ト相唱候モ有之由候間、已来ハ屹

ト野装束ト相唱候様 御沙汰被為 在候旨申来候、

六五二六

(朱書)閏八月廿六日 左門殿ヨリ被仰渡候由ニテ御目付ヨリ達
一御役人又ハ何ソニ付向々致廻礼候節、口上書上包御用

紙似寄候モ有之、甚以紛敷不都合ノ事候条、以来美濃
紙・百田紙等ヲ以上包相用、御用紙ニ不相紛様可有之

候、

一 御役場御用紙ノ品位夫々被究置事候間、無心得違吃相

守、且御用紙目用ニ召仕候儀、曾テ有之間敷候、

右、御役人限へ可申渡候事、

六五二七

一 江戸御鳥方足輕ノ儀、右名目被相除、以来御庭方付役

卜相唱候様被仰付候、

六五二八

一 江戸詰御用人ノ儀、此節御取縮ニ付一往御引取ニテ、

当分ノ通御側御用人・御側役ヨリ致兼務相詰候様被仰

付候、

一 御使番当詰三人ノ内一人減少

但、差支候節ハ御記録奉行ヨリ差寄相勤候様被仰付

候、

一 御広敷番ノ頭九人ノ内一人減少

右ハ、此節御取縮ニ付一往右之通減少被仰付候、

六五二九

一 高奉行 物奉行へ

当所出物藏・金藏・進物藏ノ儀ハ高奉行・物奉行支配

被仰付置、諸郷藏々(空白)相替金銀米錢其外数多ノ入払

有之、御所帯方第一ノ御藏ノ事候付、右両御役為本締

支配ノ御藏々へ一人ツ、日勤被仰付候、左候テ、是聞

役動向ニ不相抱別段手前二帳面相調、毎日ノ入払金銀

米錢等ヲ見聞役惣総目印ニ相成候座印相拵、入払帳へ

致割印、多少ハ有之筈候へトモ、其節数多ノ節ハ大体

何程位ノ石数等相究、払出米錢過不足月末御趣法方へ

届可申出候、取縮向ノ儀夫々詰見聞役申談、藏役方且

見聞役手控ハ奉行帳面時々可引合候、当分ハ藏役人等

ヨリ差引書ヲ以致算面申出来候付、以来ハ両御役御藏

元へ出張ノ奉行現ニ諸入払等承届、嚴重取計候様被仰

付候条、取縮向ニ付テハ追々吟味イタシ可申出候、

一金藏・米藏御国内当分ノ日記所余程相隔居候付、物奉

行出張ニ付テハ右両御藏見通シ等ノ場所へ詰所被相建

双方御用兼帯被仰付候場所等ノ儀ハ御作事奉行・物奉

行立会吟味可申出候、

一 右之通高奉行・物奉行出張ニ付テハ書役ノ儀モ出張不致候テ不叶事候間、是又致吟味可申出候、尤、両御役場共ニ奉行書役ノ儀ハ一ヶ月代リ被仰付候、

一 諸上納手形引付藏役人ヨリノ請取書、以来員数書ノ文字ニ朱印ヲ押、次印モ同断ニテ、見聞役証印ハ右員数書ヨリ内へ押調候様被仰付候、

但、右印判等無之請取ハ以後勘定相逐候節差廻間敷候、

一 右藏々役人ノ儀、付属差留諸座書役ノ内へ吟味ノ上可申付、左候テ、勘定方首尾能相仕廻候ハ、帰役可申付候、其内金藏ノ儀首尾能相勤候者〔空白〕助等ハ定役ニ準、帰役可申付候、其支配ノ書役等へハ不申付候、

一金藏ノ役ハ余藏〔空白〕格別人弘多、勘定方モ及数十ヶ月〔空白〕一往試藏役人へ是迄ノ御扶持米へ二石相重、都合六石可被下候、左候テ、月勘定ノ儀ヲ是迄ノ通ニテ次渡後十二ヶ月ニ相究、其内ハ御扶持米一人二一石八斗ツ、被下、是迄勘定内日数被下來候御扶持米ハ不被下、右手伝共ノ儀ハ当分之通ニテ、勘定中マテハ一人二米九斗ツ、可被下候、

一金藏役人首尾能相勤、勘定相逐無滞候者へ御心付ノ儀ハ是迄ノ通申付候、

一 右藏役人代リ合ノ儀ハ当分相勤候者代リ合ノ節ヨリ前条ノ通可申付候、

右之通、此節御仕向被相替候条、何篇嚴重可致取扱候、

六五三〇

〔朱書〕十月 監物
一 有馬肥前守様奥方様御病氣被成御座候処、御養生無御

叶、閏八月廿九日被成御卒去候、

六五三一

〔朱書〕十月八日 監物

一 橋民部卿様御事、此間ヨリ御所勞被為入候処、漸々

御差重、先月四日被遊御逝去候、〔斎重〕御隠居様御從弟ノ

御統ニテ御忌三日・御服七日被遊御請候、

右同断ニ付、〔斎敦次〕英姫様御定式ノ御忌服被遊御請候、

六五三二

〔朱書〕十月 監物
一 嚴恭院參議從三位 経真明誼大居士

徳川民部卿様御法号別紙之通申来候、

六五三三

(朱書)十月 監物
一大目付以上

右ハ、御城勤又ハ 御三家様・御三卿様方へ罷上候節

ハ時々御趣法掛御用人へ申出候上駕籠人足可被下候、

尤、本行列ニテ六人駕籠、半行列ノ節ハ四人駕籠、右

外御親類様方等へ屹卜立御使者等相勤候節モ同類可被

下候、自分參上ノ砌ハ可為自分駕籠候、

御側役以上

右同断ノ節ハ前文同様ノ向ヲ以駕籠人足可被下候、尤、

本行ノ節ハ四人駕籠、半行列ニハ三人駕籠、其外ハ前

条同断、右以下ノ御役々へハ御借馬、乍然老体等ニテ

馬上不自由ノ向ハ時々願ノ依訳ハ駕籠可被下候、

右之通被仰付候旨申来候、

六五三四

(朱書)十月 監物
一御勝手方御家老

右、一人ツ、御勝手方へ出席、月番承候様被仰付候、

赤松造酒

大目付

右、御勝手方へ一人ツ、繰廻、一ヶ月ツ、相詰、御用

取扱ハ不被仰付、品ニヨリ相談等承候様卜ノ御事ニ候、

乍然心付候儀ハヲノツカラ可被申出旨被仰付、

六五三五

(朱書)十月 右近、典膳

一御勝手方・御赴法方掛御用人ノ内、諸家内用頼ノ儀、
以来被差留候、

一米賦ノ儀ハ御勝手方御用人請持ニ候ヘトモ、上野善兵

衛・堀(幸白)衛儀モヲノツカラ可致吟味候、

一諸向出入沙汰ニ付テハ兼テ被定置候通弥以可相守候、

兎角下々町人共ニ至リ候テハ取違族モ可有之哉ニ候間、

屹卜不相成候、尤、御赴法方勤ノ向へモ出入沙汰同断

ニ候、

一掛リ御役々・目付役並掛リ町役共儀、御用ノ依向ハ出

入モ可有之儀ニ候、

右之通被仰付候、

六五三六

(朱書)十月 監物)

一種姫様御事、戸田采女正様御嫡子新次郎様へ御縁約被為在、先月廿二日御互ノ御家老御使ヲ以御引結、則日御双方御祝物御取替被為濟、御願書近々御進達ノ筈候旨御到来候、

六五三七

(朱書)十月 監物)

一重陽青物致着用候儀、以来持合候者ハ勝手次第相用候様被仰付候旨申来候、

六五三八

(朱書)十一月 監物)

一來丑年就 御下国、三道中御行列立ノ内御弓台一肩・御馬一疋被相減、別紙ノ通被相替候旨申来候書略ス、

六五三九

(朱書)十一月 安房)

一千眼寺末寺了性寺
右寺膳等同末寺延命院被仰付候、

六五四〇

(朱書)十二月 右近(桂力、齊興女、智姫)

一八月十日 智□院様
右御正忌日、御精進日被相建候、

六五四一

(朱書)十二月 安房)

一淨岸院様 貞嶽院様 靈龍院様 瑞仙院様 智光院様
(兼盛徳室、竹徳) (忠入) (吉貞室) (兼盛室) (重年徳室)
玉貌院様 芳蓮院様
(齊直室) (右九)
大御七靈様、 両御隠居様ヨリ月次其外御代参ノ儀ハ
以来 太守様ヨリノ御代参序時々御家老御代拜被仰付候、

一正覚院様

(重年室)

右へ 大御隠居様ヨリノ御代参ハ是迄ノ通ニテ、 御
隠居様ヨリハ 太守様ヨリノ御代参序御家老御代拜被

一慈照院様

(重家室)

右へ 御隠居様ヨリノ御代参ハ是迄ノ通ニテ、 大御
隠居様ヨリハ 太守様ヨリノ御代参序御家老御代拜被

仰付候、
一右外 御靈々様へ御参詣御代参等ノ儀ハ都テ是迄ノ通

被仰付候、

右之通、 両御隠居様ヨリノ御代參被相替候、

六五四二

(朱書)十二月 安房

一 蓮亭院様へ年中 御參詣御代拜等、以来左ノ通被仰付候、

一 御正忌日 御精進

一 御年回・御正忌日・盆並年頭・歳暮・御発駕前 御着

城脇、正・五・九月中 御參詣、 御出府ノ節ハ都テ

御家老 御代參、

一月次御正忌日 御代參御家老

一 両御隠居様ヨリ 御代參ノ儀ハ 太守様ヨリノ 御代

參序時々御代拜被仰付候、

右ノ通被仰付候、

六五四三

(朱書)十二月 安房

十一月朔日 八月五日 三月廿日 二月二日

一 貞嶽院様 一 靈龍院様 一 瑞仙院様

智光院様 一 玉貌院様

但、閏月有之節
八閏二月二日

右御五靈様 御參詣御代參等、以来左ノ通被相究候、

一 御正忌日 御精進日

一 御年回・御正忌日・盆並年頭・歳暮・御発駕前、正・

五・九月中 御參詣、 御在府ノ節ハ都テ御家老 御

代參、

一月次御忌日 御代參御家老

一 右外御靈々様へ 御參詣御代參ノ儀ハ都テ是迄ノ通被

仰付候、

右之通被仰付候、

六五四四

(朱書)十二月 安房

一 六月廿三日 蓮亭院様御正忌日二付、御精進日被相建

候、左候テ、御正忌日計御仕置者相除、其外ノ儀無御

構、尤、月次御忌日ハ都テ無御構候、

右之通被仰付候、

六五四五

(朱書)十二月 右近

一 島津安房殿御二女

右思召有之、 大御隠居様御養被成、御仕廻次第 御

本丸大奥へ御上り被成、御育立候様御出府等ノ儀ハ追テ 御沙汰可被為在旨被仰出候、

六五四六

(朱書)十二月 右近

一島津安房殿御二女 於並殿

右思召有之、(重書)大御隠居様御養女被 仰出候付テハ、御順等ノ儀ハ被 仰出迄ノ間、先於並様卜申上、書付等ニモ此様文字可相認候、尤、並ノ字並同唱迄モ名付居候人ハ可致遠慮候、

六五四七

(朱書)十二月十三日 監物

一若殿様御輕被遊御疱瘡、先月十五日御酒湯被為召、追々御順快被遊候段御到来候、

六五四八

(朱書)十二月 右近

一於並様御事、来ル廿二日 御本丸へ御引越ノ筈候、

六五四九

文化十四年丁丑

(朱書)正月九日 監物・安房
一太守様旧臘朔日被為 召 御登御候処、(座脱カ)今般川々御普請御用被遊御勤候付 御目見、御懇ノ被為蒙 上意、御時服五十被遊御拝領候段御到来候、

六五五〇

(朱書)正月 監物・安房

一姫様御事、采女正様御嫡子戸田新二郎様へ御縁与御願ノ通被仰渡候旨御到来候、

六五五一

(朱書)正月 安房

一姫様御事、采女正様御嫡子戸田新二郎様へ御縁与御願ノ通被仰渡候付、新二郎様御名同名ノ者ハ遠慮可仕候、

六五五二

(朱書)正月 安房

一大御隠居様御拝領ノ御鷹御下屋敷へ御据越ノ儀、(重書)神田橋御屋形マテ被御願置候処、此節御勝手次第有之候様被遊、右据越ノ儀ハ格別重キ御事ニテ 大御隠居(座脱カ)へ御限御願濟被為在候段御到来候、

六五五三

(朱書)二月 安房
一 寿国寺末寺 龍吟寺 玉蔵院 西徳寺

右ハ、寿国寺 龜岳ヨリ 御目見寺被仰付被下度旨願

ノ趣有之、是迄末寺ノ内 御目見寺無之、 御直參等

ノ節、右三ヶ寺繰廻 御案内相勤、 御目通二モ罷出

儀ニ候間、右ノ御月次ヲ以向後 御目見寺被仰付候、

左候テ、進上物等ノ儀ハ同格並被仰付候、

右之通可被申渡旨寺社奉行へ申渡、可承向へモ可申渡

候、

六五五四

(朱書)三月 安房
一 於並様御事、 大御隠居様ヨリ 立姫様卜御名被進候

付、立ノ字並同唱迄モ名付居候人ハ可致遠慮候、

六五五五

(朱書)四月廿日 監物(齊興堂)
一 先月十七日 御前様御安産、 御三男様御出生、御名

壮之介様卜奉称、同十八日 御三男様ノ御届被為濟候

段御到来候、

六五五六

(朱書)四月 監物
一 近衛中将様御事、先月七日從三位中将被為蒙 宣下候

段申来候、

但、向後ハ三位中将様卜奉称候、

六五五七

(朱書)四月 監物
一 立姫様御事、(忠勤) 壹岐守様御養子水野伊織様へ御縁約ノ御

内談被為在、先月十四日御互ニ御家老御使ヲ以御引結

相濟、即日御双方御祝物御取替被為濟、表向御願書被

差出候段御到来候、

六五五八

(朱書)四月 監物
一 先月十七日 御前様御安産、 御三男様御出生、御

名壮之介様卜奉称、御順ノ儀ハ 祝姫様御次被仰出候

条此旨奉承知、壮ノ字並同唱迄モ名付居候人ハ可致遠

慮候、

六五五九

(朱書)四月 監物
一 屏子御門ノ事、(イナウ) 塀重御門、

右之通唱被相替候旨申来候、

六五六〇

(朱書)四月 監物)

一立姫様御事、

(忠愍)

壹岐守様御養子水野伊織様へ御縁与且

彼御方様へ御引取置、追テ御婚姻被相整度御願之通被

仰渡候旨御到来候、

六五六一

(朱書)五月 安房)

一壯之介様御事、

(音興男)

諸之介様卜奉称候付、諸ノ字並同唱

迄モ名付居候人ハ可致遠慮、左候テ、右通御名替ニ付

テハ最早壯ノ字不及遠慮候、

六五六二

(朱書)五月十三日 安房)

一太守様御機嫌能、先月廿一日江戸被遊御発駕候旨御到

来候、

六五六三

(朱書)五月十三日 安房)

一先月十三日以 上使酒井若狭守様 太守様御国許へノ

御暇御給、御先格ノ通被遊御拝領物、從 右大将様モ

上使松平能登守様ヲ以被遊御拝領物、同十五日 御登

城、御礼被仰上候処、御懇之被為蒙 上意、御馬被遊

御拝領候段御到来候、

六五六四

(朱書)六月 監物・安房)

一太守様来ル六日被遊御着城筈候、

六五六五

(朱書)六月 監物)

一大夕、キ十文字

右ハ、三本御道具ノ内熊毛塗柄御道具為御持可被遊旨

被 仰出置候へトモ被相替、右十文字ノ御道具為御持

被遊筈候、

六五六六

(朱書)六月 監物)

一立姫様御事、 水野様御方へ被為 入候儀、来三月頃

ノ御賦ニ候、左候テ、来春女中立ノ節一諸ニ御手細ニ

テ御出府被為 在筈候条、御行列其外諸御手当向ノ儀

致吟味申出候様可申渡候、

六五六七

(朱書)六月 監物
一式日並不時御用ノ節々、江戸交代ノ書役・小役人等へ

中急又ハ急申付差立候儀モ有之候へトモ、以来江戸御
当地共飛脚差立候様被仰付候、

但、御用ノ向ニ依テハ書役等へ中急等申付儀モ可有
之候、

六五六八

(朱書)六月 典膳
一江戸・京・大坂御留守居 御船奉行 御使番 御右筆

頭 御記録奉行 長崎御付人 道之島代官付役ノ儀、

公迎へ及御届候節ハ在番添役ト被書出候へトモ、以来
ハ添役ノ文字相除、在番ト相認候様被仰付候、依之他

所向へ書出候節モ都テ右振合可相心得候、

六五六九

(朱書)六月 監物
一淑姫君様御法号 (准力) 清境院様ト奉称候事、

右之通、從 公義被仰渡候段申来候、

六五七〇

一去ル西年 公迎へ申立候趣有之、乍老年国元へ差越、

着涯ヨリ万事ヲ差置存寄ノ一条、一門方ヲ始重役ノ面々
へ得ト申聞、其趣意諸役々へ巨細申渡候得共、何分其

節計ニテ兎角不汲受、其後態々役々招呼段々申聞趣有
之候へトモ、今以詮立候訳モ無之、去年上野善兵衛・

堀(殿力)衛両人へモ委細申含差遣候へトモ、何分不容易儀

ニテ、中ニモ所帯向ノ儀、今ニ極難渋ノ時節、急々可

取直期モ未相見得、仕向ヲモ相替候へトモ、存寄通不

行届、全取扱候役々不頓着ニテ、(趣力)赴意不掛心頭所ヨリ

其詮不相見得、依取計ハ何程ノ事候共、是非其趣意不

相立候テ不叶ノ処ニ、決テ左様ノ振合ニ無之候、此已

後ノ儀ハ万事無油断念頃ニ取扱精勤可致候、左候テ、

勝手向取直候ハ、自ラ末々マテ物毎緩セニ成立、永久

可令安堵候、将又是迄諸役相勤候者共、自己ノ勝手ヲ

存込候テハ色々ノ手段ヲ廻シ、或ハ利欲ニ迷候テ夫々

役儀ノ差別ヲモ不弁、面皮恥辱ヲモ不顧、制法ヲ破候

族モ有之、誠ニ此等ハ世外ト乍申、猶此上共ニ折角入

念急度相守油断有之間敷候、右ノ趣意是迄申聞候上ナ

カラ、公辺へモ専申^(立力)□、速国迄モ差越令下知候へトモ、其詮無之候テハ、公辺へ対シ面皮ニモ抱^(拘力)り何分不相濟、勿論先年介柄^(助力)ノ儀相断候へトモ、難黙止不得止事、国家ノ為ヲ存、乍極老再令介助候ニ付テハ猶又不依大小下知ノ趣相弁取扱可致候、尤、依生質ハ無是非不行届者モ可有之候へトモ、先ツ一体ノ仕向甚等閑ノ趣ニ相聞得、幾度申聞候テモ不最通、畢竟差^(圖力)□ノ不行届筋ニ当リ、先祖へ対シ候テモ無申訳次第^(善力)其令心配候、右様ノ趣此節マテハ委曲申聞候へハ、何レトモ其詮不相立候上ハ介助相断引取候ヨリ外思慮無之候、此趣国元へ申越、於江戸モ一統申渡同様可相心得候、此旨申聞候、

六月
(新納入命
内藏へ)

六五七

一今度 ^(重巻)大御隠居様以御自筆被 仰出趣、去酉年 公辺へ被仰立趣有之、 御下向ノ節モ 思召ノ程一門方並 重役共へ得卜被仰聞趣夫々申渡候へトモ、其節迄ニテ

兎角汲受薄、其後モ度々被 仰出趣有之候へトモ、何^(罷力)レ最通兼甚被遊御心配候間、此度迄ハ委曲被仰聞、乍此上其詮不相立候ハ、御介助モ御断被遊外無之トノ趣細々被 仰出、誠恐入次第二候、万一御断被 仰下儀ニモ相成候テハ何トモ恐入儀ニテ甚令心痛候、乍御老年色々被尽 御心苦御介助被成下候御事、誠不輕難有次第難申尽儀ニ候間、追々被仰出候御旨趣、一門方ヲ始重役ノ面々ハ不及申、諸役々末々マテモ得卜汲受、往々最通被遊 御安慮候様、面々可相心得旨申渡、就中各儀ハ昼夜共油断ナク尽心力、急度其詮相立候様可令精勤候、

七月

家老中へ

六五七

^(朱書)七月 右近
一諸所下代出物藏役人名前替ノ儀、春代ハ正月限、秋代ハ四月限定置候段ハ去子八月委細申渡置ニ候処、限月相過後段々御役場故障等ノ訳ヲ以名前替ノ儀申出候向モ有之、不都合ノ事候間、猶又奉行・頭人ヨリ遂吟

味、格別難黙止御用又ハ病氣等ノ外取揚間敷候、

六五七四

(朱書)八月、右近

一和姫君様

カス(家齊女)
ヨツ(家齊女)

一溶姫君様

(家齊男、齊臣)

御台様御養被

仰出候段、從 公義

被仰渡候旨申来候、依之右唱ノ名付居候モノハ可致遠

慮候、

六五七三

(朱書)八月、典膳

一種子米拝借ノ儀、高一石二付三升ツ、相渡置、其年取

納ノ節三升相重致上納御規ニ候、然処種子米拝借申付

候節ハ以来諸郷ノ内何方御蔵入高何程ニ付、種子米何

程被仰付候旨、与々行立ニテ郡奉行ヨリ即御代官方へ

掛合置、御代官方ハ証文ニ引合、下代方へ切免ヲ以重

上納申渡、惣皆済ノ節下代庄屋致決算候様申付候、給

地ハ領主ヨリ種子米相渡候ハ、持高門浮免相記、種子

米何程相渡候付、御法之通取納被仰付度旨郡方へ可申

出候、左候テ、郡奉行ヨリ右ノ郷役々方へ申渡置、領

主方へ皆済ノ節相渡置候種子米重取納ニテ致決算候儀

申付候、種子米拝借上納ノ儀ハ御年貢同様ノ儀ニテ格

別成事候処、近年百姓共外々拝借米ノ向ニ相心得、其

上旁ヲ申立訴訟向(空白)古未進ニ相成、年々纒計ツ、致内

上納不埒ノ仕形ニ候条、請持ノ御役場ニテ無間違様可

致取扱候、

六五七五

(朱書)九月、安房

右寺格着座門首被仰付、席順福昌寺次、

右之通、大御隠居様思召ヲ以被仰付候、

一不断光院

右御靈屋並本堂鎮守春日社大門表通、

右ノ分以来御物御修甫被仰付候、

一書院ヨリ玄喚迄寺社方修覆被仰付候、

一方丈ヨリ厨マテ寺修覆被仰付候、

六五七六

(朱書)九月、監物

一華舜軒

右、於虎之間寺社奉行申渡候、寺膳被仰付、順席ノ儀
八月香院次被仰付候、

六五七七

一所帶方極々難渋成立居候上、今般川々御普請御用金蒙
仰候付、三都借入又ハ差出金等ヲ以乍漸全金納相濟候、
然処右補方ノ儀役々及吟味候へトモ、産物又ハ株立候
出方不相見得、重出米ノ儀家老中ヨリ申出趣有之候へ
トモ、領國中諸人極々困窮ノ折柄候得ハ其通ニモ不申
付候処、此上何様尽吟味候テモ詮立候程ノ儀無之、何
レノ筋五ヶ年ノ間重出米ノ儀及再三家老中願ノ趣有之
候へトモ、一旦前文通申渡置候上ハ諸人困窮難捨置事
二候、併此上術計為尽果末二候へハ重出米ノ外出銀等
不相見得候段、役々及吟味細々申出、猶外ニ無余儀相
聞得候次第有之、兎角練合難相付テハ是又難止、
畢竟仁政ニモ相抱不容易事候へトモ、御用金ノ儀ハ專
國役ノ故無是非願通城下ハ一升五合、諸郷ハ二升二テ
願年限相減、三ヶ年ノ間格別ノ儀ヲ以出米申付候、以
来右様ノ願一往不聞濟上ハ決テ不相成事二候、

右之趣、国元家老中其外一統々々迄モ不洩様可申聞候、
八月

六五七八

一近年所帶向分テ難渋成立候折柄、去年川々御普請御用
蒙 仰上納上ノ儀、全 大御隠居様御配慮ニテ借入銀
等ヲ以無滞為濟致安心候、然処右跡取補方ニ付、五ヶ
年給地出米重ノ事家老中ヨリ願ノ趣有之、於其儀八国
中可及迷惑候間、其沙汰ニ不及様ニト思召候へトモ、
再三願ニ付難被黙止、年数被相減三ヶ年程重出米ノ事、
御別紙ヲ以 大御隠居様被 仰出候旨致承知候、誠ニ
御仁慮專ノ御事ニテ可成丈右式ノ儀ニ不及様精々被思
召候へトモ、外ニ詮立候事モ無之趣ヲ以願出、尤、上
納金ハ国役ノ儀故無御抛、右通為致 仰出筈候条、御
趣意ノ程深汲請候様領國中へ申渡、右重出米屹卜詮立
候様勝手方ハ勿論家老中申談、致取扱掛役々へモ一際
可致精勤旨可申渡候、

九月

六五七九

(朱書)九月 典膳
一鳥津出雲殿

右、御取扱振不依何篇、万端島津安芸殿御同様被仰付候旨被 仰出候、

六五八〇

(朱書)十月 安房
(重祿養女)

一來春 立姫様御出府ニ付、御道中ニテハ左事女中ノ御目名ヲ以御通行被為 在候様被仰出候、

六五八一

(朱書)十月 右近、監物、安房、典膳
一此節 大御隠居様御筆ヲ以被仰出候ハ先年御下向ノ節

御一門方ヲ始被 仰聞候御趣意、一体相弛ミ候様相聞得、甚不行届、分テ重役等ハ猶以可入念、且無益ノ企等無之、世間徘徊等ニ至マテ専加勘弁、御所帯ノ儀ハ勿論何篇巨細ニ心ヲ配リ致取扱、適 公辺ヘモ御取締御申立ノ上ハ不輕御事ニ候間、若此以後少事迎モ不束ノ聞得於有之ハ決テ不相濟事候付、其所々深ク心ヲ寄、何レモ可致精勤旨被 仰出、且又 御前ヘ拙者共大目付以上被召出、 大御隠居様兼々御手厚御介助被成進

候儀、第一御国家ノ御為ヲ被 思召上、御老年様ナガラ万端被為及御配慮御事候間、御趣意ノ程深奉汲受、

聊モ無忘失致取扱、到往年候テモ嚴重最通リ候様吃卜可相励旨御意承知仕、一流御請申上置候、右ニ付テハ

我々共取扱行届兼、又候 御沙汰被為在候儀、何共重慮奉恐入候条、於諸向モ右之御趣意得卜奉承知、每物

鎖細ノ儀マテモ掛心頭、 御両殿様奉安尊慮候様申談

尽精力可相勤候、此旨御役人限可申渡候、

六五八二

(朱書)十月 監物
一昨廿四日於

大奥御男子様御出生被為 在候処、先御内々御取扱ニテ御丈夫被為成候上、御弘メノ筈候間、此旨可承御役々へ内々可申聞置候、

六五八三

(朱書)十一月 安房
一今度於 大奥御出生ノ

御男子様、御名普之進様ト奉称候、此旨可承御役々へ内々可申聞置候、

六五八四

一八付ノ字、磔、
(朱書)十一月 右近

一郷士以上死罪ノ事、斬罪、

一凡下ノ者同断、死罪、

一寺入ノ事、遠寺へ蟄居、

右之通、以来名目被相替候旨被 仰出候、

六五八五

(朱書)十一月 安房

一立姫様 来春 御出府付御道中筋、左事女中ノ御名目

ニテ御通行被為 在筈候処、
(齊書) 太守様 御叔母様ノ御

名目御届札等モ其通ニテ御通行被為 在候様被 仰出

候、

但、四行列其外ノ儀ハ先達テ申渡置通候、

六五八六

一年頭御茶五袋
(朱書)正月 典膳

歳暮御茶五袋ツ、・納豆一箱ツ、

右、御三殿様 若殿様へ不断光院

右ハ、此節着座門首寺格福昌寺次被仰付候付、右之通

進上ニテ、是迄ノ通正月六日御祝儀申上候様被仰付、

暑寒伺 御機嫌且登城之節ハ虎之間へ被相控候様被仰

付候、

六五八七

文化十五年戊寅即文政元年

(朱書)正月 典膳

一御隠居様御儀、 御惣髪、溪山様卜御改名被遊度御願

書被差出候処、旧臘九日御願ノ通被為濟候旨申来候、

此旨奉承知、溪ノ字並同唱ノ文字可致遠慮候、

六五八八

(朱書)正月 典膳

一御参勤御時節御伺被 仰上候処、先般濃州・勢州・東

海道筋川々御普請御用御勤付被成御用捨、当七月中可

被遊 御参府旨被 仰出候段御到来候、

六五八九

(朱書)正月十日 御目付

一御城近火之砌、鐘打候節ハ奉行・頭人・書役・小役人

等夫々請持ノ御役場へ罷出事候へトモ、是迄病氣又ハ
差合等ノ人不知候間、以来奉行・頭人ヨリ着到相記、

我々方へ後日名前可差出旨、大目付衆ヨリ被仰付、

慮可仕候、

六五九〇

(朱書)正月 典膳

(柳沢保孝)

一定姫様御事、甲斐守様御嫡子松平喜代丸様へ御縁約被為、在、十一月廿五日御願書被差出置候旨御到来候、

六五九四

(朱書)正月 右近

一定姫様御事、豊姫様、

右之通被遊御改名候間、豊ノ字並同唱迄モ可致遠慮候、

六五九一

(朱書)正月 典膳

(久松定水)

一孝姫様御事、越中守様御嫡子松平永太郎様へ御縁約被為、在、十二月七日御願書被差出候旨御到来候、

六五九五

(朱書)正月 右近

一定姫様御名順ノ儀、豊姫様御次被仰出候旨申来候、

六五九二

(朱書)正月十七日 右近

一孝姫様御事、越中守様御嫡子松平永太郎様へ御縁与、豊姫様御事、甲斐守様御嫡子松平喜代丸様へ御縁与御願之通被仰渡候段御到来候、

六五九六

(朱書)正月 取次兼讀主水

一諸向ヨリ差出候願書等申下ケ候儀毎々有之、依殊ハ左モ可有之候へトモ、頭不吟味故右様ノ儀モ致到来不行届事候条、以後取次前ヨリモ折角氣ヲ付、右体ノ儀無之様向々へ可申渡候事、

六五九三

(朱書)正月 右近

一孝姫様御事、越中守様御嫡子松平永太郎様、豊姫様御事、甲斐守様御嫡子松平喜代丸様、御名同名ノ者ハ遠

六五九七

(朱書)正月 安房

一立姫様、来月三日被遊 御発足候、

六五九八

(朱書)二月 右近

一近衛三位中将様御事、旧臘廿一日夜權中納言、中将如

旧被為蒙 宣下候段申来候、

六五九九

(朱書)二月 右近

一市田長門(義宣)

右、御勘定方へ被掛置候間、諸吟味事等御勘定奉行へ

可被致指揮候、左候テ、御用ノ依向ハ御勘定所へモ被

出席候様被仰付候、

六六〇〇

(朱書)二月廿日 安房

一琉球国並島々凶災付、御藏米追々被差統御難渋ノ御時

節二付、御米金御拜借御願ノ趣有之候処、旧臘廿七日

太守様御名代御一類様被為召、島津筑後守殿御登城(齊興)

ノ処被相願候赴、遠上聞対外国不容易儀二付、御金五

千兩御拜借被仰付候旨、御用番青山下野守様ヨリ被仰

渡候段申来候、

六六〇一

(朱書)二月 安房

一不断光院

右ハ、着座門主寺格福昌寺様次被仰付候付、先達テ年

頭・歳暮二付進上物ノ儀、御三殿様 若殿様御同様

被仰付候旨申渡置候へトモ、歳暮二付テハ進上物ハ

太守様マテ被仰付候、

六六〇二

(朱書)三月朔日 安房・典膳

一去年御出生ノ 御男子様、御名普之助様ト被遊、然共

思召有之、是迄御内々ノ御取扱ニテ候得共、追々御丈

夫被為成候付、此節種子島藏人養子被 仰出候、(久徳)

六六〇三

(朱書)三月 安房

一普之進様御事、種子島藏人養子被仰出候付、以来此殿

文字相用、御本丸へ被成御座候内ハ依事御末子様ノ

儘ニテ御取扱ノ儀モ可有之、彼方へ御引越ノ上ハ自何

篇家格通ニテ、御一世ハ殿文字相用候様被仰付候、

六六〇四

(朱書)三月廿三日 野村主礼
一御役並御役替等被仰付候節ハ御用見合相成候間、時々

書付ヲ以御小納戸方へ届可被申出旨、先年申達有之候

処、此頃ニ相成右ノ届不被申出向モ有之、御用支ニ相

成候間、以來無間違御小納戸方へ屹卜届可被申出候、

此旨申達候、以上、

右、当時大目付少人数相成候付、御用差支候節ハ大目

付方へ差寄相勤候様被仰付候、

六六〇八

(朱書)四月廿三日 右近
一立姫様長途御機嫌能、去ル三日被遊御着府候段御到来

候、

六六〇五

(朱書)三月廿九日 典膳

一先月廿一日 立姫様へ水野甲斐守様ヨリ御祝物被進無

御滞御式被為濟候段御到来候、

六六〇九(の1)

一取調事又ハ吟味筋ノ儀申付候節、手間取候事而已ニテ

行届兼候、勿論依事候テハ左モ可有之候へトモ、国元

へ往反又ハ差掛リ候儀ハ折角無油断取調、何分延々ニ

不相成様可致取扱候、中ニモ所帯向ニ相掛候儀調事申

付候砌、取調ノ儀何カニ事寄セ候テハ身辺ヲ貯候意味

モ有之、甚如何敷候、以來左様ノ所随分入念取調等可

致候、尤、累年勝手向不手練故再応遂吟味、省略減少

ノ上ナガラ程過候へハ物每弛勝ニ候間、何分此已後取

締向緩セニ不成様、且取調事付テハ夫々手前ニ抱リ候

儀無之、主用第一ニ心ヲ配リ可致吟味候、右之趣念比

ニ相合居、不依何篇聊無滞滞取調、速ニ相片付候様具々

六六〇六

(朱書)四月 右近

一北郷佐渡 二階堂伊豆

右、御家老差支候節ハ差寄相勤、表向書付等ハ御家老

名前ヲ以致取扱候様被仰付候、

六六〇七

(朱書)四月 右近

一赤松造酒

可致取扱候、

二月

(六六〇九の2)

一 重役ハ勿論諸役向其外書役・小役人身分取扱ノ儀、先代ヨリ年数又ハ勤功ノ沙汰ヲ以取扱来候処、近来ノ調向専年数ニ抱リ候様ニ成立、自然ト勤功ハ薄成行候間、^(拘之)以来其器量有之、可用立者ハ年数無構差別可申儀モ可有之候、尤、多年難相勤候格別勤功モ無之候ハ、応其仁是又極老迄^(道力)正得相勤候向不洩様取調、前条ニ準シ取扱候様可相心得候、左候ヘハ一統ノ励ニモ可到哉、夫々頭人ヘモ右ノ趣可申聞置候、

二月

(六六〇九の3)

一 今度從^(重察)大御隠居様別紙ニ通ヲ以被仰出候旨致承知候処、一々御尤ノ御事候条、向後御趣意相叶候様可致取扱候、

四月

家老中へ

六六一〇

(朱書)四月 右近

一 聖堂祝栄^(業力)ノ儀、已前ノ通春秋二度被仰付候条、此旨教校^(授力)へ申渡、可承向ヘモ可申渡候、

六六一一

(朱書)四月 右近

一 毎月十五日 御殿講釈定日ニテ候得共、御差支ノ節ハ以来廿八日ニ被仰付候、

一 右講釈、七月八十七日ニ被極置候ヘトモ、以来廿八日被相替候、

右之通被仰付候旨被 仰出候、

六六一二

(朱書)五月廿五日 御家老座印

一 今度年号文政ト被相改候旨、去ル四月於江戸被仰渡候段申来候間、奉其意、去ル四日ヨリ諸書付等モ文政ト可相改候、

六六一三

(朱書)五月 安房

一 郷士下女ノ事、郷士召仕、
百姓下人下女ノ事、百姓召仕、

右之通、以来名目被相替候旨被仰渡候、

六六一七
(朱書)七月十七日 安房

一立姫様御事、壹岐守様御養子水野甲斐守様へ御縁(忠實)与御願之通被仰渡置候付、先月朔日御引越被為濟、同十五

日御婚姻被為整候段御到来候、

六六一四

(朱書)六月 右近

一苗姫様御事、左近将監様御嫡子立花伯耆守様へ御縁(義孝)与御願之通被為在、御互二御家老御使ヲ以御引結相濟候、右二付(約)

御両敬被仰合候段御到来候、

六六一八

(朱書)七月 安房

一水野伊織様御事、甲斐守様卜御改名被成候、

六六一五

(朱書)七月 安房

一脇坂中務大輔様

右ハ、兼テ御互御懇意被仰進、大御隠居様二八年来

分テ御懇意被仰進來候付、先月十五日御両敬被仰合候

旨申來候、

六六一九

(朱書)七月 安房

一一橋大納言様御事、先月十五日被成御剃髮、穆翁様卜被称候間、右唱ノ名付居候者ハ可致遠慮候、

六六二〇

(朱書)八月七日 右近

一太守様御機嫌能、先月十三日被遊御参府候旨御到来候、

六六一六

(朱書)七月廿一日 右近

一此節 松齡様(義弘)二百年御回忌御法事、来ル十九日ヨリ廿

一日迄寺役執行、

六六一一

(朱書)八月 右近

一御三家様御付御嫡子方

右、御会釈向御家督御同様ノ御取扱被仰付候、

中山備前守様 中山備後守様

右、御父子様兼テ御心安被仰進、其上御内々御訳合モ被為在候付、御会釈向万石已上ノ御大名様ノ御振合ニ被仰付候、

右之通被仰付候旨、御沙汰被為在候段申来候、

六六二二

(朱書)八月 右近

一 太守様御参府付、先月廿五日以上使水野出羽守様御懇(忠感)

ノ被為蒙 上意、同廿八日御登 城、御参府ノ御礼被

仰上候処、御懇ノ被為蒙 上意、御直御請被仰上、諸

事御先格ノ通被為濟候段御到来候、

六六二三

(朱書)八月 安房

一 不断光院

(清揚院カ、徳川綱重(別当カ))

右ハ、清陽院様御列当職被仰付置候訳ヲ以、以来登

城ノ節控席ノ儀ハヤハリ虎ノ間ニテ大乘院頭ニ相控、

謁振ハ右一列相離、松之間へ一人罷出可被謁候、且又

下乗等ノ儀ハ下乗札涯、右階上横廻ノ所へ出、南泉院・

福昌寺下、大乘院・浄光明寺等上ニテ被致下乗候様被

仰付候、

六六二四

(朱書)九月朔日

一 何ソニ付、差控奉伺置候者、湯治御暇ノ願不申出等候

処、間々取違ノ向モ候間、向後右式御暇ノ願申出間數

旨、(空白)ヨリ被仰渡候事、

六六二五

(朱書)九月 安房

一 在国在邑ノ面々忌服請方、主人承知ノ上(空白)忌一日遠慮、

又ハ残り日數請候旨御届可申答ノ処、当地ニテ家来承

知ノ日ヲ一日遠慮致シ、相届式ハ忌日數相立候へハ暇

日數相残候共、忌服ノ日數書付不差出向モ有之候、右

(空白)忌ノ儀ハ主人承知ノ日ヲ遠慮可致儀ニテ、且服日數

残候ハ、忌服ノ書付モ可差出事候間、以来在国在邑ノ

面々於当地家来ヨリ先届申聞候節、右ノ通相心得、追

テ主人承知ノ上遠慮ノ日限等猶又相届候様可被致候、

右、青山下野守殿(忠感)へ窺ノ上此段相違候、

八月

六六二六

一 御役人ハ勿論書役・小役人ノ内ニモ格別御用立出精相勤候者、身分御取扱ノ儀ニ付其器量有之可御用立者ハ年数無構差別可被仰付儀モ可有之趣共、当二月被仰出置候付拔群器量有之可御用立者ハ其御取扱モ可有之事候、然二万一モ取違全年功ニハ不抱儀^(拘力)卜差心得、一ト通御用向取馴候者ヲ身分御取扱向取調候筋ニ成立候テハ第一励ニモ不相成候条、何レ年功・勤功等モ相積、格別御用立者候ハ、吟味モ可致事候、右ノ所無取違、選挙ノ法無偏頗様鎖細可尽吟味旨、猶又頭人へ可申聞置旨、^(重要)大御隠居様被 仰出候、

九月

六六二七

^(朱書)十月^(内蔵)

一 脇坂中務大輔様御家内 市橋秘次郎様御縁女
 一 御嫡子 徳之助様 一 御娘 於稷^(ヲ)様
 一同 於寿様 一同 於雅様
 一 御弟 鞆負様

右ハ、御両敬被仰合候段ハ先達テ申渡置候通、御家内

ノ儀右之通申来候、

六六二八

^(朱書)十一月^(内蔵)

一 御前誓詞 御家老 若年寄 大目付
 右ハ、御出座ニテ血判 御見届被遊、右以下御役々奥向迄 御出座ノ格ニ不及、血判御家老見届可申、惣体相济候上、御休息所血判被遊御覧候儀ハ是迄ノ通被仰付候、尤、誓詞被仰付候御座柄ノ儀ハ是迄ノ通被仰付候旨申来候、

六六二九

^(朱書)十二月^(安房)

一 永井肥前守様
 右ノ奥方様
 御養祖父清寿院様^(母方)
 御嫡子 永井銚之助様^(尚典)
 右ハ、此節御両敬御引結相济候付、御祝儀伺御機嫌等右御方々様へ以来従 御三殿様 御前様 若殿様被仰遣答候旨申来候、

六六三〇

(朱書)正月 右近

一増返上物掛ノ事、唐物掛、

右之通唱被相替候、

六六三一

文政二年己卯

(朱書)正月 右近

一於八百御方事、御内証様、

右之通奉唱候様 大御隠居様被 仰出候、

六六三二

(朱書)正月十三日 右近・安房

一太守様御儀、旧臘十六日 御城へ被為召、從四位上中

將御任官被 仰出候旨御到来候、

六六三三

(朱書)正月 安房

一他国者一季抱ノ家来下人 御城内供召列候儀無用申付、

定府ノ面々等不召列候テ難成向ハ可願出、且又御領内

へ致居住候他国者ノ儀モ同様、御城内罷通候儀不相成

段申渡置候得共、向後不及其儀、以来御里通迄罷通候

儀無用申付候、

六六三四

(朱書)正月 安房・長門

一他所旅申付候者ハ人柄一涯可致吟味赴トモ、去ル戌二

月モ細々 大御隠居様被 仰出置、其上毎々 御沙汰

モ被為在候御事ニ付、江戸詰申付候者ハ自ラ分テ人柄

吟味有之筈ニハ候ヘトモ、万一モ吟味届兼候儀トモ有

之、不束ノ儀致到来候テハ依事ハ御外聞ニ相掛儀モ有

之、第一其身モ及迷惑事候間、能々人柄致吟味申付候

様トノ趣、此節猶又 御沙汰被為 在候間、乍此上不

行届儀有之候テハ決テ不相成事候条、去ル戌年申渡置

候趣ヲ以、江戸詰等申付候者ハ向々へ支配頭等ヨリ能々

人柄致吟味可申出候、

六六三五

(朱書)正月 安房

一御趣法方調子掛

右之通、此節勤向ノ各目被相究、諸御役人ノ内御見合

ヲ以、右勤被仰付候段ハ別紙申渡通ニ候間、是迄御趣

法方へ御役々出席御用取扱被仰付置候ヘトモ、御引取

ニテ右調子掛御趣法方へ出席掛御用人へ相付、御勝手方御用向諸取調方被仰付候、尤、此已前吟味役取扱振(拘力)二不抱、是迄出席御役々致吟味来候振合ヲ以何篇鎖細尽吟味、聊モ御費筋無之様可致精勤旨被仰出候、

六六三六

(朱書)正月 安房

一赤松造酒(前巻)

右ハ、大目付少人数ニテ御用差支候付、大目付方御用モ被相動候様被仰付候、

六六三七

(朱書)二月五日 長門・内蔵

一心(空白)院殿病氣養生不相叶、昨三日晝死去付、大御隠

居様御忌十日・御服四十日御掛被遊候、

六六三八

(朱書)二月 長門

一何ソニ付願事並内意向ノ儀、其掛ヲ迦シ或下役等ヨリ

頭人ヲ差越、直進達等無之様先年申渡有之、猶又手寄

ヲ以内意等申込候儀曾テ致間敷候、左候テ、重役ハ用

達へ相付、用達無之向ハ右ノ振合ヲ以下役等へ相付可申出旨、度々申渡ノ趣有之候処、頃日ニハ右体ノ儀有之筋二相聞得不可然候条、一切右式ノ儀無之趣、屹卜可相守旨向々へ可申渡候、

六六三九

(朱書)二月十六日 長門

一御隠居様ノ御十男 清次郎様御事、先年御出生被為

在候へトモ、思召有之表向御弘無之候処、此節御痘

瘡御煩、追々御順痘被為人、然処俄御急変ニテ、先月

廿五日晝寅刻御天亡被遊候旨申来候、

六六四〇

(朱書)二月 長門

一清次郎様御法名 陽台院殿春岸幼明大禪童子(幻カ)

六六四一

(朱書)二月 取次坂元平左衛門

一諸向所帯方差迫候面々並書役・小役人等蔵方願申出、

夫々吟味ヲ以申付事候処、近年場所ヲ差願出候儀段々

有之、蔵方勤ノ儀ハ基御心付被仰付儀故、其勘弁モ可有之候処、無其儀甚以自由ケ間敷儀二候、依之以来願

存候者ハ其心得ヲ以取違有之間敷候、左候テ、是迄年々

申付来候役場ノ儀モ、外々無抛御心付ノ向相重候付、

依年ハ不申付儀モ可有之候、此旨支配中へ申渡、奥方・

表方へモ可相達事、

六六四二

(朱書)三月右近・長門

(純、実重、重男)

一有馬肥前守様御儀、兼テ御痔病ノ御疝症折々被為差発、

往々御養家御相統ノ御様体無之、御熟談ノ上御養子御

離縁ノ儀御願被成候処、御願ノ通被仰渡、先月十七日

御引取被為濟候段御到来候、

六六四三

(朱書)三月長門

一陽台院様御忌日正月廿五日ニ候得共、正月廿日ニ被相

替候旨申来候、

六六四四

(朱書)三月十八日右近

一肥前守様御事、御伺ノ上先月廿二日左近様卜被遊御改

名候段申来候、

六六四五

(朱書)三月右近

一脇坂中務太輔様御息女於(寿力)様御事、大御隠居様御養

女御内約被為 在、先月十五日表向御引結被為濟、御

届書ノ儀ハ近々被差出答候、

六六四六

(朱書)三月十八日右近

一太守様御官位御昇進付、口 宣 宣旨御頂戴ノ御使

京都へ被差越、御献上物等御先規ノ通被為濟、口

宣 宣旨相渡、先月十九日被遊御頂戴候段申来候、

六六四七

(朱書)三月右近

一脇坂中務大輔様御息女於寿様御事、大御隠居様御養

女御内約被為在、先月十五日表向御引結被為濟、御届

書ノ儀ハ近々被差答候、且又御名順ノ儀ハ立姫様御次(重養女)

候条此旨奉承知、寿ノ字並同唱迄モ名付居候人ハ可致

遠慮候、

六六四八

(朱書)三月 右近・長門

一肥前守様御儀、御伺ノ上先月廿二日左近様ト被遊御改名候段申来候条此旨奉承知、左ノ字並同唱ノ文字可致遠慮、乍然何左衛門杯ト下ニ用候儀ハ不苦候、

六六四九

(朱書)三月 右近

一掃部 雅楽

右名前、遠慮ノ御触流等ハ無之候ヘトモ、公辺ニテ御差支ノ由候間、右名付居候人ハ可致遠慮候、

六六五〇

(朱書)三月 取次坂元平左衛門

一諸士以下ノ者共ヨリ何ソニ付願書等差出候節、間ニハ身分ノ片書不相記モ有之、吟味ノ節不都合候間、以来何方郷士又ハ何某家来上下町人等、夫々身分ノ片書為致差出候様向々ハ不洩様可申渡事、

但、向々取次ノ御用人、其簿ニテ時々氣ヲ付候様是又可申渡事、

六六五一

(朱書)四月 取次坂元平左衛門

一諸向所帯方困窮ノ面々、依訴訟島方・藏方等申付、望ノ者ハ讓渡一件ニ付テハ彼是相当ノ取計他ノ批判ヲ不受様可有之事候処、其身勝手ニ基キ不宜風俗相聞得不可然事候付、向後右様心得違ノ者ハ吟味ノ上御心付取揚可申付候、

六六五二

(朱書)四月 安房 一伊集院隼衛

右ハ、長々足ノ痛有之、退役ノ願申出、願之通被成御免候、数十年首尾能相勤候付、為御養料七拾五俵一世被下置候、左候テ、以来 太守様御機嫌奉伺候様被仰付候、

一右同人

右同断、数十年首尾能相勤、且 一橋様御用モ一入ニテ別テ骨折出精相勤候、旁ノ御取訊ヲ以 大御隠居様其外様奉伺御機嫌、大輿ヘモ罷上奉伺御機嫌候様別段被仰付候、

右之通、先月朔日於江戸申渡有之候段申来候、

一 江戸詰等被仰付致出立候節、手鐘不持越御切手申請候者ハ以来付状下書ニ其訳相記可申出候、尤、右ノ趣ハ(側力)御例・御勝手方御用人へモ可申聞置事、

別紙ノ通被仰渡候間致出立候、前日届ニ申出候節、支配頭等ヨリ手鐘不持越御切手申請候儀、書付ヲ以時々可被申上候、尤、同立ノ内手鐘為持候人有之候ハ、其段モ可被申出候、以来右之趣被相心得可被取計候、以上、

卯四月廿一日

坂元平左衛門

大御隠居様御筆 仰出写

一 此節所帶向至テ難渋ニ付、向井十郎太夫・堀(友姓)□(殿衛力、愛來)衛大坂並国許へ差下候儀、畢竟不輕時節ニ相趣勤向ニモ差支候程ノ事ニ候条、依テ格外ノ仕向申付越候、勿論去年来ノ趣意イマダ不到治定候間、弥其通取扱精々令勘弁繰合相調候様国元同席中申談可取計、尤、若年寄・大目付へモ其方ヨリ委細可申越候事、

(町田久徳) 監物へ

太守様御筆 仰出写

一 所帶向連々差迫、此節別テ難渋成立、既勤向モ調兼候程相成候段、監物ヨリ申出、不容易時節ニ候、先年以來追々取縮向等尽手ヲ候上ナカラ、猶又格別ノ趣法不相立候テハ不叶事候故、今度從(重巻)大御隠居様被 仰出趣有之、向井十郎太夫・堀(殿衛力、愛來)□(衛)差下候条、 仰出ノ趣得卜奉承知、鎖細迷吟味、其詮相立候様可取計候、被為及 御老年種々被尽 御心苦候御事共甚以令心痛候間、家老中ハ不及申、其外役々一統申談精々尽吟味、何レニモ 仰出ノ御趣意相立被遊 御安慮候様屹卜可取計候、

家老中へ

六六五六

(朱書) 閏四月 右近・長門
一諸芸鍊熟ノ上被召出候家ノ儀、其芸ヲ(讀力)諸次至子孫其道

ヲ以御用立候様可心掛、若取違芸道取止候者ハ元ノ俗

生ニ可被仰付候旨、先年以來被仰渡置候処、右通芸道

ヲ以代々郷士又ハ与力等へ被召出候者ノ内、間ニ八家

業差置外勤等イタシ候者モ有之候哉ニ相聞得、右二付

テハ御小姓与へ被召出候者同前、夫々家業ノ芸道ヲ以

其家可致相統事候条、其通相心得候様申渡、継目・家

督等願出候節ハ勿論時々可被氣付旨、地頭並向々支配

頭へ申渡、可承向へモ可申渡候、

但、盲人職ノ儀ハ別段ノ事ニ候、

六六五七

(朱書) 閏四月 内藏
一宗門方掛御用人へ宗門方御銀ノ儀、諸人依願是迄御取

替被仰付来候へトモ、以來ハ(空白)役等相勤候人ハ訴訟ノ

依向ハ御取替可被仰付候、其外書役・小役人等ノ儀ハ、

格別年功・勤功有之候者ハ困窮ノ依程合、奉行・頭人

ヨリ分テ申出候向ハ其節々吟味ノ上御取替可申付段、

去ル酉年申渡置候処、近来右ノ無差別一通ノ困窮申立

訴訟申出候面々、別テ過分有之候、以來ハ前件ノ趣ヲ

以取次前ニテモ委曲遂吟味、訳合不相知向ハ内意等申

出候迎モ取揚間敷候、

六六五八

(朱書) 閏四月六日 内藏

一諸之助様御事、御病氣ノ処御養生不被為叶、先月十八

日被遊御天亡候旨申来候、

六六五九

(朱書) 閏四月 内藏

一諸之助様御法名 瑤池院殿緑台浄慧大禪童子

右之通奉称候段申来候、

六六六〇

(朱書) 閏四月十三日 内藏

一先月十五日 上使大久保加賀守様 太守様御国許ノ御

暇御給、御先格ノ通被遊御拝領物、從 大御隠居様モ

上使松平能登守様ヲ以被遊御拝領物、同十八日御登

城、御礼被仰上候処、御懇ノ被為蒙 上意、御馬御拝

領被遊候段御到来候、

六六六一

(朱書) 閏四月十三日 内藏

一 太守様御機嫌能、先月廿二日江戸被遊 御発駕候旨御

到来候、

一 湯治御暇願次ノ儀、差掛願出候人段々有之、御取扱難

被成御付、向後差掛右願申出候者ハ取次致間敷旨、伊

豆殿ヨリ致承知候間、此段申達候、已上、

閏四月廿三日

長崎甚七

六六六一

(朱書) 閏四月廿五日 内藏

一 太守様御官位御昇進ニ付、口 宣 宣旨女房奉書、明

廿六日昼時御到来ノ筈候、

六六六三

(朱書) 閏四月 内藏

一 瑤池院様御忌日四月十八日ニ候ヘトモ、十三日ニ被建

置候旨申来候、

六六六四

大御隠居様御筆 仰出写

一 先年豊後守人(部力)ノ砌、大炊頭殿ヨリ御達ノ趣有之候所、

猶又此節同所ヨリ御達ノ筋有之、誠ニ重キ御沙汰ニ候、

右ハ、介助以来夫々立置候規定其詮有之、夫ニ付テ厚

キ御達ノ御趣意候ヘトモ、右規定後年ニ至リ聊モ相緩

ノ候テハ御達ノ旨ニ背キ恐入候事ニ候、其所一同ニ厚

相心得可申、勿論自分存生ノ内ハ堅ク可相守候ヘトモ、

人命難量没年及ヒ政事向ノ儀若自己ノ役意ヲ加ヘ、是

迄ノ規定万一相崩候儀、公辺へ相聞へ候ヘハ再応ノ

御達薄ク相成申訳無之、右ニ付則別紙相添、猶又申聞

候付、不朽ニ相守、家老中初重役ノ者トモ必忘却イタ

ス間敷、猶以万端無緩相心得ヘク事、

四月

六六六五

太守様御筆 仰出写

先年大炊頭殿ヨリ御達ノ趣有之、猶又此節別紙ノ通御達

有之、誠不輕 御沙汰ニ候、右ニ付テハ 大御隠居様御

介助被成下被立置候規定ノ詮モ有之、於我等別テ難有次

第二候、御老年ノ御事ニテ種々被尽御心根、今度猶又御

自筆ニテ別紙ノ通被 仰出候付、御趣意ノ程家老初重役

ノ面々深奉汲受、永久ニ至リ聊忘却致間敷候、此旨屹下
申聞候事、

四月廿四日

六六六

(朱書)五月 右近・安房・長門・内蔵

土井大炊頭様ヨリ被成御渡候御書付与

先達テ有馬左兵衛佐ヲ以申求候品有之処、厚ク被聞請候

テ、其後追々家政折合穩ノ由及承、重疊ノ儀ト一同存候

事ニ候、猶以此上先達テ申伸候趣意相貫キ、琉球国ノ儀

迄モ万端榮翁殿へ相談有之候様ニト存候事ニ候、從來段々

深篤ノ心添畢竟被行届候処、其詮モ格段ノ儀ト存候、年

齡ノ儀被^(空白)候程ハ察入候ヘトモ、外藩ヘモ關係ノ事ニ

テ不容易儀ニ候間、此上トモ精々介助立ラレ候様有之度

事ニ候、尤、入 御内聽ニモ候処、心添ノ程一段ノ儀ト

御機嫌ノ事ニ候、此等ノ趣一同ヨリ無急度申伸候事、

土井大炊頭様ヨリ (弁書) 太守様へ御内達ノ趣有之、四月廿一

日彼御宅へ被遊御出候処、先年御初入部ノ御御政事向ノ

儀御達被置候処、其後追々御家政穩ノ由重疊ノ御事候間、

猶以此上先達テ御達有之候御趣意相貫、琉球国ノ儀迄モ

万端 大御隠居様へ御相談有之候趣、尤、御内々被達

上聞候処、御心添ノ程一段ノ儀ト御機嫌ノ御事候旨、御

別紙ノ通被仰達候付、是迄ノ御規定到後年不相緩様屹ト

可相守、万一此後御政事向相緩公辺へ相聞得候儀モ有之

候テハ再応ノ御達薄相成御申訳モ無之トノ趣、 太守様

大御隠居様ヨリ御別紙ノ通御筆ヲ以被 仰出候付、一統

厚奉承知夫々被立置候御規定通永久ニ至リ聊不致忘却無

緩疎猶又相守、支配下下役等へモ時々可申含候、

六六七

(朱書)閏四月 内蔵

一御所帯方極御難渋成立、誠ニ不容易御時節付、 御隠

居様御儀、御国元へ御下向可被遊ノ処、無御抛御訳合

有之、其儀難被為調候テ何篇御心配慮被為 在、白金

御屋敷御引払ニテ大崎御屋敷へ御引移、是迄ノ御茶屋

へ御遠次等ニテ御手細御^(空白)居ノ筈候旨申来候、

六六八

(朱書)五月 長門

一太守様、来ル九日被遊 御着城筈候、

六六六九

(朱書)〔六月、長門〕

一英姫様御儀、是迄ハ御逗留ノ御積候ヘトモ、以来表向

ハ是迄ノ通ニテ御内輪ニ御引越被為濟候、同様相心得

何篇此御方様御仕向廻有之候様 一橋様ヨリ御内々被

御進候段申来候、

六六七〇

(朱書)〔六月、長門〕

一御隠居様御事、白金御屋敷ノ儀湿深ノ場所故、大崎御

屋敷へ御引移被遊度、且何ソニ付 上使御給ノ節ハ芝

御屋敷ニテ御引請被遊度トノ御屈書、閏四月廿一日御

用番様へ被差出候段申来候、

六六七一

(朱書)〔六月、長門〕

一左近様御名順ノ儀、(重孝女)孝姫様御頭ニ被 仰出候旨申来

候、

六六七二

太守様御筆 仰出写

一所帯向連々不如意ニ相成、先年

(重孝)

大御隠居様段々被遊

御心配、趣法モ被相替種々被尺御手、於向々モ精々取

調為尺吟味筈候ヘトモ、兎角其詮不相見得、当時二至

リ猶更難渋成立、已ニ此節ハ 大御隠居様御統料ノ内

ヲモ表方へ被差出、其外万端御事ヲ被為欠、殿敷御取

縮有之、御隠居様モ御同様ノ儀ニテ御柄居迄モ被相

替候積ニ相成、別テ恐入次第二候、然処前文通年来於

向々モ精々尺吟味候上ノ事ニテ、此上ハ格別ノ手段モ

有間敷候ヘトモ、右通 一両御隠居様被遊御心苦候御事

ニテ、何トモ恐入儀ニ候間、猶又一同申談精々遂吟味、

追々其詮相見得候様可取計、尤、勤事ノ外ハ何篇折角

令省略、就中領内ノ儀内輪ノ事候間、万端質素ノ向ニ

取行、家作道橋等破損候テモ危場所無之候ハハ、自障

相成候儀ハ不苦可ヤニ取臆置候筋可心得候、勿論式向

ニ相掛候儀トテモ、致作略不差支儀ハ取調伺候様、左

候テ、略事ニ相成候儀ハ、進テ所帯方立直候上ハ当分

ノ通可有之候ニ付、其心得ヲ以前文御心苦ノ御一条ヲ

奉解候所、人々目当ニイタシ相励候様有之度候、無左

候テハ第一被遊 御安堵候期モ不相見得、且ハ時勢ニ

応候^(省力)詳略ノ筋モ不相分毎物致怠慢基ニ候間、右体ノ始末モ得ト申談、前後無滯様屹ト可致勘弁候、尤、手先ノ儀モ自万事折角取縮追々致工夫候、然共此儀全体内輪諸篇ニ相掛候へハ遂条ハ難申尽、右段ノ主意何カ不如意ニテ相濟候考ニ候間、於諸向其旨ヲ存鎖細尽吟味屹ト其詮相立候様可取計候、

六月

六六七三

太守様御筆 仰出ノ写

先年川々御普請付御用金被仰渡、其儀ハ借入等ヲ以相濟候、然処右返金調兼、家老中依願重出米三ケ年為差出、^(相カ)既二年限稠滿候へトモ、未返金全備不致、是ヨリ二ケ年又々同様相願候、右ニ付国中連々困窮ノ砌故、^(重慮)大御隠居様段々御心配被遊、折角御吟味被為在御事候へトモ、何レノ筋外ニ^(其場差カ)基場害候程ノ儀不相見得、難被黙止御訳合ヲ以全二ケ年願通被仰付、殊更其余ノ御事共御別紙ノ通彼是都テ御引請被遊候上ナカラ、御統料ノ内別段ノ思召ヲ以五百石是亦二ケ年被差出、重畳厚 御趣意ノ程何

共難有仕合恐入奉存候、依之其旨ヲ一流深奉汲請、御下知ノ通返金無相違可取計候、尤、此等ノ一事ハヲノツカラ其通可有之、左候テ、被為及 御老年追々御苦勞被遊、始終共御安慮不被為在御事候間、右外時々被 仰出置候御趣法向、猶又朝暮無油断精密吟味ヲ尽、屹ト其詮相見得 尊慮ノ御一端ヲモ奉慰候様可心掛候、

家老中

六六七四

大御隠居様御筆 仰出写

去ル丑年川々御普請御用金蒙 仰、三都借入又々諸人出銀等ヲ以漸金納相濟、右補方五ケ年ノ約定候ノ処、其見当無之付、領國中重出米ノ儀及再三、家老中願ノ趣有之、難黙止筋合故、去ル丑年其通申付置候、然処又々来辰年迄二ケ年引統是迄ノ^(重カ)通玄出米ノ儀願申出趣細々令承知候、右ニ付テハ其砌モ申聞候通、領國中一統困窮ノ折柄候得ハ最早当年ヨリ重出米差免、諸人モ安堵可為致積候処、^(高カ)此上又候出米申付候テハ当更及難洪、別テ迷惑可存事候付、容易願通難聞濟候へトモ引替相成程ノ儀、不相見得

趣二付テハ乍氣ノ毒モ此節家老中願通申付候条、右出来無滞返金取計候様申付候、左候テ、当時極々難渋ノ時節候付(子カ)共入用並其外ノ儀迄モ此節ヨリ都テ引請候上二候ヘトモ、別段ノ代ヲ以當時二万石二応候統料ノ内午纒五百石二ケ年差出置候間、右高二応候所務重出米取合、三都借財聊無相違返金可取計候、右ノ趣国元家老中其外一統末々迄不残様可申聞候、

閏四月

家老中へ

六六七五

(朱書)六月 右近

一 台徳院様 (家忠) 大猷院様 (家也)

敬有院様 (家禮)

常憲院様 (綱吉)

文照院様 (家重、家治、家母) 至心院様

右御正忌日等ノ節、御咎目向申渡等ノ儀御取扱振被為在候ヘトモ、以来ハ其儀不及候、此旨可承向々へ可申

渡候、

六六七六

(朱書)六月 右近

一 御祝日等付御咎目者申渡等ノ儀共、以来左ノ通被仰付

候、

御台様御引越 (家治室、茂姫) 御祝日

一 五月十九日 一同月廿一日

右十九日御内祝被為 在候処、御差支ノ御日柄故御祝

日二ハ被立置、同廿一日御内祝可被遊旨被 仰出置候

処、十九日ノ儀重御咎目向不被仰渡、輕キ御咎目申渡

ノ儀、其外評定所吟味等被遂候儀ハ無御構、廿一日二

ハ何モ無御構候、

一 釈栄 (業九)

右、当日御咎目者不被仰付、窄込等夜入候テ召込願、

遠島御引付類ノ儀差控置、尚免ノ不及沙汰旨是又被免

置候通候、

太守様御誕生日 (齊興)

一 十一月六日

大御隠居様右同 (重兼)

一 十一月六日

御隠居様右同 (齊宣)

一 十二月六日

若殿様右同 (齊彬)

一 三月廿八日

右、表向御祝日被定置不及、御内実ノ儀ハ右同様被仰
付置候、
右之通被仰付候、

六六七七

(朱書)六月 右近
一 御精進日付御答目者申渡等ノ儀共、以来左之通被仰付

候、

(家應)
東照宮

一 四月十七日

右、御正忌日月次共御答目事等都テ不被仰付、月次ニ

ハ当リ免不及候

(家應)
有章院様

一 四月晦日

(吉宗)
有徳院様

一 六月廿日

(家重)
惇信院様

一 六月十二日

(波明院力、家治)
俊明院様

一 九月八日

右、御正忌日迄死罪被差留、御年回ノ節計当リ定置、
輕キ御答目事ハ無御構候、
頼朝公

一 正月十三日

(忠久)
得仏様

一 六月十八日

右、御答目事都テ不被仰付、評定所吟味ノ儀ハ不苦、

月次ハ諸事無御構候、

(黄久)
大中様

一 六月廿三日

(義久)
貫明様

一 正月廿一日

(義弘)
松齡様

一 七月廿一日

(家久)
慈眼院様

一 二月廿三日

右、御年回並御正忌日ノ儀、重科ハ不被仰付候、其外
諸事無御構候

淨国院様 (吉黄)

一十月十日

宥邦院様 (雜息)

一九月廿日

慈徳院様 (宗信)

一七月十日

円徳院様 (重年)

一六月十一日

浄岸院様 (雜豐雜室、竹姫)

一十二月五日

正覚院様 (重年室)

一十一月七日

慈照院様 (重兼室)

一九月廿三日

春光院様 (重兼側室)

一六月十三日

芳蓮院様 (齊宣室)

一六月八日

慈光院様 (重兼側室)

一十月晦日

右、御正忌日吟味ハ不苦、御咎目等都テ不被仰付、月

次ハ諸事無御構候、

右之通被仰付候、

六六七八

(朱書「六月 安房」)

一御前様御方 (齊興室)

一金子二千両

右ノ内、千両ツ、此節ヨリ一往御減少、

英姫様御方 (一、儀音敷迄)

一金子千両

右、御婚姻被被為整迄ノ内年々御入用、

右之通、此節ヨリ被究置候外ニ金五百両別段御内々ヨ

リ一往被進候、

右ハ、御勝手向連々御難渋成立、既ニ 公辺御勤事ヲ

モ難被為調程相成、不容易御時節ニ付 御一統様御辺

ノ儀迄精々御省略万端御事ヲ被為欠、近年御所帯立直

候様混ラ、御工夫被為在候、依之御前様御統料ノ内御

氣之毒ナカラ右通一往被相減、 英姫様ニモ御婚姻被

為整候迄右員數ニテ可成丈被為濟候様、
大御隠居様

被 仰出候段申来候、

六六七九

(朱書)六月 安房

一 苗姫様御事、左近將監様御養子立花伯耆守様へ御縁与
御願之通被仰渡候段御到来候、

六六八〇

(朱書)正月 安房(齊宣男、清一郎)
一 正月廿日 陽台院様

右御正忌日迄、御精進日被相立候、

六六八一

一 御葉園奉行ノ儀、御近習通被仰付候旨、寛政四年子十

二月八日勘解由殿ヨリ面高善右衛門取次口達ヲ以被仰

渡候処、其節向々達相洩居候付、右年月向々致承知候

筋可被相心得旨、安房殿ヨリ致承知候間、此段致通達

候、以上、

六月廿四日

向井十郎太夫

六六八二

(朱書)七月 美濃、安房(忠徳)
一 此節御老中水野出羽守様ヨリ 大御隠居様御病氣被御

快復候ハ、御序ヲ以 御目見被仰付候様トノ御願書可

被差出旨被仰渡、其通ノ御願書被差出置候処、先月七

日御登 城被遊ヘキ旨被仰渡、当日四時御登 城、於

御座之間 公方様 大御隠居様へ 御目見、青山下野

守様御披露 御着座ノ上格別御懇ノ被為蒙 上意、下

野守様ヨリ御礼御取会有之、御退去下ノ御休息所へ御

引、御伺ノ上於黒鷲ノ御杉戸涯御老中様へ御謁御礼被

仰上候段御到来候、

六六八三

(朱書)七月 内蔵 (齊興男、諸之助)
一 四月十三日 瑤池院様

右御正忌日迄、御精進日被相定候、

六六八四

(朱書)七月 内蔵 (義忠)
一 市田長門殿

右家嫡子ノ儀、格別ノ 思召ヲ以 御直元服被仰付候、

六六八五

一淑 菊 岸 (朱書)八月 内蔵

友 亭 定 聡 智 千代 峯 元 要

乙 銀 辰

右ハ、公義其外 御子様方等ノ御名文字ニテ、同唱

迄モ遠慮申渡置候へトモ、最早不及其儀候、

淨岸 真合

右、淨岸院様 (雜盛雜室、竹姫) 雜盛女、菊姫 真合院様御隠号ノ文字ニテ、御在世中

ヨリ右通二字相統候文字実名・同唱迄モ遠慮申渡置候

へトモ、当分ニテハ御法号ノ御事候間、表向遠慮ノ沙

汰ニ不及、以来御正院様方御隠号ノ文字同様可相心得

候、

右之通向々へ可致通達候、

六六八六

(朱書)八月 内蔵

一閑姫様御儀、松平彈正様へ御縁ノ御願之通被為濟、未

御婚姻不被為整候処、彼御方御所帯向極御難洪ニ付無

御扱被仰進趣有之、御双方御熟談ノ上御離縁ノ御届書

差出候旨御到来候、

六六八七

一松平彈正様 (朱書)八月 内蔵

右ハ、閑姫様御事、御離縁ノ御届書被差出候付テハ以

来何篇御近親様ノ場相除、御両敬様方御同様ノ御振合

被仰付候段申来候、

六六八八

(朱書)九月 美濃、長門

一痛所等ノ申立ニテ依願致惣髮候者近年多人数ニテヨヒ、

就中致医道候者ノ類此頃一統程相成、自然ト物每異様

ニ取仕立居候者モ間々有之候哉ニ相聞得不埒ノ至候、

依之以来差知候病者カ又ハ隠居体ノ者迄可被成御免候、

是迄致惣髮居逆モ不容貌ノ者ハ吟味ノ上剃髮可被仰付

儀モ可有之候、此旨向々へ不洩様可申渡候、

六六八九

(朱書)九月 長門

一鳥津筑後守殿御妹於増殿御事、御病氣ノ処先月六日被

成御死去候、

右ニ付、大御隠居様御孫、

御隠居様御娘ノ御統ニ

テ御式ノ御着服被為請、

太守様ニハ御従弟ノ御統故、

御同断御着服被為請管候へトモ、日数相過候付一日御遠慮被遊候、

六六九〇

(朱書)九月 長門
一 寺社奉行へ

大乘院覚昌

右ハ、此節權増正拜任(僧力)二付、年頭其外登 城ノ節御礼席等ノ儀左之通、

一年頭御祝儀二付 御目見ノ儀、外着座門首 着座ノ時々

一所ニ不被罷出事候間、御礼着座又ハ謁席畳目等ハ南

泉院權増正住職ノ節同様被仰付候、左候テ、謁等ノ節奏者番披露ノ儀共是迄ノ通被仰付候、

一何ノニ付着座門首一所ニ被罷出候節ハ杉ノ間へ被控居、外門首御礼修テ別立テ可被罷出候、

一控所ノ儀南泉院同前杉ノ間へ被仰付候、福昌寺一所ニ登 城ノ節ハ杉ノ間へ座構可有之候間、別々ニ可被控候、

一差立候所ハ御当地ニテモ対シ挟箱前備ノ儀被成御免候、

右ノ通被仰付候条可被相達旨申渡、可承向々へ可被申

渡候、

六六九一

(朱書)九月 長門
一 奥支配御役人身分ニ相掛候儀ハ於奥申渡有之、繼目・

家督其外家格ニ相掛候分ハ於表申渡事候処、右体ノ願書御例方へ差出候モ有之、又ハ支配頭へ相付候モ有之、(御方)

不同二候間、以来家格ニ相掛候右体ノ願書ハ御例方内見ニテ、夫々支配頭へ相付願出候様向々へ可致通達候、

六六九二

(朱書)九月 長門
一 近衛中納言様御事、先月十七日權大納言御推任ノ旨申

来候、

六六九三

(朱書)十月 安原
一 芸道並勤功等ノ御取訳ヲ以、代々御小姓与被召出候家

筋ノ者二男以下別立ノ儀、向後願出候共三代迄ハ被成御免候、乍然四代ニモヲヨヒ候ハ、全体ノ御小姓と同

様分家ノ依程合ハ別立可仰付候、且又学文武芸御用立候御取訳ヲ以、代々御小姓与被召出候家筋ノ者、二男

以下別立ノ儀ハ数代連続ノ御小姓与家筋同様ノ御取扱
可被仰付候、

右ノ通、此節被究置候旨被 仰出候、

六六九四

(朱書)十月 美濃・安房・長門・内蔵
一去ル酉年ヨリ御年限ヲ以嚴敷御儉約被 仰出置、精々

御取縮等有之候ヘトモ、其詮相立兼、当時猶以御所帶
方御難渋付分テ御取縮向等ノ儀共追々被 仰出、其段
ハ委曲申渡置通候処、御儉約年限ノ儀モ当年迄筈合候
ヘトモ、右通ノ御時柄付又々来辰年ヨリ先五ヶ年引続
是迄ノ通御儉約被仰付候旨被 仰出候条、向々於御役
場猶又吟味ヲ尽シ、屹其詮相立候様精々心掛可取計候、
右ノ通、不洩様致通達、支配下有之向々ハ奉行・頭人
ヨリ可申渡候、

六六九五

(朱書)十月 安房
一先達テ於西丸 (家慶男) 御男子様御誕生被為 在候ヘトモ、思

召有之表向御弘メ不被遊候間、近々御弘メ可被仰出候、
御名ノ儀ハ ヨシ 嘉千代様ト被遊、 (家慶男) 御簾中様御養被遊候、

尤、追テ御弘メ被仰出候迄ハ只今ノ通相心得、御祝儀
等モ申上ニ不及候旨、從 公義被仰渡候段申来候、

六六九六

(朱書)十月 安房
一諸御用物東海道持夫賃年分過分ノ及金高、猶御時節柄

別テ御不益ノ事候間、以来左ノ通被仰付候、
一御国元ヨリ江戸へ被差越候御用物・御献上物又ハ格別
大切成御品等ノ外、御用物可成丈大坂ヨリ吉田喜平次
方樽船早駄便ヨリ差廻候様被仰付候条、東海道不差廻
候テ不叶御用物カ又ハ急成御用物ハ其訊細々大坂御留
守居へ問合申越候様可致候、猶其上於大坂吟味次第樽
船ヨリ差廻儀モ可有之候、
一江戸ヨリ御国元へ被差越候御用物モ右ニ準可取計候、
尤、早駄ヨリ大坂御留守居迄差廻置、大坂ヨリ御国元
へハ使宜次第可差出候、

一右通被仰付候付テハ海辺不順ノ節致延着儀モ可有之候
間、江戸御国元共ニ日限等有之御用物ハ其勘弁ヲ以前
広差越候様可取計候、
一飛脚使ヨリ御用封ノ外、持夫ニ相掛候御用物ハ不差越

様、乍然差掛不差越候テ不叶御用物ハ其訳向々ヨリ前
以得差図候様被仰付候、

右ノ通被仰付候、

六七〇〇

(朱書)十一月 美濃
一願遠島ノ事、依願島方居住、

右ノ通、此節名目被相替候旨被 仰出候、

六六九七

(朱書)十一月 安房
一嘉千代様御事、被遊 御官位候迄ハ御呈書其外 嘉千

代様卜可相認旨被仰渡候段申来候、

六七〇一

(朱書)十一月 美濃
一大龍寺玄証於本山氣弘執行相濟、頂戴之 台帖来月朔

日於御書院被遊 御覽候付、持參ノ節御本門相開、虎

六六九八

(朱書)十一月 安房
一公方様 (家齊) 右大将様 (家齊室) 御台様 (家慶室) 御簾中様 (家慶男) 嘉千代様

(家齊) 峯姫君様

右ノ通御順候旨被仰渡候段申来候、

番へ相渡、御書院御上段御庭ノ方御床涯連歌文台へ載
置、寺社奉行差添 台帖相披、文鎮可相載置候、

右ノ通、御出座前備置、 御覽相濟候以後最前ノ通可

相下候、

右、寺社奉行其外可承向々へ可申渡候、

六六九九

(朱書)十一月 安房
一於西丸御誕生ノ 御男子様、御名 嘉千代様卜奉称候

段、從 公義被仰渡候旨申来候、依之嘉ノ字名並実名

相用候儀遠慮、同唱ノ文字迄モ可遠慮候、

六七〇二

(朱書)十二月 内蔵
一左近様御実名久亮卜奉称候段申来候間、亮ノ字実名ニ

可致遠慮候、同唱ノ文字ハ不苦候へトモ、人々心入ヲ

以致遠慮候儀ハ其通可有之候、

六七〇三

(朱書)〔十二月 取次 田原喜左工門〕
一琉球館並島方其外藏方勤等申付候当人ヨリ御礼銀当秋

ヨリ差上候様被仰付候、尤、員数等ノ儀ハ追テ何分可
申渡候間、当年藏方勤等申付置候者ハ右ノ心得ヲ以罷
在候様可申渡事、

六七〇四

文政三年辰

(朱書)〔正月 長門〕
一 下代藏役人相勤候者、病氣ニ付親類看病方トシテ差越、

不行届儀ハ致心添等候儀依願申付来候ヘトモ、聞得ノ
趣有之、当春秋代リ申付置候者ノ内付励ニテ差越候者
ハ実々病氣候ハ、親類看病方迄ハ可差免心添等不相
成候、直ニ相勤候者ハ是迄ノ通可相心得候、此旨向々
ヘ不洩様可申渡候、

但、付励ニテ差越候者病氣ニテ藏勤難成節、締方横
目ヨリ其段申出候ハ、親類ヨリ差越、快氣迄ノ間致
心添等候儀ハ其節ノ吟味次第可申付候、

六七〇五

(朱書)〔正月 安房〕
一御用狩並作除狩等ノ節、依願被差越候御一門方並其御

役其外間伏立宿手当、案内夫・水夫、油・薪等ニ至リ
所受持ニテ諸手当致来候ヘトモ、当御時節柄過分ノ及
夫仕事候間、以来宿手当ノ儀ハ是迄之通ニテ、右外惣
テ自分用意被仰付候、左候テ、桜島並近在等小鳥認ノ
節モ右ノ振合ニ可相心得候、此旨向々ヘ致通達、可承
向ヘモ可申渡候、

但、右ノ節被差越候掛ノ向ハ勿論奥向等ノ内宿手当
等は迄ノ通、

六七〇六

(朱書)〔正月 安房〕

一嘉千代様御 直御祝付テ從 嘉千代様旧臘十一日 上

使御三殿様被遊御拝領物候段御到来候、

六七〇七

(朱書)〔正月 安房〕

一先年 一橋様ヨリ御讓ニ相成候大崎御屋敷、此節御

戻ニテ高輪御屋敷へ彼御方御屋敷被成御讓受段被仰進
趣有之、右ハ (寄直) 御隠居様御引移ノ筈ニテ御届迄モ相濟

居、当時御作事中ニ候ヘトモ、右通被仰進趣誠ニ無御
扱御訳合ニテ、当時御時節柄御費ノ儀ナカラ難被黙止
被懸其意候、

右ニ付、大崎ヘ引統候随姫様御抱御屋敷、御内実ハ御

方ヘ御讓受候間、御家作並右御屋敷共可被差上旨、是

亦被仰進候処、御家作ノ儀ハ以前ヨリ有来候分御貰、

新御造立ノ分ハ御引弘可有之トノ御事故入札弘被仰付、

御隠居様ニハ矢張白金御屋敷ヘ被遊御柄居咎候段申来

候、

六七〇八

(朱書)正月 安房
一大奥女中ノ内、妊娠付御誕生被為在候ハ、先御内分ノ

御取計被仰付、御丈夫被為成候上、御弘ノ咎候間、此

旨可承向々ヘ可申聞置候、

六七〇九

(朱書)二月 美濃
一大崎御屋敷ノ儀、先達テ 一橋様ヘ被進、新御家作ノ

分ハ御入用無之趣ニテ、御解除ノ上御讓渡ノ咎候処、

又々右御家作共御貰被成度トノ御事ニ付、被懸其意候

旨申来候、

六七一〇

(朱書)二月 内蔵
(青墨)
一 太守様来ル十五日五ツ半時被遊 御発駕候、

六七一一

(朱書)三月 美濃
一 藏方勤内々頼ニ任七名代差越候儀ハ御法違ノ事候処、

窮家ノ者共ハ逢合力候ヲ仕合存、頼ニマカセ相勤候者

モ有之由不可然事候付、以来右体ノ儀堅被差留候、若

違背ノ者ハ其節ノ成行ヲ以一涯重ク御取扱可有之候条、

屹下可相守候、

六七一二

(朱書)三月十九日 内蔵
一去ル丑年於高輪大奥御誕生ノ御女子様、御名 貢姫様

ト奉称候、最早御丈夫被為成候付、先月九日御用番土

井大炊様ヘ御届書被差出候段御到来候、

六七一三

(朱書)三月 内蔵
一去ル丑三月十六日於高輪大奥御誕生ノ御女子様、御名

貢姫様卜奉称、御順ノ儀ハ(重養女) 豊姫様御次ニ候条此旨奉

承知、貢ノ字並同唱迄モ名付居候人ハ可致遠慮候、

六七二四

(朱書)三月 内蔵

一高輪御屋敷へ引統候 一橋様御屋敷、先月五日此御方

へ御讓渡、大崎御屋敷ノ儀ハ彼御方へ御讓渡相濟候段

申来候、

六七二五

(朱書)四月廿二日 安房

一太守様御機嫌能、去ル朔日被遊 御参府候旨御到来候、

六七二六

(朱書)四月廿三日 安房

一今般於大奥 御誕生被為在候ハ、先御内分ノ御取計被

仰付候段ハ先達テ申渡置通候処、昨廿二日酉刻 御男

子様出生被為 在候、此旨可承御役々へ内々可申聞置

候、

六七二七

(朱書)四月廿三日 安房

一嘉千代様御不例ノ処、御養生不被為叶、先月十九日被

遊 御逝去候段御到来候、

六七二八

(朱書)四月廿三日 安房

一今度於大奥御出生ノ御男子様(弁舞男)、御名唯七郎様卜奉称候、

此旨可承御役々へ内々可申聞置候、

六七二九

(朱書)五月 安房

一先月十九日御老中様御連名ノ以御奉書、増上寺火ノ御

番松平阿波守様御代被為蒙 仰候段御到来候、

六七三〇

(朱書)五月廿七日 安房

一太守様御参府ニ付、先月十三日以 上使阿部備中守様(正體)

御懇ノ被為蒙 上意、同十五日御登城、御参府ノ御礼

被仰上候処、御懇ノ被為蒙 上意、御直御請被仰上、

諸事御先格ノ通被為濟候段御到来候、

六七二一

(朱書)五月 内藏
一式日又ハ不時御用ノ節、時々飛脚可差立旨申渡置候へ

トモ、書役・小役人等交代ノ者有之節ハ右飛脚ノ場ニ

テ中急申付儀モ可有之候、且又交代ニテ被差立候者色々

故障等申立延等申出時節、取後候テハ不可然事候条、

聊取違有之間敷候、

六七二五

(朱書)六月 内藏
一 一橋穆翁様御事被叙一位候付、向後一橋(位カ)一信様卜可奉

称旨、從 公義被仰渡候段申来候、

六七二二

(朱書)六月廿一日 内藏
一 此節 (黄久)大申様二百五十年御回忌御法事、今日ヨリ明後

廿三日迄寺役執行、

六七二六

(朱書)七月十六日 美濃
一 御隠居様御女子 瑞姫様御事、去年四月御出生被為

在候へトモ、未表向御弘メ無之候処、此間ヨリ御病氣

ニテ先月十九日辰刻御天亡被遊候段申来候、

六七二三

(朱書)六月 内藏
一 唐港御屋敷

右、先達テ御用地相成、家作迄モ此節都テ御内証様へ

被進候、

六七二七

(朱書)七月 美濃
一 瑞姫様御法名 智涼院殿蓮草泡心大禪童子(女カ)

右之通奉称候段申来候、

六七二四

(朱書)六月 安房
一 芸道並勤功等ノ御取訳ヲ以、代々郷士又ハ諸与・与力

六七二八

一御靈々様御年回ノ節、御産穢被為 在候ヘトモ、以來(朱書)七月 安房

御法事御執行被仰付候、左候テ、初日並(空白)散御半齊

御代參ノ儀ハ御穢明ノ上被相混一所ニ可被仰付候、御

施餓鬼 御代參、頓写並御(空白)合御名代ノ儀ハ流ニテ御

式向ハ 御名代等為有之同前被仰付候、頓写候テ硯水

次方ノ儀ハ、於福昌寺ハ慈照軒ヨリ可相勤候、

右ノ通被仰付候条、此旨南泉院其外御寺々へ可被申渡

旨、寺社奉行へ申渡、可承向へモ可申渡候、

六七二九

(朱書)七月 美濃

一若殿様御代春中御家御伝来御元服ノ御規式可被遊旨被

仰出候条、御手当ニ相掛儀モ候ハ、取シラへ申出候様、

可承向へ可申渡候、

六七三〇

(朱書)八月五日 安房

一立姫様御卒去二付、太守様御忌二十日・御服九十日、

大御隠居様御忌十日・御服三十日、御隠居様御忌二(重書)

十日・御服九十日被遊御請候、

六七三一

一立姫様 御法号 了源院殿靜譽慧光貞珠大姉(朱書)八月 安房

右之通候旨申来候、

六七三二

(朱書)九月七日 内藏

一珍之助様御事、去年二月芝於大奥御出生被為 在候へ

トモ、未表向御弘メ無之候処御病氣有之、先月十六日

被遊御天亡候旨申来候、

六七三三

(朱書)九月 内藏

一珍之助御法号 麗苗院殿秋質幻香大禪童子

右之通奉称候段申来候、

六七三四

(朱書)八月 安房

一近衛様御事、御助力等ノ儀 故前左府様御在世中通可(基前)

被成進旨被 仰出候、

六七三五

(朱書)八月 安房
(重兼男、為次郎)
一麗珠院様

右、御忌日七月五日ニテ候ヘトモ、七月三日ニ被相替候旨被 仰出候段申来候、

六七三六

(朱書)九月 美濃・駿物・安房・内藤
一御領國中風俗等ノ儀ニ付テハ先年以來度々被仰出置候

通弥以可相守候、御役柄ノ所へ出入沙汰ニ付テハ夫々被定置候付、其段申渡ノ趣モ有之候処、頃日御用ノ外間ニハ大目付以上宅へ無遠慮差越候向モ有之、不可然事候条、向後屹ト不相成候、勿論御目付並奥向ノ面々ハ是以被定置候通猥相交間敷候、且又無益ノ参会等致サス様トノ儀モ兼テ申渡置候通、何篇質素ニ可相嗜候、今度 御介助御弁退^(辭也)ニ付テハ、此已後緩セノ儀共有之候テハ 大御隠居様被為對御申談不被為 在、御役々猶更迷惑相成事候間、是迄追々被仰出置候御趣意聊無^(却也)忘布可相守候、先日モ分テ申渡置候ヘトモ、御政事一涯被為入 御志御事候付、猶更此段申渡候、

六七三七

(朱書)九月 安房
一年頭、八朔御礼被仰付候面々、進上物代銀前日御納戸

藏へ上納イタス事候ヘトモ、以來々年頭ハ前年十二月廿五日限、八朔ハ七月廿五日限上納被仰付候、左候テ、御納戸藏役人預書ヲ以奏者方へ御届申出候儀共都テ是迄ノ通被仰付候、

六七三八

(朱書)十月廿日 美濃
一太守様御儀、先月朔日 御登 城被遊候処、御礼後於

御白書院縁側御老中様方御例座、御用番青山^(列也)下野守様^(忠格)ヨリ 大御隠居様御隠居後御国政御介助ノ儀、此度被為及御断候段口達 上聞候処、御老年迄格別御心添ノ儀トモ御一段ノ御事候旨御沙汰被為 在候段、御書付ヲ以被 仰渡候旨御到来候、

六七三九

(朱書)十一月 駿物
一今度 大御隠居様御介助 御辞退ニ付、格外御省略御

手細ニテ御付御役場御引取等被仰付候旨、別紙二通ノ通申来候、

別紙二通略ス、

六七四〇

(朱書)十一月 監物
一 中山備前守様

右、九月十五日御両敬被仰合、万石以上ノ御大名様方
ノ御相シラヒ候旨申来候、

六七四一

(朱書)十一月 監物
一 白金御抱御屋敷御年貢金ノ儀、是迄表方ヨリ御上納有

来候ヘトモ、此節御取縮ニ付、以来ハ白金御統料ノ内
ヨリ年々十一月表方へ被差出、時々御上納ノ節ハ表方
ヨリ取計置、追テ返金引^(空白)有之候筈ノ旨申来候、

六七四二

(朱書)十一月 監物
一 白金御屋敷へ引^(統少)候島津筑後守様御拝領屋敷、此節御

借地ニテ御一団被成度御届被仰上候処、其通被成御聞
置候旨被仰渡候段申来候、

六七四三

(朱書)十一月 監物
(音興男)

一 珍之助様御天亡ニ付 公辺へ御忌服ノ御届被仰上候節、
御内実ハ 御五男様ニテ普之進殿御舍弟様ノ御統ニ候
処、普之進殿ニハ未ダ公辺御届等相成候儀毛無之候付、
別段ノ思召ヲ次御四男様ノ筋ニテ御届被為 在候旨申
来候、
(以力)

六七四四

(朱書)十一月 監物
(音真女 瑞絶)

一 智涼院様御忌日六月十九日ニ候ヘトモ、十七日ニ被相
替候旨申来候、

六七四五

(朱書)十一月十四日 美濃・監物
一 太守様、先月十五日月次御登 城被遊候処、御礼後御

居残被成候様大御目付水野主殿頭殿ヲ以御達有之、御
礼^(忠通)濟御白書院於黒鷲ノ御杉戸涯御老中様御列座、水野
出羽守様ヨリ御台様兼々^(家齊室、茂施)厚キ御願ニ付、以来御礼席ノ
儀、年始ハ御白書院、月次御黒書院、五節句・八朔御
白書院ニテ御礼被仰上、若菜ノ御礼ニモ御登 城候様

御書付ヲ以被仰達候、且又朔望其外御登 城ノ節々大廊下下ノ御休息所へ可被遊御座旨、是又出羽守様ヨリ水野主殿頭ヲ以御書付ニテ被仰達候付、御伺ノ上黒鷲ノ御杉戸前ニテ御老中様御列座御礼被仰上、直ニ西丸へ御登 城、当日ノ御出仕相濟候後、前文ノ御礼ヲモ御老中松平能登守様へ被謁被仰上候旨御到来候、

六七四六

(朱書)十一月 監物(重兼女、敬應)
一四月廿日 淨信院様御正忌日並年頭・益・歳暮当番頭

御代参

右ハ、三十三回御忌迄月次御代参等被仰付候筋被究置候処、右御忌御法事被為濟候付、以来 (重兼女、悟應) 照雲院様ヨリ (重兼男、豹治郎) 宝台院様迄御格 一靈様御同様御正忌日御年回並年頭・益・歳暮、当番頭 御代参被仰付候旨被仰渡候段申来候、

六七四七

(朱書)十一月 内藏)
一諸人依願拜借又ハ御取替銀被仰付置候者、現銀返上難叶、持高ノ内永代上功願出候節ハ於向々貧富等委細相

糺、拜借銀依多少相当ノ所ヲ以致吟味可得差因候、尤高差上候上八年々所務差引ニテ拜借銀不目成内ハ容易ニ高直被成御免間敷候、左候テ、高功高差引都テ目成候節諸人申請可被仰付候、所務差引年府ノ儀ハ是迄ノ通申付候、

六七四八

(朱書)十一月 監物)
一苗姫様御儀、立花左近将監様へ御縁与、追テ御婚姻可

被為整旨、去年御願濟ノ処、御内々無御扱儀有之、御双方御熟談ノ上御離縁ノ御届書、先月十一日被差出候段御到来候、

六七四九

(朱書)十二月 安房)
一御下国二付 御道中步行御供ノ士以上着服ノ儀、御発駕 御着城 御船渡 御開所等兼テ被究置候、惣御供ノ場所其外目立候所迄是迄ノ道旅服ニテ、平日ハ股引・半天相用候様被仰付、尤、其身者ノ内自分支度ニテ御供相勤候者共、長半天・野羽織・丸羽織ノ儀ハ勝手次第被仰付候旨申来候、

六七五〇

(朱書)十二月 安房

一 貢姫様御事、丑三月十六日御誕生ニテ当年御四歳被為

成候処、御差支被為在候付、子ノ御年ニテ当年五歳ニ

被遊御年増候旨、(重書)大御隠居様御沙汰被為 在候段申

来候、

六七五一

文政四年辛巳

(朱書)十二月 美濃 一 六月十七日 智涼院様

右御正忌日迄、御精進被相立候、

六七五二

(朱書)辰十月 一 琉球館並島方・蔵方等御心付被仰付候当人ヨリ御礼銀

差上候様被仰付候旨先達テ申渡置候、右ニ付テハ諸人

迷惑ニモ可存事候ヘトモ当御時節柄難被黙止、右ノ通

被仰付候旨御沙汰ノ趣有之、御礼銀員数等左ノ通、

一 琉球館開設並蔵役書役ノ儀(筋力)ハ当分相勤居候者共へ

代合被仰付置候、(御心力)「口」付当人ヨリ先キ三代リ御礼銀差

上候様被仰付候、尤、付属料定無之二付、時々ノ応付

属料高一貫目ニ付六十目ツ、ノ割ヲ以可差上候、

一 砂糖蔵役人並手伝ノ儀、当分相勤居候者共へ代合申付

置候、御心付当人ヨリ先キ三代リ右同断一貫目ニ付三

十目ツ、ノ割ヲ以可差上候、

一 道之島代官並付役ノ儀ハ来巳春渡海被仰付候、御心付

当人ヨリ先キ三代リ右同断一貫目ニ付四十目ツ、ノ割

ヲ以可差上候、

一 道之島詰見聞役ノ儀ハ当春罷下り候者共ヨリ先キ三代

リ詰相仕廻罷登候上、左ノ通、

一 大島見聞役一詰一人前御礼銀三百目ツ、

一 喜界島・徳ノ島右同六百目ツ、

一 沖永良部島右同四百目ツ、

一 諸所下代出物蔵役人ノ儀ハ付属料一貫目ニ付三十目ツ、

宛ノ割ヲ以当辰春秋代リ申付置候、御心付銀当人ヨリ

先キ三代リ被仰付候、左候テ、御心付其身直ニ差越相

勤候者ハ、春代リハ代合ノ上其年ノ七月限、秋代リハ

十二月可致上納候、尤、苦勞銀引替申付候蔵方ノ儀ハ

不及御礼銀候、

但、去年申付置候蔵方ノ儀ハ来巳二月限可致上納候、

左候テ、以来ノ儀ハ四月限上納可致候、

一 鹿尻島与・小野与・桜島与ハ不及御礼銀候、

右之通被仰付候条、於向々無手拔上納申渡候様可致取

汲候、此旨可申渡事、

六七五三

(朱書)正月 監物

一 付郷士ノ儀、其預リ郷何方郷士ト相唱、書付等ニモ其
通認来候ヘトモ、以来何方預リ郷士ト預リノ文字相加
候様被仰付候、

六七五四

(朱書)正月 内蔵

一 中山備前守様御家内 御母寂光院様 奥方於丞様 御
妹於祐様 御弟中山丹治郎様 御女子於錦様

御精進日 朔日 三日 六日

右ハ、備前守様御儀、御両敬被仰合、万石以上ノ御大

名様ヘハ御相シライニ候段ハ先達テ申渡通ニ候、就右

彼御方御家内並御精進日、右之通候旨申来候、

六七五五

(朱書)三月 監物 (齊興男、珍之助)
一 八月十六日 麗苗院様

右御正忌日迄、御精進日被相立候、

六七五六

(朱書)四月五日 内蔵

一 唯十郎様御事、去年御出生被為 在候ヘトモ、思召有
之表向御弘無之候処、御病氣ニテ御養生無御叶、今申
刻被遊御夭亡候、

六七五七

(朱書)四月 内蔵

一 唯十郎様御法名 光臨院殿浮玉幻藻大禪童子
右之通奉称候、

六七五八

(朱書)四月 内蔵

一 又三郎様御実名 忠方様ト奉称候付、右御実名ノ字且
又唱、同様ノ名乗ハ早速可相改候、

六七五九

(朱書)四月 内藏

一立花左近將監様

(齊直女)

右ハ、苗姫様御離縁ニ付テハ御近親ノ場ハ被相除、御

両敬ハ是迄ノ通ニテ、以来取替等ノ儀無之、年頭其外

御吉凶・御祝・御見廻等ハ御留守居奉礼ヲ以御互ニ被

仰進候旨被仰合候段申来候、

六七六〇

(朱書)四月 内藏

一英祥院様

右御忌日、正月十一日ヲ八日ニ被相替候、

(重豪男、乗之助)

天苗院様

右御忌日、三月七日ヲ五日ニ被相替候、

右之通被相替候段申来候、

六七六一

(朱書)四月七日 内藏

一若殿様御事、先月四日

(齊興)

太守様御加冠、御家御伝来ノ

御元服ノ御式有之、御名又三郎様ト御改、御実名

忠方様ト奉称、御作法万端御先格ノ通首尾能被為濟候

段御到来候、

六七六一

(朱書)四月十三日 内藏

一此節、道仏様五百五十年御回忌御法事被為濟候、

(忠時)

六七六三

(朱書)五月 内藏

一 寺社奉行へ

称名院

右ハ、不断光院儀着座門首被仰付候付、末寺ノ内称名

院並外二ヶ寺 御目見寺被仰付度旨、不断光院願被申

出趣有之、願之通称名院迄 御目見被仰付、寺社奉行

証文寺ニテ住替ノ節中紙三束、年頭御茶五袋進上被仰

付候、

右之通可被申渡旨申渡、可承向へモ可申渡候、

六七六四

(朱書)五月 内藏

一御趣法方調子掛ノ文字、以来子ノ字相除調掛ト相認候

様被仰出候段申来候、

六七六五

(朱書)五月(取次田原喜左五門)
一下代藏役人名前替ノ儀ハ限月究置候儀ニハ候ヘトモ、

御心付当人ヨリ御礼銀上納相濟候上、名前替可申付候
条、猶又取違有之間敷候、此旨可申渡事、

六七六六

(朱書)五月(監物)
一末姫君様(家齊女) 喜代姫君様御事、(家齊室、茂姫) 御台様御養被 仰出候

段從 公義被仰渡候旨申来候、依之右唱ノ名付居候者
ハ可致遠慮候、左候テ、 喜代姫君様御事喜代卜続候
名並外ノ文字ニテモキヨト唱候名ハ末々迄モ遠慮可仕
候、

六七六七

(朱書)五月廿三日(監物)
一先月十五日以 上使青山下野守様(忠裕) 太守様御国許ヘノ

御暇御給、御先格ノ通被遊御拝領物、從 右大将様モ(家慶)
以上使酒井若狭守様被遊御拝領物、同廿八日御登 城、
御礼被仰上候処、御懇ノ被為蒙 上意、御馬被遊御拝
領候段御到来候、

六七六八

(朱書)五月(監物)
一先月十九日増上寺火ノ御番御代松平陸奥守様へ被 仰

出、御引渡相濟候段申渡候、

六七六九

(朱書)五月(式部)
一町人其外下人類・寺門前者ノ内、長脇差ヲ帶致徘徊候

者段々有之由相聞役、(得力) 右二付テハ先年蔽敷申渡置趣モ
有之候処、致違背別テ如何ノ至候、向後屹ト可相慎候、
依之見聞役ヲモ相掛置候条、右体ノ者見当候ハ、名前
承届、帯居候脇差取揚、屹ト御咎目可申付候、

六七七〇

(朱書)五月(長門)
一火頭巾前立物ノ儀、御例役以上相用候儀ハ勝手次第、

其以下ハ一統被差留候段、於江戸申渡有之候付、御当
地ノ儀モ其通可相心得旨、向々へ可申渡候、

六七七一

(朱書)七月(内蔵)(齊興男、唯七郎)
一四月七日 光臨院殿様 御正忌日御精進日被相定候、

六七七一

(朱書)七月 監物・安房・長門・内藏

一此節 御筆ヲ以被 仰出候者、連年無御拋御入備打続

御所帯向御難泲成立、大坂表ノ御操合(操力)モ至テ六ヶ敷、

夫故重出米銀ヲモ被仰付、御領國中連々困窮ノ砌一

統猶難泲ノ積卜被 思召上候処、此両三年ハ大坂御仕

登セ差繰モ不都合ニテ、猶又御難泲ニ付掛御役々種々

及吟味候ヘトモ、積年ノ屯速ニ其詮モ不相見得、被

聞召通誠ニ不容易御時宜ニテ、公刃御勤向モ往々御

滯相成候テハ不可然事候間、御国家ノ御為メ不被為得

止事、当年ハ御痛所ニテ御滯府ノ御舍ニ候、左候ヘハ

長々御留守ニモ相成候間、御在府御在国ハ無差別勤候

テ 御領國中取締、其外諸篇ニイタリ 太守様 (齊興) 大御 (重憲)

隠居様追々被 仰出置趣聊無忘却相守候様、扱又御一

門方ヲ初家柄ノ面々モ自ラ其心得ニテ有之様卜被 思

召上候ヘトモ、問ニハ若年ノ向ナト心得違モ有之事故、

猶以万事可被相慎、且又去年 大御隠居様御介助御辞

退モ被為在候御事故、猶又御下知不被為行居候テハ御 (插力)

申訊モ無之候付、御政事向万端行居 両御隠居様被為
安 尊慮度朝暮 御心痛被遊候段分テ被 仰出、誠ニ

以奉恐入次第二候条、未々迄モ一統右ノ御趣意深汲受、

屹度取違無之様心掛、奉安 尊慮候様可相励候、此旨

諸大身分・与中・支配中其外可承向々へ可致通達候、

六七七三

(朱書)七月 長門

一酒井大学頭様 (忠礼)

右御嫡子□之進様御事、奥平大膳太夫様御躰ニテ格別

ノ御間柄ニ被為成候付、今般御両敬被仰合候段申来候、

六七七四

(朱書)七月 長門

一酒井大学頭様 御家内 御父御隠居酒井石見守様 御

嫡子酒井□之進様 大学頭様奥方様 □之進様奥方様 (齊興)

御二男酒井大助様 御三男酒井鍊三郎様 (忠憲)

御精進日 六日 八日 十一日 十六日 十九日

右之通申来候、

六七七五

(朱書)八月廿二日 内藏

一本多下総守様御息女於厚様、先月廿日被成御天亡候、

六七七六

(朱書)八月廿七日 内蔵

一勝之進様 (齊皇男 定勢) 文化十四年丑六月二十九日御誕生、

一春姫様 (齊皇女) 文化三年辰八月十九日右同、

右ハ、白金於大奥御誕生、御名右之通奉称候、左候テ、

御順ノ儀、勝之進様御事(御方) 閑姫様御次、春姫

様ニハ、勝之進様御次ニテ、最早御丈夫被為成候付、

此節御弘メ有之候、

六七七七

一春姫様御事、(朱書)九月 内蔵

(齊皇) 太守様御養女被遊、御順ノ儀ハ、(齊皇女) 祝姫

様御次ニ被 仰出候、

六七七八

一春姫様御事、(朱書)九月 監物

(頼徳) 玄蕃頭様御嫡子有馬仙太郎様へ御縁与

御内約被為 在、先月九日御互ニ御引結ノ御使者被遣、

御祝詞・被遣物等御先例ノ通被為濟候段御到来候、

鹿児島県史料編さん関係者

史料編さん	東京大学	史料編纂所所長	横山伊徳
顧問	国立歴史民俗博物館前館長	宮地正人	
	鹿児島大学名誉教授	五味克夫	
	九州大学名誉教授	安藤保夫	
委員	原口泉	晋哲哉	
	三木靖	日正守	
	宮下満郎	塩隈郁夫	
	堂満幸子		
鹿児島県歴史資料センター黎明館			
館長	牛之濱道久		
調査史料室長	徳永和喜		
学芸専門員	栗林文夫		
資料調査員	高原千鶴	樺山美和	
編集	梶ヶ山梨沙	黒川智世	
	中野尚子		

鹿児島県史料

薩摩藩法令史料集五

平成21年2月21日発行

非売品

編集 鹿児島県歴史資料センター黎明館

発行 鹿児島県

印刷所 株式会社 きょうせい